
月の記憶 * 月夜の序曲編 *

kaguya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の記憶*月夜の序曲編*

【Nコード】

N7152X

【作者名】

kaguya

【あらすじ】

ラブ&コメディ&ちょっとミステリアスなSFを含んだ高校生活いざスタート！

*名前も知らない初恋の相手、いきなり現れる許嫁！？まさかの同棲生活！！友達以上の三角関係：これは友情？同情？恋愛感情？現代のかぐや姫は女子高生だぜっ！！

*最古のSF小説「竹取物語」を題材にした現代版SF竹取物語を

ご覧あれ！

以前執筆していた「はじめまして〜もうひとつの竹取物語」の改良版です。

プロローグ01（前書き）

文字通りプロローグです。

オバーチュア
序曲なんてカッコイイ言い回しには特に意味はありません。ご容赦を。

この物語は竹取物語の固有名詞等をお借りしています。
当然フィクションです。登場する個人、団体：以下省略。

プロローグ 01

一人で過ごした千年の時。
貴方と過ごした千年の時。

私が犯した大きな罪。
何度も何度も謝りました。

お願いします。

この記憶を消さないで。
それ以外の罰ならなんでも受けます。

宵の明星輝く西の空。

夜はまだ始まったばかり。

もう一度千年経つのなら

この夜は明けますか？

私の夜は、明けますか……………。

*

まだ小さかった頃は近所の友達とかくれんぼや鬼ごっこ、ヒーローごっこに怪獣ごっこなんかもごく当たり前のようによっていた。

誰だってそうだろう？

男なら誰でも元気に外を駆け回って無邪気な幼少時代を送るものだ。

でもどうしてかな、俺がこんなにつまらない人間になってしまったのは…。

どうして
いつから

自分はどこで道を踏み外してしまったのか…。人間なら生涯に一度は考えるだろう。

道を踏み外すなんて大袈裟なことでもなくてもいい。本当にちょっとした失敗でもいい。

誰だって一度は後悔ってやつを味わう。

何かについて後悔をしたことがない人間は……、そんなやついるのか？

俺がつまらない人間になってしまった理由。それは案外明確だ。

「お前には富商に行ってもらおう」という父親の一言。

富商、つまり富士見商業高校の受験に合格することが中学生生活で俺に与えられた責務だった。

富士見商業高校は小中高エスカレーター式の学校で、大きな会社に勤める親を持つ子供や小さな自営業を営む家の子供、そして中には社長の子供なんかもいる。

富商卒というブランドだけで一流企業からのオファーだってくる。簡単な説明だが、つまり富商はかなり有名な学校というわけだ。

ここで問題が発生する。

小中高エスカレーター式の富商には本来高校受験という制度は取り扱っていない。富商に通いたければ小学受験に受かるしかないのだ。

だが、富商は中学三年の夏に一度だけ特別編入試験という意味不明な編入制度があり、毎年全国から数名の志願者がいるらしい。当

然合格基準は高い。

そして俺はその編入試験に受かるために必死に勉強した。中学生の青臭い青春、部活、恋愛、そんなものとは無縁の、ただ毎日勉強だけをこなす生活を約三年間送った。

結果、今日この日。中学生生活最後の日に、見事合格の通達を受けることができたというわけだ。

担任の教師から合格を知らされたときは特に喜ぶ様子も見せなかった。

ただこの勉強漬けの生活から解放されたことだけが満足だった。思うことは、それほどつまらない人間になってしまっていたのかということだった。

卒業式もつまらなかった。

中には泣き出す生徒もいたが俺には理解し難い。なぜ泣く？

卒業式が終わり、俺と同様卒業生は同じ部活動の後輩と写真を撮ったりしていた。

当然俺はすぐ帰宅。我ながら本当につまらない人間だ。

誰とも会話することなく歩き出すと後ろからいつもの似非関西弁が俺を呼び止めた。

「よお爺さん、どうしたんや浮かかない顔して」

彼は俺の唯一の友達で、俺と同じく四月から富士見商業高校に通うことになる土御門^{つちみかど}。

俺が振り返ると土御門はふざけた顔でニヤニヤと笑う。本当に気持ち悪いやつだ。

しかしこいつは顔に似合わず物凄く頭がいい。ちなみに三年間成

績は学年トップだった。

「なんだよ土御門、今日も気持ち悪いな」

「そないなこと言うなやー。そうそう、爺さんどうせ明日から暇人やる？富商見学でもしようや」

そりゃあ暇人さ、お前以外に友達はいないからな。

そういうわけで俺は当然富商見学の件を承諾したのだった。

*

土御門は俺のことを爺さんと呼ぶ。それはこいつに限ったことではないのだが、「爺さん」は俺のあだ名だった。

見た目が老けていたわけではない。身長、体重、ついでに顔も、容姿はごくごく普通だと思っている。しかしどうして「爺さん」と呼ばれていたのかというと、国語の時間に習った竹取物語が原因である。

名前は竹本光^{たけもとひかる}。

これだけでわかるだろうか。お爺さんが、根元が光る竹を切るとこらから始まるのが竹取物語なのだが。竹の根元が光る、竹本光

笑えるだろ？

当時クラスメートだったやつらが面白がって俺のことを「爺さん」と言いだしたのが原因だ。

でもさ、これなら光る竹の中にいた「かぐや姫」があだ名になってもよさそうなのに……。どうもクラスメートは俺を爺さんにしたかったらしい。おかげで今日卒業するまで爺さんと呼ばれ続けたぜ。

だがそれも今日で終わり、春からは俺のことを知るやつは土御門

だけの高校に通うんだからな。編入試験の結果はたぶんギリギリなんだろうが、まあ無事に進学することができて内心実はホッとしていたりする。

それから土御門と話しながら俺は家に帰った。

プロローグ02

翌日。

専業主婦である母親に起こされて目を覚ます。

「今日は土御門くんと富商の見学に行くんでしょ、早く起きなさい

」

昨日、俺が富士見商業高校ふしみしょうぎょうこうの編入試験に合格したことを聞いてから母さんは上機嫌だ。昨夜の晩飯は誕生日の晩よりも豪華だったし…。

しかしどうして両親はここまで富商にこだわっていたのだろうか。

うちは個人経営の会社ではないし、父さんも有名会社の社員なん

かじゃ…。

ん？

そういえば父さんが何の仕事をしているのか知らなかったな。まあその辺のサラリーマンだろう。良くも悪くもうちは平凡の家庭だし。

そんなこんなで昼過ぎに土御門が家に迎えに来た。

「爺さん、はよ行こうや」

こいつは元氣と気持ち悪さだけが取り柄だなと思う。

テキストに返事をして歩いて出かけることにした。

実は、富士見商業高校は俺や土御門の家からそう遠くない場所にある。徒歩10分くらいかな。

しかし富商に通う生徒はバス通学だったり寮生だったりで、このあたりから富商に通うのは俺と土御門が初めてかもしれない。

坂道もなく、わりと平地なので10分もする頃には富商の正門前

に着いていた。

見頃まであと少しだろう桜の木が行内外に立ち並ぶここは高等部の校舎。富商は三学年合わせても400人いないくらいなのでそこまで大きな建物とは思わなかった。

だが有名学校を前に俺たちは言葉を失ってしまふ。

しばらく続いた無言の時間。それを打ち破ったのは三階建ての校舎の、その三階の窓から聞こえる甲高い女の声だった。

「こらー！その侵入者！」

声の主は明らかに俺たち二人に向かって叫んでいる。

侵入者って…、まさか俺たちのことか？

まだ校内には入っていないのだが。というツッコミはさて置き、俺たちは驚いてその場から逃げようとする。

「ここは関係者以外立ち入り禁止よ！」

着た道を逆走しようとする後ろを振り返ろうとした時、目の前に長い髪を両サイドで結ったツインテール小娘が現れた。

「はやっ！！あの距離を！？一瞬で！？」

現れたこの人はどう考えてもこの生徒だろう。

ベージュでチェック柄のスカート、紺のカーディガンから見える白いシャツがまぶしい。俺も来月からはこの制服を着ることになるんだな。

なんて悠長なことを考えている場合ではない。

「さっき三階くらいにいたよね！？瞬間移動！？」

はあ？と言わんばかりの顔で、身長150センチくらいの小さなツインテール娘は言った。

「うう…、アンタが何を言ってるのかさっぱりわからないんだけど…」

こっちが「はあ？」という顔をした気分だね。

ここから校舎まで50メートルくらいか、プラス三階にいたとな
るとどう考えても一分以内でここに来られるわけがない。まして一
瞬だなんて…。

名門富士見商業の生徒は瞬間移動くらい使えて当たり前ですか、
そうですか。

それから俺と土御門が何も話さないでいると、少女はなにやら誇
らしげな表情で言った。

「あたしは来月から高等部の生徒会役員なの！ふふーん、驚いた？
ねえ、驚いた？」

と、言われましても…。

「さっそく初仕事のようなっ！さあアンタたち、生徒会室まで来て
ちようだいっ！」

*

ツインテールの言われるままに生徒会室まで連行され、関係者以
外立ち入り禁止の富商敷地内の侵入したことでここのお偉いさんか
らお咎めを受けるとばかり思っていた。

しかし、訪れた生徒会室でお咎めを受けたのは俺たちではなかつ
た。

「もう、どうしていつも早とちりばかりするのよ。こういうことは
警備員さんの仕事でしょ？」

「うう…」

「ねえ聞いている、雫？」

校舎の三階にある生徒会室。大きな机でなにかの書類をまとめて
いた生徒会長らしき大人っぽい女子生徒が、俺たちの目の前でツイ

ンテールに説教を始めた。

大人っぽいといえば、この生徒はツインテールと違って紺のカーディガンを盛り上げる迫力ある胸元が魅力的だ。

今のはなかったことにしてくれ、ただの妄言だ。

そうそう、さっき聞こえたがツインテールの名前は雫というらしいな。

ツインテールに説教をし終えた女子生徒が俺に目を向ける。

「本当にごめんなさいね。でもまさかあなた達が編入試験に合格した噂の中学生とは思わなかったわ」

「あ、はい…。なんかすみません…」

「やだ、そんなにかしこまらないで。私はあなた達と一つしか学年は変わらないから。あ、私は姫路希^{ひめじのぞみ}。四月からここの生徒会長なの。よろしくね」

そう言うつと姫路さんはにっこり笑ってくれた。

ちなみにツインテールは姫路さんの隣で頬を膨らませて俺たちを睨んでいた。

うむ…。

どうやらこのツインテールは来月から同じ高等部の一年のようだが…、あまり関わらない方がよさそうだ。

平和に三年間を過ごすためにはな。

話が終わり、俺と土御門はもう帰っていいらしい。

そもそも何も悪いことをしていないのに、悪いことをした気分なのはなぜだろうか。

「雫、あなたも帰っていいわよ。というか、生徒会の仕事は四月か

らでいいから」

「でも…！希先輩っ！」

「熱心なのはいいことだけど、あんまり張り切りすぎないようにね」
「はい……………。わかりました…」

生徒会室から廊下に出ると中から二人の声が聞こえた。

あのツインタールの生徒はとんだおてんば娘のようだ。

まあ、何かに熱心なのはいいことだと思っぞ。やりすぎは良くないけどな。

*

「爺さんや」

「なんだい婆さん」

「誰が婆さんや！」

「冗談だよ。で、なに？」

これ以上校内には居づらかったので俺たちは帰ることにした。

その帰り道の途中で土御門が話す。

「今日は爺さんにはめずらしくラッキーな展開にならんかったやん」

「だから俺はラッキーなんかじゃないって」

どうしてだか土御門は俺のことをラッキーなやつだと言う。

以前俺にかなりラッキーなことがあったらしい。それが何かは土御門自身覚えていないそうで、しかしそれは超が付くほどラッキーな出来事だということは覚えているという。

お前の脳の記憶機能はどうなっているんだよ。

ちなみに俺はまったくと言っていいほど覚えていない。

中学の三年間はラッキーとは無縁の生活だったし。

でも唯一心当たりがあるとすればそれは中学一年の秋くらいの

ことかな。

どこだったか場所は覚えていないけど、それはいわゆる初恋ってやつ。

うーん、確か公園かどこかだろうか。違つかもしれない。

まあ、そこで出会った女の子に一目惚れしたっていう面白くもなるともない話さ。

その子がどこの誰だかも知らないし、言ってしまうえば名前すら知らない。

でも、つまらなかった俺の中学三年間を思えばその出来事はラッキーなのかもな。

「ちょっとアンタたち待ちなさいよ！」

二人でどうでもいい話をしながら歩いていると、ついさっき聞いた甲高い声が後ろから聞こえた。

振り返ってみる。やはりあのツインテール娘だった。

「なんだまたお前か。着いてくんよ」

「ひつどい、なにその言い方！アンタたちが編入生だかなんだか知らないけど、本来エスカレーター式の富商に悪影響を与えないように生徒会役員のあたしが目を光らせて監視してあげるわ！生徒会役員のお・た・し・が！！」「」

うわ、それ最悪…。

とは口に出して言えないので無視して歩き出すことにした。お前みたいな騒がしいやつとは関わりたくないんでね。

しかし妖怪ツインテールは歩き出した俺の手をあるうことか掴んで引っ張りやがった。

「待ちなさいって言っ…、うわっ、きゃっ…！」

「いつてー!!」

手を引かれた俺は後方に勢いよく倒れこんでしまった。

「なにしゃがる!」

ぶつけた後頭部を押さえながら叫ぶ。

「うわわわわわ、近い近い近い近いっ!離れてよっ!ー!きゃっ、ちよっ、どこに手置いてんの!早く離れてー!」

ぎゃーぎゃーと叫びまくるツインテール。

現在俺は片手で後頭部を押さえ、もう片方の手はがっしりとこいつの手を握っていた。そして何より鼻が触れそうなのこの顔の距離…。

「うわっ、ごめん!」

俺は慌てて飛び退いた。

ツインテールは顔を真っ赤にして目をつむり、そして今なお倒れたままの状態ですをバタバタさせていた。

あのさ、どうでもいいけどスカート押さえたら?

落ち着きを取り戻したツインテールはスカートを押さえ立て立ち上がった。

「お、覚えときなさいよねっ!」

お前みたいなやつは忘れる方が難しいぜ…。

「アンタ名前は」

「普通聞いた方が先に名乗るべきじゃないか?」

「ぐぬぬ…、月夜見寧よっ!」

「あっそ」

「アンタも言いなさいよ」

黙っていると、どこか悔しそうな顔で睨んでくる。しかしそう睨まれては困るのできちんと名乗る俺。

「竹本光」

「ふーん」

聞いておきながらその反応はすこしムカつくぞ。

「じゃ、あたし帰るから」

不機嫌丸出しでそう言っているとツインテールは、もとい寧ろは走って行ってしまった。

そして「やつぱり爺さんラッキーやん…」と土御門が小さくつぶやいていたが、どう返事をしていいのかわからないので無視して歩き出すことにした。

プロローグ03

時は過ぎ四月。

小中高エスカレーター式の富士見商業高校ふしみしょうぎょうこうには入学式なるものはなかった。

先月まで中等部三年生だった生徒がそのまま高等部にかかるだけなので入学式なんてものは省かれたのだろう。

しかしまあ、なんにしても今日から俺は富商高等部の一年になったわけだ。

掲示板に張り出されたクラス分けによれば俺のクラスは一年一組らしい。

これも何かの縁かな…。

教室に入り五十音順に並べられた席に座る。俺の後ろは土御門。俺の名字が竹本で頭文字は「た」、土御門が「つ」だから納得はいくが。

はい、ここで納得がいけないことが一点。

隣があのだ妖怪ツインテールとはどういうことだ、何かの嫌がらせか？

そりゃあ月夜見つきよみで頭文字が「つ」だから可能性はあるにはあるのだが…。

「あらヒカル、ずいぶんと久しぶりじゃない。今日からみーっちりと監視してあげるから覚悟しなさい」

チビのくせに見下すような目で見ると、腹が立つ。それに第一声がそれかよ。

「誰に監視されるって？」

「生徒会役員のお・た・し・に！」

はあ……。どうやらこいつは自分が生徒会役員なんだと天狗になっているようだ。そんなに偉い立場なのか？生徒会役員って。

「どうして監視されなくちゃいけないだよ」

「ふんっ、アンタみたいなやつは規律を乱すって決まってるの！」
「決まってるーよ。」

それに中学の時は真面目を絵に描いたような人間だったんだぜ？

「なあ雫ちゃん、俺のこと覚えとる？」

後ろの席の土御門が今日も絶好調の気持ち悪い顔で雫に声をかけたようだ。

「アンタ……………、誰？もしかして噂の編入生？」

「……………」

笑いを堪えることがこんなに難しかったなんて思いもしなかったな。

土御門のやつはしょぼくれた顔で机に突っ伏し、雫は本当に覚えていないように首を傾げていた。

*

ここで少しだけ俺が通うふしみしょうぎょうこう富士見商業高校について説明しよう。

富士見商業高校。通称、とみしょう富商は小中高一貫のエスカレーター式の学校で、一学年が四クラス、高等部の全生徒を合わせても400人に満たないくらいのそれほど大きくない学校だ。しかしこの辺ではかなり有名な商業高校である。

生徒のほとんどは高等部卒業した時点で大手企業の内定が確定する。大学に進学する生徒がちらほらいる程度。

その富商の生徒、誰しも勉強一筋というわけではない。部活動に恋愛といった普通の青春時代を送っている。

というのも、「やる時はやる、やらない時はやらない」と立派な校訓を掲げているから　　ではなく、生徒が自主的にやる時とやらない時の切り替えができているからだ。

まったくすごい連中だ。本当に同じ年の人間の集まりかよ。

しかし俺だって中学三年間必死に勉強してここに入れたんだ。つまらない生活ともおさらばして、これからは輝かしい未来に向かって高校生活を楽しもう。

今日初めて親の言う通り勉強していてよかったと思っただよ。

なんとたつて富商卒と履歴書に書けるだけで企業は採用してくれるんだからな。

プロローグ 04

だが、現実はその甘くはなかった。始業式後早々に行われたのは高等部進級歓迎試験という、本当に歓迎しているのかよくわからない行事。

とはいえ中学で習った内容なら少しばかり自信がある。遊ぶ暇もなく勉強ばかりしていたからな。

「……………」

しかし一つ目の科目で俺は言葉を失った。

商業簿記…？

そんなもん勉強してねーよ…。

まあ、そんなこんなで試験は終了。

国語や数学もあつたがそつちは我ながらいい出来だった。経済や商業の科目は……………、言うまでもないか。それなのに土御門のやつが得意げな顔をしていたのは気に食わない。どうして中学校で習っていない内容がわかるんだよ。

試験が終わつたのは午後五時を過ぎていて、約30人のクラスメイトたちは友達と話しながらそれぞれ属している部活動に行つてしまった。

わかつてはいたがここには土御門と、何かと突つかかってくる隣のツインテール以外知り合いいない。それに加えて他の連中は小学校の頃からの付き合いなんだよな…。疎外感が尋常じゃないぜ。

ツインテール娘は右の席で頭を抱えている。試験の出来が悪かつたのか、ざまあみる。

ちよつとからかつてやるか。

「どうしたあ？まさか生徒会役員さんは頭の出来が悪いとか？」

悪意たっぷりだがコイツにはこれくらい言ってもいいだろう。

俺の言葉に反応した雫は机に突っ伏したまま顔だけを俺に向けた。

「むう……、そういうアンタはどうなのよ」

「合計で七割くらいかな。商業の科目わからないし」

「……………ふんっ」

あ、顔をそむけやがった。

どうやら相当悪かったようだな。でもどうしてこんなやつが生徒会の役員なんだろう。

「ねえ」

「なんだよ」

「アンタってどうして富商（じゅうしやう）に入ろうと思ったの？編入試験ってかなり難しいんだよ。入りたい企業でもあるわけ？」

「べつにねーよ。ただ富商を出ればほぼ将来安定だろ？」

俺がそう言うと、雫はつまらなそうな顔をした。

「ふーん。なにか夢でもあるのかと思って少し関心してたんだけど」
「夢ねえ」

子供の頃はヒーローだったけどなにか？

「じゃ、あたし生徒会あるから。富商（じゅうしやう）で悪いことするんじゃないわよ」

「しねーよ」

「本当でしようねー？」

雫は鞆に荷物を入れると立ち上がって言った。

「じゃあまた明日」

「おう」

そして雫は長いツインテールの髪を揺らしながら教室を出て行った。

俺はふと思っ。

もしかすると、ここでの学校生活は楽しいものになるのではなからうか。

つまらなかつた俺の生活から抜け出せるのではなかるうか。
だって現に今楽しいと感じているじゃないか。
中学のとき俺に声をかけてくれるやつがいたか？

土御門を除けば当たり前障りない関係のやつらばかりだった。

「また明日」

言うのに一秒も要さないその言葉を俺に言ってくれるやつが今までいたか？

静かだった俺の世界が
綺麗で賑やかで騒がし

い
そんな曲を奏でる。

そのきっかけは、これから約一ヶ月後の朝。

*

五月中旬、朝はまだ少し冷える。

ベージュ色でチエック柄の学生服のズボン、そのポケットに両手を突っ込み学校近くのバス停の横を早歩き気味に通り過ぎようとしていた。が、俺の足は動くことをやめたようだ。

というのも今バスから降りてきた少女に目を奪われたのだ。

ズボンと同じベージュでチエック柄のスカート、紺のカーディガンが見える白いシャツ、先輩なのか同級生なのかはわからないが同じ学校なのは確かだ。少女はかなり小さく150センチもないだろう。あのツインテール娘よりもさらに小さいくらいかな。

少女は身長もそうだが顔も小さく、その小さな顔はまるで人形のような。大人びたその顔には白い肌に桜色の唇、切れ長の目、これで長髪なら日本人形みたいだと思ったかもしれない。しかし少女は

肩のライン程度のショートヘアで、癖のないまっすぐな髪。

「よっす！」

彼女を目で追っていると、急に横から声をかけられて驚いた。

「ひよっ!？」

バスから降りてきた少女に見とれていただけに、急に声をかけられて変な声が出てしまう。

「あはは、変な驚き方するなキミは」

状況が理解できずにいると声の主は満面の笑みで俺の顔を覗き込んできた。

「なんだよいきなり…」

「隣のクラスのキミを見かけたからついね。あたし御石衣、どうぞよろしくー」

えへへと笑いながら手を差し出してきた。御石さんとやらはどうやら同級生らしい。いつもニコニコしていそうだな。まあそんな彼女だが、女の子っぽくはないとは言えさすがに握手するのは少し照れる。

「照れない照れない、ほらっ」

そう言いなが彼女は俺の手を取った。

邪魔なのかお洒落なのかはわからないが、長めの髪を後ろで結んでいて、それが馬の尻尾のように元気に動いている様は彼女の元気良さを表しているようだ。女子にも男子にも人気がありそうだなと考えていると、いつの間にかあの小さくて綺麗な少女は見えなくなっていた。

「それよりそれより！キミの名前は何て言うんだい？一組の人ってのはわかるんだけどね」

「ああ言っただけな、竹本光。というかさろそろ歩き出そうぜ、

時間的に」

「あっ！ちよつと用事あるんだった、あたし走るね！キミも急ぎなよー！」

今度は女の子らしくニコツとほほ笑んでそう言った。それにしても元気良すぎるだろあれは。

彼女、御石衣みいしころもとの出会いから、俺は少しずつ変わり始める。

プロローグ05

御石が走り去った後、俺はかなり早歩きで登校した。今は朝のホームルーム前、後ろの席に座る土御門と雑談中だ。

「で?」

「で?じゃねーよ」

「爺さんのことやん、その2二組の御石さんとはラッキーな展開になったんやろ?」

なんとまあ、相変わらず気持ち悪いやつだ。

「俺にはお前が言うラッキーがどういう状態か見当もつかないな」

「よしきた、俺がラッキーについて説明してやるわ」

土御門に変なスイッチが入った模様。早口で話し始めやがった。

「ラッキーな状態とは爺さんと雫ちゃんの普段のやり取りのようなことをいい、つまりは一般的男子生徒が、ああなんてうらやましいー、俺も女の子とあんな風に仲良くしたいー、という状態のことや。さらに言うならどうして爺さんばかりモテモテなんや!とまあ、こんな感じ。それからそれから」

簡潔にまとめるなら、女子に相手にされないお前の欲望と妄想が作り出す状況を言うんだな。お前が気持ち悪いことだけは理解した。

今朝バス停で見かけた少女の話はこいつにだけはほしくない方がよさそうだ。

しかしあの小さくて綺麗な少女は何年生だろう。富商とみしょうの制服だったことは間違いない。編入して一ヶ月経って初めて見るということ、もしかしたら同学年ではないのかもな。かなり大人びて見えたし上級生だろう。

「……どうでもいいけどさ、爺さんはそろそろやめないか?」

「べつにいいやん。愛着あることやし」
今更言っても無駄だったようだ。

こんな感じで土御門と話していると、隣の席の椅子が引かれる音がした。

「よお、今日は遅い登校じゃないか」

席に着くのは月夜見雫。彼女は生徒会の役員で、しかも一組のクラス委員だ。ちなみに土御門もクラス委員。なんでも編入試験がほぼ満点だったからだとか…。雫は俺より成績が悪いのにどうしてだろう。

いつもより若干遅めに登校してきた雫は機嫌が悪そうに俺を睨んで言った。

「御石さんがアンタに用事があるそうよ」

そう言うつと教室の入り口の方に視線を向けた。

「ヒカルくんっ！ちよつといいかな？」

二組の生徒が一組に来たからか、それとも女子が男子を呼び出したからなのか、教室内がざわつきだす。

そう、俺を呼んだのは今朝の元気な少女、御石衣。俺は席から立ち上がりクラスメートの視線を浴びつつ御石のもとへ向かう。

「よう、どうした？」

「えへへ、ちよつとね」

こいつはこの太陽みたいに明るい顔が自然体なのだろう。本気で笑ったらどんな顔になるのだろうか。

「それはさつき聞いた。なんだ？今朝名前以外に聞くことがあったのか？」

「うん。キミさ、中学の時あだ名か何かで呼ばれてなかったかい？」
ろくに話したこともないやつに笑顔で聞くことかそれは。しかし思い当たる節があるので妙な焦りを感じる。

「うーん、キミのその顔は黒だね？もしかしてあだ名は姫？それと

もお爺さんかな？」

俺は振り返って叫ぶ。

「土御門！お前しゃべりやがったな！」

俺と御石との会話は聞こえていないらしく、土御門は頭の上に？マークを浮かべている。

「いやいや彼と話したことはないし、あたしが勝手に予想しただけだよ。今の流れだとあだ名のこととは本当みたいだね。彼に口封じしてるってことは姫とか呼ばれてたのかな？ふふっ」

「いや…」

「照れなくていいよっ、姫なんて可愛いじゃない。あたしなんか仏様だから。えへへ」

「いやそうじゃなくて…」

「あっ、ホームルーム始まっちゃうね。もっと話したいから今日一緒に帰る？放課後教室にいてよ！」

行ってしまった…。

やっぱり元気だな、御石は。小学生の男子みたいだ。

さっきの御石との会話は深い内容のようで、薄っぺらな内容だった気がする。要するに俺は今の出来事を理解できずにいた。なんてってほとんど一方的に話されたわけだからな。

「爺さんやっぱりラッキーの塊やん…」

土御門は少し泣き顔でそう言った。俺はというと、席に着いてからも雫に睨まれ続け、ただ溜息をつくだけだった。

*

午前の授業が終わる。

商業の科目にも慣れ始めてきたのか編入当初よりも時間が早く流れているように感じた。

そして今は昼食の時間だが、今日みたいに天気がいい日は校舎の

屋上で食べるのが最近のこだわりだ。青空の下誰もいない屋上に一人でいることが青春だと思っっている。

恥ずかしいやつだなんて思わないでくれよ。

弁当箱を持って立ち上がると右と後ろから声をかけられた。

「最近爺さんどこで飯食ってるんや？」

「外で食べるのは規則違反よー？ここで食べなさい」

土御門も雫も俺が無人の屋上を一人占めしているとは知らない。というか教えない。誰があんな快適な場所を教えるかって話だ。

「ちよつとな、昼は一人でいたいんだ」

「アンタがいなかったらこいつがあたしに話しかけてくるのよ！？」
……… 知らねーよ。早く行かないと昼休みが終わってしまうので

俺は急がせてもらう。

「あつ、待ちなさいよっ！」

騒ぐ雫と沈む土御門を置いて屋上にやってきた。

ここからは街がよく見える。人工物だらけだがいい眺めだと俺は思う。

昼休みに一人でのんびりと過ごすのは本当に気持ちがいい。というか、人が多いところにいるのは苦手なんだ。

防水タンクだろうか、まあそんなことはどうでもいい。それがいい背もたれになるのでそこに腰掛けながら青空と白い雲を眺め、吹奏楽部の生徒たちの自主練習を聞きながらゆっくりとした時間を過ごす。青春ってこんな感じをいうのだろうな。

中学のときは青春とは無縁だったし高校では……、彼女なんかできたら最高かな。

母さんが作ってくれた弁当を食べ終わり、腕時計を見るとあと十分ほど昼休みが残っていた。

もう少しのんびりするか。

立ち上がり街を眺める。

ここから見える俺のお気に入りに入り、ご存じ富士山。上の方に雪が残っているのが本当に綺麗だ。聞こえる吹奏楽部の音楽が心を安らかにしてくれる。

一人で快適な時間を楽しんでいると、トントントンっと屋上への階段を上ってくる足音が聞こえた。

ボタンと勢いよく開けられるドア。

「やっぱりここだったのね！」

現れたのは妖怪ツインテール。こいつは本当に苦手だ…。

俺をまっすぐ見る雫はどう考えても穏やかではない表情をしている。

「よくここがわかったな」

「まーね。昔から馬鹿となんとかは高い所に昇るって言うじゃない」「俺は煙かよ。それを言うなら「なんとかと煙は」だろ。

得意げにそう言っていると、雫はずしずしと俺のもとまで歩いてきた。

立って向かい合うと雫の顔は俺の胸あたりになる。まだ成長期が来ていないのか、それは身長に限ったことではないけど。

「なに見てんの？」

「…べつに」

「まあいいわ。とりあえずここは立ち入り禁止、はいわかったらさつさと教室に戻るわよ」

はあ、と大きく溜息をつく。

廊下を走れば注意され、少しシャツが出ていると注意され…。今度は屋上にいたから注意されるのか。

しかし廊下を走ったりシャツが出ていたりしているのは俺に限った話ではないのだが。どうしてこいつは俺ばかり口うるさく注意してくるのだろう。

生徒会役員だから規律を乱さないように俺を監視するとはこいつのことなのか？

「ほら急ぎなさいよ」

せつかく人がいい気分で休憩時間を過ごしていたというのに邪魔が入ってしまった。

コンクリートの床に置いた弁当箱を取ろうとしたときにあることに気が付いた。

「もしかしてお前、音楽が好きなのか？
すると雫はあからさまに動揺した。

「な、なに言ってるのよ…」

そんな反応では「はいそうです」と言っているようなもんだぞ。俺がなぜこのことに気付いたのかというと、聞こえてくる吹奏楽部の練習に合わせて雫が足でリズムを取っていたからだ。

「ここ、吹奏楽部の練習の音がよく聞こえるぞ。好きならお前もここに来いよ」

「なに馬鹿なこと言ってるの！ここは立ち入り禁止って言ったばかりでしょ！」

「はいはい、そうでござんした。ほらなにポーっと突っ立ってんだよ。早く教室戻るぞ」

「ま、待ちなさいっ…！」

あれ、立場逆転してね？

まあそんなことはどうでもいいか。

俺たちが去った後も上手なのか下手なのかわからない吹奏楽部の音が屋上では綺麗に響いていた。

ん？いや俺音楽のことよくわからないし。

プロローグ 06

午後の授業開始ギリギリに雫と一緒に教室に戻るとクラスメートから笑い声上がる。

「よお竹本ー、また夫婦喧嘩か？」

下品に笑うクラスの男子生徒たち。編入して一ヶ月もすればそこそこ仲良くなるってもんだ。

「喧嘩じゃねーよ」

「ははは、そこを突っ込む？まったく面白いなお前たち」

なにか間違ったことを言っただろうか…。

なにはともあれ今日の授業は終了。授業中、少し窓の外を眺めただけで小さくちぎった消しゴムが右から飛んでくることにはもう慣れたかな。しかし俺の監視ばかりしていないで授業に集中したらどうだろう。

登校中にごく綺麗な女の子を見かけ、ついでに御石とも知り合ったことを除けば今日も普段と変わらない一日だった。屋上のことを知られたことはなかったことにしよう。

荷物をまとめ、鞆を肩で持ったとき、後ろから土御門が声をかけた。

「これから駅前の喫茶店なんてどうや爺さん」

土御門は編入試験の勉強をその喫茶店でやっていたらしくどうやらお気に入りらしいのだ。

「今日はアレないのか？」

「そうなんや。だから放課後暇になったってわけ」

アレというのは大学進学希望者のための特別授業のこと。土御門

は理系の大学に行きたいらしく、商業高校では習わない数学と理科の範囲を放課後に勉強しているのだ。ならどうしてわざわざ富商に編入したんだよって話だな。こいつの成績なら進学校くらい余裕で入れただろうに。

たまには缶コーヒーの5倍くらいのコーヒーでも飲むのもいいかなと思ひ、教室を出ようとした時。

「こらこらキミ！今日はあたしと一緒に帰る約束したでしょ？」

目の前に現れた元気のいいポニーテールは…、御石衣。

土御門は俺をラッキーなやつと言うが、女の子と仲良くした経験、まして付き合った経験のない俺は正直なところ忘れたふりをして逃げたかった。つまり女子と二人で帰るのは絶対緊張するだろうし、疲れるとは思っても居心地がよいとは思えないからだ。そんな俺以上に女子と無縁な男、土御門はというと「ラッキーなやつはええね」と今にも泣き出しそうな顔で一人下駄箱へと向かって行った。泣きたいのはこつちだよ。

そんな俺に追い打ちをかけるかのように隣のツインテールが物凄い顔で睨み教室を出て行った。

余計に落ち込むぜ…。

その様子を見ていた御石がにつこり笑って言う。

「あらら、月夜見さんからはずいぶんと気に入られているみたいだね」

あれをどう解釈したらそういう結論に至るのかを聞きたいね。

何がどう転じたのだろうか、現在俺は御石と二人で駅前の喫茶店に来ている。駅は学校から歩きでも苦にならない程度の距離なのだが、女子と二人で下校するというイベントが加わると精神状態が不

安定になり…、まあ一言でいうと疲れたのだ。俺はぐったりとして飲みほしたアイスコーヒーのストローを噛む。

「なあ御石、俺としてはこういう目立つ行動はしたくないんだけど」

「そんなこと言って、キミはここに来る予定だったんでしょ？」

「友達とな」

「あたしは友達じゃないのかい？」

「お前は女友達だ。ついでに今日知り合ったばかりのな」

「ふーん、女の子といるのが恥ずかしいんだ、ふふっ」

店内には他の高校の生徒が数人と、サラリーマン風の人が多く見られる。男女二人なんて俺たちだけだし、御石はからかって言っているのだから言葉返す気力もなくなってきた。

「あからさまにそんな顔されると傷つくよ？」

そんなことを言いながらもこいつは笑顔で俺の顔を覗き込む。本当は傷ついてないだろお前。

「じゃあさっ、うちの近くの公園に行かないかい？」

「はあ…りょかい」

とりあえずこの店を出られるなら少しは楽になるだろう。同じ中学のやつに見かけられたらと思うと気が気じゃない。馬鹿にされるか、陰でクスクス笑われるのが目に見えるからな。

喫茶店を出てバスに十五分くらい乗った。御石はバス通学らしい。もしかすると今朝の綺麗な少女と家が近いのかもしれないな。そのことを聞くのは、やめておこう。

バスの中ではさすがに静かにしていた御石だが、降りるとすぐに「こっちこっち！」と駆け足ぎみになる。元気だけが取り柄だな。いや、富商の生徒なのだからどこかの企業の娘さんってこともある

うる。それに可愛い…、って何を考えているんだ俺は。少年見たいなやつだぞ。

数分歩くとひとつ大きなマンションがあり、その裏に小さな公園があった。木の陰になっているベンチに二人座る。

「えへへ、実はね、あたしとキミの他にもいるのだよ！」

「はあ？どこに」

「あ、ここじゃなくて。他のクラスにもいるのだよ、竹取物語で変なあだ名をつけられた人が！」

ああやつぱり、と思った。気付いていたが、御石衣という名前、仏の御石の鉢と火鼠の皮衣を足したような感じだもんな。

「なるほど朝あだ名が仏様だったと言っていたのはそういうことか」「わかちやっただ？そういうことなんだよ。まあそう呼ばれたのは一日だけだけどね」

「本当かよ、俺なんか卒業するまで爺さんって呼ばれてたぞ」

「え？姫じゃないの？」

確か今朝そんな話をしていたな。一方的に話されただけだったから忘れていた。俺のあだ名が姫だと思い込んでいた御石に、それはお前が勝手に勘違いしていただけだと説明してやる。

「いやまさか爺さんとはね。ふふっ」

「うるせ」

「えへへ、それで本題なんだけど、明日会いに行かないかい？他のクラスの可哀そうな名前の人に！」

「まあ、それくらなら」

「やった！じゃあ約束だね！珍しく編入してくる生徒がいるって聞いてさ、名前を見たらびっくり。それでキミを探すのに一ヶ月もかかっちゃったよ。でもまさかすぐ隣のクラスだったなんてね」

自分と同じく変なあだ名を付けられそうな名前だった俺を探していたってわけか。加えてまだ他にも竹取物語に関係がある名前のや

つがいるとはね。

「そうそう今朝くらいの時間にあのバス停にいたら、あたしと一緒に登校できるかもよ？えへへ」

そつだな。あの時間に行けば今朝の綺麗な少女に会えるかもしれない。

「もうっ…、からかっているんだから何か言つてよ。そんな真剣な顔されたら照れるよ…」

御石は照れたような、にやけているような顔になる。

「悪い考え事してた」

「もう…」

その顔はなんだと聞きたかったが、雰囲気的に聞けず明日一緒に登校する約束をしたのだった。

立ち上がり帰ろうとしていると公園の前をあの少女が歩いていて。今朝バス停で見かけた背が低くて綺麗なあの少女だ。肩のラインで綺麗に揃ったまっすぐな黒髪と白すぎる肌それにほんのり桜色の唇。お人形さんみたい、とは彼女のためにある言葉にさえ思えた。

まだ制服を着ているので今帰って来たところだろうか。

今朝見かけたということは伏せて御石に訊ねてみる。

「もしかしてあの人、この辺の人？」

御石も彼女に気付いたようだ。

「うん同級生」

同級生ってことはあの子も一年か。どうしてだか少し心が躍る。

しかし家が近い同級生なら声でもかければと思うのだが。

一瞬御石はなにやらしかめたような顔になり、そしてすぐにいつもの笑顔に戻る。

「ほらほらっ！明日一緒に行くなら早く帰って宿題しないとだめだよ！」

御石に背中を押されて渋々歩き出す。まあ宿題は大事だしな。

結局あの少女は見えなくなり、俺も御石と別れて家に帰った。

「やっぱりお爺さんは姫を見つけるよね」

別れ際に小さく聞こえた御石の言葉がなぜか頭の中でぐるぐる回っていた。

プロローグ07

帰宅した俺は晩飯のあと風呂に入り、今は自室で勉強中だ。

そういえば今朝の少女 ストレートのショートヘア、背が低くすごく整った顔のあの子は同級生だったんだな。まだ富商に編入して一ヶ月しかたってないから知らなくて当然か。隣のクラスの御石だって今日知り合ったわけだし。

ちなみに同じクラスのやつの名前も全員覚えてなかったりする。

土御門は結構知っていそうだな。御石のことも今日初めて見たなんて言っただけじゃなかったし。いや、以前に見たことがあるとも言っただけ。しかし物知りなやつだ、いろんな情報知っていそうだ。

ほとんどの生徒が寮生の富商。それなのに今日一日だけで二人もバス通学の生徒と知り合うなんて珍しい。正確には知り合ったのは一人だけだ。

しかし考え事をしながらでも勉強はできるんだな。むしろ必死に勉強するより集中できるようだ。

死に物狂いで勉強していた中学の頃に比べると今の方が楽に感じる。

宿題が終わり、一息つくために携帯電話を開く。

「メール届いているな、二時間くらい前か」

勉強をしている時は携帯電話を見ないから気付かなかった。どうやら土御門からのメールらしい。

「！」

とだけ書いてある。意味がわからない。これでコミュニケーションがとれると思って送ったのなら相当いかれた人間だな。いや土御門

「昨日俺たち以外にもいるって言ってたし、今日はそいつを見に行くんדר？」

「そうそう！ちなみにあだ名はたまたまだったらしいよ」

たまたま……。これは俺より可哀そうなあだ名かもしれないな。男子中学生だったという点を加えらるとなおさら可哀そうだ。

「か、可哀そうなあだ名だな……」

「そう？可愛いじゃない、たまたま」

笑顔で言うなよ。それにどうしてか変なこと言わせている気分で恥ずかしくなるじゃないか。

「えっ、可愛くない？たまたま」

「あーわかったから！もう口に出すな！」

きょとんとした顔で首をかしげる御石。本当にこいつは可愛いと思っているらしいな。それとも俺の思考がいがわしいだけなのか？余計に恥ずかしくなってきた。

「そついえばさ、そいつのあだ名が…、だったらしってどういう意味だ？富商なら前から知り合いなんじゃないのか？」

「んー、龍くんとはあまり話したことないんだよねー。だからそんなに仲がいいわけじゃないのだよ」

なるほどね。小中高のエスカレーター式だからってみんながみんな友達ってわけではないのか。そついえば昨日も雫と御石はそんなに仲がよさそうには見えなかったしな。

「それからね、四組に子安燕さんっているんだけどね」

歩きながら御石と会話しているのだが、通学路は人通りが多いうえに当然ながら同じ富商のやつも何人かは歩いている。意識しすぎなのかもしれないが女子と二人で登校しているので視線が気になつて仕方ない。

「こらキミ、ちゃんと聞いてるか？」

「おう、子安さんの話だろ。明らかに燕の子安貝を意識して名前を付けてんだろうな、こいつの親」

人の視線はまあいいか。別にやましい所があるわけでもないし。

「ふふっ、そうかもね。でねでね、今日その二人に会いに行こうよ！」

「別にいいぞ、まだ五月だし友達が増えるのはいいことだからな」
「なんだかんだ言っても帰宅部の俺にとっては悪い話ではないのだ。欲を出すならあの女の子にも会いに行きたい。しかし御石に頼むのも、土御門にあの子のことを聞くのも少し恥ずかしくてためらわれる。」

話しながら歩いているとすぐに学校に着いた。

「じゃあまた放課後に教室で待つてよ！」

御石と別れ一年一組に入る。俺の席の後ろでは土御門が自習していた。

「めずらしいな」

「待ちくたびれたで爺さん。昨日メールしたやん」

確かにメールは来ていたが……、あれだけでは何の情報も伝わらないぞ。

「あの意味不明なメールは間違つて送信したんじゃないのか？」

「いろいろありすぎて何から伝えていいか迷つた末の結果やて」

それが「！」ってわけか。本当に頭がいいのか疑問だ。

そう言うと土御門はお馴染みの気持ち悪い顔で話し始めた。

「実はな、昨日爺さんと別れた後で可愛い子が爺さんを探してるって俺に言いに来たんや」

「それが本当なら興味深い話だな」

こいつのことだ、話のネタかもしれない。

「いくらラッキーな爺さんでもあれは反則やぞ」

妙に真剣な顔だ。本当なのか？

「いつかはこうなると思ってたけどなー、まさかお姫様の方から爺さんを見つけるとは」

「何の話だよ」

「そこでそのお姫様が今日の放課後教室で待つて欲しいそうやで？」

今日の放課後は御石と約束がある。土御門の話より御石との約束が大事だ、なんとなく。

ここで最近登校が遅いツインテールが登場。眠そうな顔をしながら長い髪を手で撫でている。

「聞こえたわよー。アンタまたこの生徒に手を出そうとしてるんじゃないでしょうね」

またつてなんだよ…」

「そうやでー。どないする雫ちゃん、あれはかなりの強敵や」

後ろから土御門が誤解を生むようなことを言ってくる。ちよっと黙れよ。

俺は無視して雫に話す。

「そんなことより。どうした？最近やたらと寝むそうじゃないか」

「生徒会役員は大変なの。高等部での行事って九月の文化祭だけじゃない？だから今から企画とかやってんのよ」

「九月ってまだ四ヶ月先の話じゃないかよ。はりきりすぎだろ…」

「馬鹿ねー。行事が一つしかないから盛大に盛り上げるために頑張ってるのよ」

へえー。そりゃご苦労なことだな。

結局、土御門が言ったことはなかったことにした。可愛い子が俺を探しているなんてどう考えても話のネタだろう。担任もやってきてホームルームが始まりいつも通り学校生活がスタートし、そしてやはりというか放課後までは相変わらずで変わったことは何もなか

った。今日も屋上で昼飯を食べたが雫は来なかった。

「俺は授業行くけどちゃんと待っとくんやぞ、ラッキー爺さん」

土御門が鞆を肩にかけ、放課後の特別授業がある教室に向かいながら言う。

「りょーかい」

誰がラッキー爺さんだよ。

俺はテキトーに返事をする。それに待つのは御石だがな。

土御門が行って十分くらい経っただろうか。雫も生徒会があるからと出て行き話す相手が不在で一人ぼんやりと窓の外を眺めているとき教室の扉が開く音がした。

「あら、待っていてくれたのね」

声の主は肩くらいまでのまつすぐな髪で、とても整った顔をした少女だった。

そう、昨日の朝と放課後に見かけたあの少女だ。

まだ教室に残っているやつもいる。まさか俺に声をかけたわけじゃないだろう。

「あなたよ、竹本くん」

言われて驚いた。気温は高いわけではないが変に汗が出る。

背は低いがすごく大人びた印象の彼女は口調まで大人びていた。

「どうしたの？そんな顔をして。私に来ることはお友達に聞いたのではないの？」

そう言いながら彼女は俺の席まで歩いてくる。何だろう、顔も口調も大人びているが近くで見ると俺と頭ひとつ分以上違ったためか変な違和感がする。

席から立ち上がった俺を見上げるような感じで彼女は言う。

「月野かぐや」

「へ？」

「私の名前よ」

「…と言われましても」

初めて見たわけではないが、言葉を交わすのは初めてなので緊張してしまふ。それもすごい美人なのだからなおさらだ。

「とにかく話したいことがあるわ、一緒に下校しよう」

まったく状況が理解できない。どうして彼女は俺の名前を知っているのか、接点もなにもなかった俺に突然何の話があるのか。いや、そんなことよりもうすぐ御石が来るかもしれない。

いろんな思考が頭の中で飛び交う。そんなときまた扉が開く音がした。

「えへへ、それじゃあ龍くんも燕ちゃんも編入生のこと知ってたんだね」

現れたのは御石と…、背が高い男子と同じく背が高い女子。男子のほうは180センチくらいありそうだ。

俺と隣の月野さんとやはら同時に扉のほうを向く。俺に気付いた様子の御石が笑顔で駆け寄ってくる。

「遅れてごめんね、でも朝話した二人連れて来たよ！」

そう言う俺の手を掴み扉の所で待っている二人のもとへ行こうとする御石。

「あら御石さん、帰ったのかと思ってたわ。それに竹本くんは私と用事があるの、連れて行かないでもらえる？」

落ち着いて言う月野さん。

「あたしが先約だもんね、えへへ」

笑ってはいるがすごいオーラの御石。

「あら、でも彼私の婚約者よ？」

俺と御石は口をそろえて言っ。

「えっ？」

プロローグ 08

俺は耳を疑った。たぶん御石もそうだろう。

月野さんが婚約者？ほんの五分前までは言葉すら交わしたことはない、言ってしまうえば赤の他人だった人だぞ。信じられるわけがない。

いやしかし、こんなに綺麗な人が結婚相手なら俺はいわゆる勝ち組ってやつか？だが待て、よく考えるんだ俺…。

うーん、頭が痛くなってきた。

「ど、どういふことかな月野さん？またあたしへの嫌がらせなのかな？」

ますます笑顔になる御石だが、口元がひきつっているぞ。作り笑いですと顔にかいているようなものだ。

「ひどい言われようね。それにあなたも、自分の父親が何をしているか知らないの？」

やれやれと言わんばかりに月野さんは肩をすくめて言う。そういえば知らなかったな、普通のサラリーマンだと思っていたが。

「あなたの父親は月野のナンバー2。ちなみに私の父の弟、知らなかったの？」

*

それから月野さんは話し続けたがめまいがしそうな話だった。御石が始終笑顔で顔をひきつらせていたり、教室の扉の前でやって来た二人がおろおろしたり…。

まあ大変だったが彼女の話しをまとめるところだ。

俺の父さんは月野さんの父親の弟でその二人の父親、つまり俺の祖父にあたる人が月野ブランドを起業。

俺が生まれる前に祖父は亡くなり、当時会社の重役だった月野さんの父親が後を継ぎ、彼の推薦で俺の父さんは副社長に。

そして偶然なのか必然なのか、御石の父親と今も扉の前に立ち尽くす二人の父親は月野ブランドの重役だそうだ。

あまりにも現実味のない話で信じていいものなのか迷う。

月野ブランドと言えば高級衣類やウォレットにバッグそれにコスメ、まあ化粧品やなんかだ。高校生が手を出せる物なら香水なんか有名なブランドで、女性客から絶大な人気を得ている。当然俺も知っているほど大きな会社だ。

で、俺の父親がそんな大企業の副社長だと！？良くも悪くも平凡凡の家庭だぞ。信じられるかそんな話。

「ちょっと待ってくれ、今の話を信じていいのなら……、従兄妹……、なのか？」

頭が爆発しそうだが訊ねたいことはたくさんある。

「そうなるわね」

そう言うとはほ笑む月野さん。かなり可愛い、天使のようだ。

いやいやそうじゃない！登校中、通学路で彼女を見かけたのならそれが正しい反応だが、今はそんな状況じゃない。従兄妹？婚約者？というか俺は彼女と親戚だったのか？もう気が狂いそうだ。

「ちょっといいですか？」

困惑する俺に救いの手を差し伸べてくれたのはあの二人だった。

「もしかして僕たちも関係のある話ですか？御石さんは何だか怖いオーラが出ていますし、立ったままというのもなんです。よかったら喫茶店にでも行きませんか？」

「てゆーかあ、燕も話したいしい」

たしか玉枝龍くと子安燕さんだったかな。とりあえず助かった、ちよつと頭を整理したい。

御石は怖いくらいニコニコしながら俺を見ているし、月野さんは妙にほほ笑んだ顔で俺を凝視しているし…。

「よ、よし！喫茶店行くか！なっ！」

なんかもう空元気でそう叫んだ。

いったん鞆を取りに四人が戻り、また下駄箱で集合した。今は喫茶店に向かって歩いているところだが、なんとも空気が重い。こんなに居づらい空間があるとは思わなかったな。

御石と月野さんには、今は話しかけない方がよさそうだ。残るは玉枝さんと子安さんだが、初対面の女子に話しかけるのは勇気がいるので玉枝さんに話しかけよう。

「えーっと、玉枝くんだよな？御石が呼び出したせいでこんなことになって…、なんかごめんな」

「いえいえ、いつかはこうなったでしょうから。それと僕のご事は気軽に龍と呼んでください」

龍なんていかつい名前だけど、とても優しそうな感じた。背が高

くてすごく爽やかで、少女マンガの王子様キャラみたいな容姿だ。それにこんな状況でもほほ笑んでいる。どれだけ爽やかなんだよ。

「ねえ龍、燕もいれてよ！」

「あつ、すみません。ちょうどよかった、紹介しますね。彼女は僕の家の近所に住んでいる子安燕さんです。幼馴染とでも言っておきましょうか」

「ヒカルくんだね、よろしく！ふつーに燕って呼んでいいよ！」
「おう…、こちらこそよろしく」

どうやら二人ともいいやつみたいだ。もし月野さんが教室に来ていなかったら今頃は楽しい放課後になっていたことだろう。

子安燕さんは女子にしては背が高く、モデルさんのようなスタイルだった。

俺たち三人の前に行く二人と比べると、なかなか今どきの女子高生と言えるだろう。制服もおしゃれに着こなしているし、長髪をゆるく巻いているような髪型でもある。

そんなこんなで喫茶店に着き、四人がけのテーブル席に男二人、女三人で向かい合って座った。女子は三人とも痩せているし、月野さんにいたっては小学生サイズなので大人二人用のソファースーツぽり収まった。

そして、五人ともアイスコーヒーを注文したところで月野さんが何の前触れもなく突拍子なことを話し出した。

「あなたたち、私と一緒に月に行かない？」

私と月に行こう、彼女はそう言った。どういうこ

とだろう、まさか本当に月に行くという意味ではないと思うが。

月野さんは話を続ける。

「もちろん月まで飛んで行くという意味ではないわ。今日は彼にだけ話そうと思っていたのだけれど、どうやらあなたたちは玉枝さんと子安さんみたいだから、話しに行く手間が省けたわ」

彼というのはどう考えても俺のことだよな。

それに月野さんだが、最初はそりゃ綺麗だと思った。しかし性格に問題がありすぎるようだ。人を見下しているように見えるし。それに知り合って二日目とはいえ御石は俺の友達だ、その御石を馬鹿にしたように扱う彼女に俺はいらだちを覚え始めていた。

御石の方を見ては鼻で笑うようなそぶりをみせていたし、本人でなくとも見ただけで腹が立つ。

月野さんに名前を呼ばれた燕はポカンとしている。龍は爽やかにほほ笑み、御石はというと…、笑ってはいるがやっぱり不機嫌そう
だ。

御石の顔を見てこの場の空気が読めないのか、月野さんはさらに俺と御石の機嫌を損ねるような発言をする。

「あなたたち四人の将来は私が保証するわ。卒業後は月野に就職が決まっているの、まずは月野のノウハウをあなたたちの父親から学ぶところから始まるのだけれど。それと、月に行きましょうと言ったその意味がわかるかどうかはあなたたち次第ね」

黙って聞いてみたが、どうやら本格的に人を馬鹿にしているようだな。それは彼女の顔が妙に大人っぽく、口調が偉そうに思え

たからかもしれない。

龍はこうなることを知っていたかのような顔でほほ笑んでいるし、燕は話についていけなかったのか、聞くことを放棄してゆるく巻かれた髪をなでている。

これまで黙って聞いてはいたが、彼女の発言と態度で気分を害した俺は立ちあがってしまう。

「お前は何様だ？さつきから聞いているがお前に俺たちの将来決める権利ないだろ！それに御石に対する態度はなんだよ。龍、お前は腹立たないのか！？へらへらした顔しやがって」

言いだすと余計に頭に血がのぼったみたいだ。店内は涼しいが汗が出てくるのがわかる。そんな俺を龍が抑えてくれた。

「まあ落ち着いてください。それに進路のことは彼女が決めたわけではありませんよ。今日はもう帰りませんか？月野さんが言われたことは、今晚ゆっくり考えましょう」

龍がそう言うのと月野さんが席を立ち、そのまま外へ出て行った。俺に文句を言われて気まずくなったのかと思っただが、去り際の顔はすごく冷静で俺が言ったことなどお構いなしといった感じだった。いったいどんな神経しているんだか。

あとコーヒー代は置いていけよ。

残った四人で少し会話する。

「悪いな龍、少しかつとなったみたいだ」

「いえいえ、月野さんの言い方も問題ありませんでしたから」

ほほ笑い返事をする龍。こいつは本当に爽やかだなと思う。土御門にその爽やかさを分けてやってくれないか？

「しかし店内で大声をあげるのはどうかと思いますよ？ふふっ」
今更だが周りを見渡して恥ずかしくなる。それを見て御石と燕がくすくす笑い、少し雰囲気がよくなった。

「いきなりヒカルくん叫ぶんだもん、燕びっくりしちゃった。なんか月野さんって変ってるよね」

「うーん、あたし月野さんとは中等部でも同じクラスだったんだけど、彼女ずっとあんな感じ。すごく偉そうで…、だからあんまり友達になつたみたいなんだ。あたしも苦手って思ってたし。でも高等部でも同じクラスになったから仲良くしたかったんだけど、どうもね…」

「俺もあんまり関わりたくないな…」

さすがの御石も苦笑いになった。

「あの、話を蒸し返すようで申し訳ないのですが、三人とも親が月野の関係者だということはご存じなかったのですか？」

訪ねたのは龍だが確かにこれは気になる。本当のことかどうかも知りたい。

しかし結果から言うと御石も燕も父親が何の仕事をしているか知らなかった。龍は月野さんのことを以前から知っていたような感じがするし、彼女がこういう話をするのもわかっていた感じだ。

「まあ月野さんの件は置いておくとして、どうですか？連絡先の交換でも。僕はみなさんに妙な仲間意識を感じますので」

「仲間意識？」

俺がそう言うと龍は一度爽やかに笑ってこう言った。

「わかりませんか？竹取物語、ですよ」

*

それから四人で携帯電話の番号とメールアドレスを交換した。家が近所らしい龍と燕と一緒に帰り、俺は御石と一緒に帰った。今はその帰り道。

「今日はなんか大変だったな」

「ほんとだよ、ふふっ」

「なんだ、機嫌いいのか？」

「べつにー」

とは言うものの御石はすごく笑顔だ。つられて頬が緩む。

「キミはあの話信じる？」

「親が月野ブランドって話か？どうだかなー、帰ったら聞いてみる」

「その話じゃなくてさー。月野さんがキミの」

話の途中だった。バス停に着いたので御石に別れを告げ俺は家に帰る。なぜか御石はふてくされた顔をしていたが。

「ただいまー」

二階の自室に鞆を置き、リビングへの扉を開く。いつもより遅い帰宅になってしまったので、もう専業主婦である母さんが晩飯の支度をする音が聞こえていた。

「あら、遅かったのね」

「友達と喫茶店に行ってたん…だ？」

「どうしたの？すごく間抜けな顔になっているわよ」

キツチンから俺に声をかけた人物は本来そこにいるはずの者ではなかった。

母がいつも着けているエプロンは彼女の小さい体には似合っていない。というか存在自体が違和感だ。

そこにいるのはそう、ストレートのショートヘアにすごく大人びた顔の彼女、一時間ほど前にもう関わりたくないと思った月野かぐやその人だった。

プロローグ09

俺の家に月野かぐやがいる？なぜ、どうして
誰か説明して
くれないか？

頭の中は「何故」の無限回廊を彷徨っているがとりあえず今はキ
ツチンに向かって叫んでおころう。

「どうしてお前がここにいるんだよ！」

「いけなかったかしら？それよりお風呂掃除をお願いしたいのだけ
れど」

不法侵入のくせに何言ってやがる。凶々しいにもほどがあるって
もんだ。

「は！？何言ってるんだよ、それに母さんはどこだ！」

専業主婦の母親がこの時間にリビングにいないのはおかしいと思
った。まさかこいつが追い出したのか？風呂掃除が終わってないの
も母さんがいないことを意味している。

「本当に何も聞いてないのね」

彼女は溜息まじりに言うと晩飯の支度をいったん止め、手を洗っ
て俺の方に歩いてくる。

「話してあげるからそこに座りなさい」

そうは言うが、ソファアに座ったのは彼女だった。そして命令口
調はやめてほしい。

母が普段使っているエプロンを外すと薄いピンクのロングTシャツ
に黒色の短いスカート、その下に黒のニーハイソックスを穿いた彼
女が現れた。あえて言おうグッジョブ。

いやいや、一瞬見とれてしまったがすぐさまツッコミを入れる。

「なんでお前が座ってるんだよ」

「どうしたの？早く座りなさい」

いや確かに二人掛けのソファーだが…。座れと言われても動こうとしない俺を彼女は不思議そうに小首を傾げて見ている。それっきり話そうとしないところを見ると俺が隣に座らない限り話は進まないようだ。

いらだち半分恥ずかしさ半分といった感じで俺は隣に腰掛ける。

「本当に輝は何も話さなかったようね」

輝てるというのは俺の父親の名前だ。というか人の親を呼び捨てにするか普通？

「私たちの両親は日本にはいないわ」

もう少しマシな嘘をつけよ、と本気で思った。しかし俺の目を見て話す彼女の顔はどうも真剣らしい。もしかしたら真剣に嘘をついているのかもしれないな。だとしたら相当頭が危ないやつだ。

「私たちの両親は月野の世界進出のために今日から各国を飛び回っているの。本当は姉妹で世界旅行が一番の目的みたいだけれど。だから当分帰って来ないでしょうね。私の家はお手伝いの人に管理させたみたいだから大丈夫だけど、あなたが一人で暮らしたらこの家はごみの山になってしまわうでしょ？それに食事にも困るから私が一緒に暮らしてあげる。明に頼まれたわけではないけれど、未
来の亭主に餓死されたら私が困るから今朝輝に伝えたの」

明あかりというのは俺の母親だ。どうして両親の名前を知っているのか、少しゾツとする。それにまた人の親を呼び捨てにしやがった。

とはいえ彼女との距離はほんの何センチで、あの綺麗で大人びた顔がすぐ目の前にあることに認めたくはないが、認めざるを得ないほど心臓が高鳴っている。

「俺はお前の話をどこまで信じていい？」

そう俺が言うと、彼女は心底呆れたような顔で言った。

「全部に決まってるでしょ、何を言っているの？もしかして放課後の話も私が口から出まかせで言ったと思っっているんじゃないでしょうね」

「俺の父さんがお前の父さんの弟で月野の副社長って話も、俺たちが従兄妹って話も、両親が日本いないって話も、お前がここに住むって話も……。それに、こ…、婚約者って話も本当なのか…？」

「兄弟なのは父親だけじゃなくて母親もよ」

「はあ!？」

「近くで大きな声出さないでくれる？それにさっき言ったじゃない世界中飛び回っているのは姉妹の世界旅行が一番の目的だって。私の母の旧名は竹本都、竹本明の実の姉よ」

話を聞いている間、俺の口は開きっぱなしだった。頭がおかしくなるどころの騒ぎじゃないぞ。ノイローゼになりそうだ。

「竹本都は月野帝つぎのみかどと結婚して月野都つぎのみやこに、あなたの父親は竹本輝に。できすぎた話よね、まるで何かのおとぎ話みたいだと思わない？私の名前は月野かぐや、そしてあなたは月野光になるの」

「ちよつと待ってくれ、頭痛くなってきた…。じゃあなんだ？俺たちはめちやくちや血が濃い従兄妹なのか？だいたい従兄妹で結婚とか意味不明だぞ。それにこんだけ血が濃かったら遺伝障害とか…」

「あら日本は四親等以上離れていたら結婚は可能よ、無理なら国籍を移すでしょうし。それに、子供の心配は少しばかり気が早いんじゃない？ふふっ」

「そついう意味で言ったんじゃないよ！」

恥ずかしくて顔から火が出そうだ。しかし御石と違って上品に笑うんだな。笑った顔なんてこれが初めてだからわからないが。それに婚約者なんて話は絶対認めないからな。なにせ俺には…、おっと妄言。

でもこいつはもしかしたら俺を馬鹿にしているだけかもしれない、いやその可能性のほうが高い。

まったく…。奇天烈キャラは妖怪ツインテールだけで間に合っているというのに。中学時代置き去りにしてしまった青春を取り戻すための富商での俺のプランはどうなるんだよ。

今日知り合ったばかりの女と一緒に暮らす？マジではあ？って話だよ。本気と書いてのマジだよ。

高鳴る鼓動と頭痛は止まらない。ついでにロマンティックも止まらない。って、俺は何を言っているんだろうね。

気持ちを落ち着かせるために一息ついてから言う。

「まだこれっぽちも信じたわけじゃないけど！とりあえず今は母さんいないみたいだからお前は飯作れ！俺は風呂掃除してくる！」

「意地っ張りなのね」

「ほっとけっ！」

なんかもう恥ずかしさやら緊張やらを隠しきれなかったが、いち早くこいつの前から逃げたかったので走って浴槽へ向かった。

こうして不本意ながらこいつとの共同生活が始まってしまったわけだ。

昨日バス停と御石に誘われた公園で見かけた時は本当に綺麗な人だと思いい、今日の放課後、月野かぐやだと自己紹介された時は戸惑

いながらも名前が知れたことを喜んだ。しかしそのあとの御石とのやり取りや発言で性格が悪い、頭がおかしい人だ、と認識したこいつだが…。

月野かぐや。

見た目だけは超が付くほどの美少女。肩のラインで綺麗に切り揃えられた黒髪は、触れずとも細くサラサラだということがわかる。身長はかなり低く150センチないくらい。あのツインテールよりも小さいと思う。

白すぎる肌は透感感バリバリでどうしたらそんなに綺麗になるの？という疑問が浮かび、その白く小さな顔には切れ長の目と小さな桜色の唇が、まるで日本人形のように彼女の魅力を引き出している。そんな彼女が俺の従兄妹で婚約者で…。加えて一緒に暮らすことになるなんて…。

どうやらこの日を境に俺の平凡な毎日が失われていくのだろうな。

プロローグ09 (後書き)

プロローグ 完

プロローグEX

はじめましての方、どうもkaguyaというものです。今回この物語を読んでいただいております。ありがとうございます。

はじめましてじゃないよって方、いつも見てくださってありがとうございます。

ではではさっそく本題です。

以前執筆していた「はじめまして〜もうひとつの竹取物語」の設定やらなんやらを練り直して再び書きなおしたのが「月の記憶」シリーズです。現在は全8部の第1弾「月夜の序曲編」ということになります。

お気付きでしょうが増えていますね、登場人物（笑）
ツインテール小娘つきよみしずくの月夜見撃ちちゃんです。

登場人物を増やすかどうかは迷ったのですが気付けば増えています。

最初の方に出てきた生徒会長さんはあんまり重要ではないです。ちよいちよいツインテールとの絡みがある程度ですかね。

で、いろいろ考えました。

竹取物語をモチーフにしたこの小説、ジャンル何なの？ってことです。

書きたいのは恋愛小説なのですが、どうもSF要素が絡んできた
り…。

そしてふとひらめいたのです。

これラブコメでよくな？ と。

そう、これはラブコメです。ラブ&コメディーです。シリアスな展開なんて私の文才ではどうあがいても書けません。ということでもラブコメってことにしましょう！

一種の逃げですね、はい。でもSFチックなところはきちんと頑張っ書きますよ。

私の構想では「少しミステリアスを含んだラブコメ」ってことになっっています。

全8部になると考えているので1部だけでは完結しません。というか1部ごとに謎っぽいものが残ります。それは8部全て書き終わった時点で謎が解かれたって感じになります。

だからミステリー小説書く文才なんてないって…。

さあ、気を取り直してここからは内容についてです。

「月夜の序曲」のプロローグがようやく終わりました。と言ってもここまでは「はじめまして〜もうひとつの竹取物語〜」とほとんど変わりませんね。

しかし！

第2章からはガラッと変わって完全にラブコメ化するのでご期待ください！

最後になりますが、どれだけ時間がかかってもこの物語は絶対完結させるのでこれから Kaguya をよろしくお願いします。

君の狂詩曲01（前書き）

時期は夏休み前です。

ラフンデイ狂詩曲って民族的な感じを言っらしいです。

さてこの章では何か民族的なことを含んでいるのでしょうか。

この物語は竹取物語の固有名詞等をお借りしています。

当然フィクションです。登場する個人、団体：以下省略。

君の狂詩曲01

それは、梅雨が明け夏本番を間近に控えるある七月の暖かい日の出来事だった。

従兄妹兼認めてはいないが婚約者らしい月野かくやが俺の家に住み始めてもうすぐ二ヶ月が経とうとしていた。

会社の世界進出だか母さんの世界旅行だか意味がわからない理由で両親が海外に行つてしまい、正直なところ家事をこなしてくれる居候のかくやには感謝している。

同い年の女子、それもかなりの美少女と同じ屋根の下で生活をしているんだ。そりゃあ最初の方はかなり緊張した。俺が入った後にかくやが風呂に入るなんてことを考えるだけで心臓はバクバクだった。

だが慣れつてもんは恐ろしいな。今となつては従兄妹どころか兄妹みたいな感覚で接している自分が正直怖い。

かくやと俺が二人で住んでいるということは誰にも話していない。最近学校で仲良くしているのは二組の御石衣^{みいしころも}、三組の玉枝龍^{たまえたりゅう}、四組の子安燕^{こやすつばめ}。あとどうでもいいが同じ一組の土御門。

クラスは別々だけれど運命共同体的な何かを俺たち四人は感じているのか放課後は大体いつも一緒にいる。

それには理由があつて、俺、御石、龍、燕の四人の父親は月野ブランドという企業の重役に就いている。それに俺たちは将来月野に就職することが決まっているらしい。

らしい　　というのも、この話を持ち出したのが月野ブランドの親玉の娘、月野かぐやだからで、その信憑性は未だにゼロ。俺の親は海外だし、御石、龍、燕の父親もどこか遠くに出張中。俺たちが将来月野に就職する話はそれぞれの母親は知らないらしく、その話が事実かどうかは闇の中なのだ。

さっき学校ではよく四人でいると言ったが、かぐやも俺たちの運命共同体なのでは？と思うかもしれない。

結論から言うと俺たちはかぐやとあまり仲が良くないんだ。いや、俺は仲良いよ？兄妹みたいなもんだしな。

つまり俺以外のやつらがってことだ。

御石はかぐやに苦手意識を持っているし、燕はあからさまに毛嫌いしている。龍は月野ブランドの跡取りであるかぐやに媚を売っているのかやたらと腰が低い。

それに放課後にかぐやが俺たちと一緒にいないのにはあと二つ理由がある。

まず一つ目は彼女に他人とコミュニケーションを取る能力がないこと。

かぐやの態度や口調を考えればわかることだな。

二つ目は、これは俺のせいかもしれない。

かぐやは俺の家の家事全般をこなしてくれる。飯の用意やら洗濯やら…。あと家計の管理も。

どうやら彼女は俺の母さんから約一年分の生活費が入った通帳を預かっているらしく、そこから生活必需品やら食材やら、あと俺とかぐやの小遣いなんかを考えて使ってくれている。つまりかぐやは単純に毎日忙しいのだ。

放課後はすぐ帰って晩飯の支度をしてくれるし、朝は早く起きて朝食を作った後で俺を起こしてくれる。いつたい何時に起きているんですかね。

ああ、ちなみに通帳の残高はどれだけ頭を下げてでも教えてくれな
い。なぜ？どうせたんまり入ってんだろ？小遣い増やしてくれよ。

よしここで話を元に戻そうかな。

衣替えが終わり、街を歩く人も半袖に変わってきた七月のある土曜日のことだ。

今俺はまったく興味のないピアノ演奏会とかいう退屈であること間違いなしのコンクール会場にいるのだが……。これは百歩譲って休日の暇潰しだとしよう。いや、そう思い込むことにしよう。

でもどうしてかな。隣に座っているのが妖怪ツインテールなのは……。ははは、変に笑いが込み上げてくるぜ。

なぜ俺が妖怪ツインテール（月夜見雫）と街から少し離れたピアノのコンクール会場に、それも二人だけで来ているのかということ
を説明するには二日前の木曜日の昼まで遡らなければならない。

君の狂詩曲02

木曜日の昼休みのこと。今週もあと少しだな、なんて思いながら俺は弁当箱を持ちいつものように屋上に向かっていった。

母さんが世界旅行だかなんだか意味がわからない理由で家を空け、代わりに昼の弁当を作るのはかぐやの仕事になったわけだが……。さすがに誰もかぐやが作ってくれた弁当とは気付かないにしても、それを教室で食べるのは未だにどうも照れくさい。

俺が食べている弁当が“見た目だけは”美少女のかぐやお手製だと土御門に知られた日には、数時間尋問されたのちにあいつが悶え苦しむ姿が目に見え。恐ろしい光景だ。

まあこんな理由から俺が屋上で昼飯を食べる機会はこの二ヶ月で著しく増えていた。

そして、口うるさい隣のツインテール小娘からなんとか逃げ切り屋上へと続く階段に一步足をかけた時だった。

「あれれ？お弁当の時間にキミはどこに行くんだい？」

一年生の四クラスは一階にあり、二年生は二階、三年生は三階とまあ一般的だろう造りになっている富士見商業高校だが、上の階に続く階段はちょうど一組と二組の間にある。

そしてその間の階段を上がるうとしていている時にちょうど廊下に出ていた二組の御石衣に見つかってしまったわけだ。

俺の弁当がかぐやお手製だなんてことは御石が知る由もないのだ

が、手に持っていた弁当箱をとつさに背中に隠してしまふ。

御石はかぐやと同じ二組なのでなんとなく知っているような気がしていたのかもしれないな。

そして彼女はこんなことを言い出した。

「もしかしてお昼まだ？ だったら龍ちゃんと燕ちゃんも呼んで一緒に食べないかい？ ちょうど渡したい物もあったんだ」

そんなことを言われては、やっぱりというか俺は断ることができずに御石と二人で龍と燕を呼びに三組と四組に足を運ぶことになった。

まあそんなことがあり、四人で一組に集まる。べつにどのクラスで昼食を取るうが関係のないことだったのだが、ここで俺のクラスになったことが今後の展開を生んだと言っても過言ではない。いや間違いなくこれが原因だ。

一組の、俺の席に向かうために教室に入ると真っ先に反応したのは土御門だった。

「なんや爺さん、戻ってくるの早いやん」

土御門は弁当を食べながら右斜め前の席の雫と話をしていたようだ。ツインテールが不機嫌な顔をしているのを見てもそれがわかる。

どうでもいいが土御門は雫に相当嫌われている。

「よっす土御門くん！ 悪いけどお昼ご一緒させてもらっよー！」

元気いっぱいポニーテール御石が少年のような笑顔で俺の後ろからひよっこり顔を出す。続けて龍と燕も教室に入った。

「おお！ 御石さんや！ 今日可愛いなあ！ ささ早くこっちおいでやー！」

お前はどこのオヤジだよって話だな。ちなみに土御門は三人とは

すでに顔見知りでそこそこ仲良くなっている。まあ俺がいつもこいつらと一緒にいるから当然だけど。

野球部やサッカー部の生徒はグラウンドの整備だったりで教室にはおらず、他にも何人が席を外しているので使われていない椅子を三人分持つてきて、俺と土御門の席を合わせてそこに五人で座った。

突然騒がしくなる俺の周りで、当然黙ってはいないのが妖怪ツインテール。

「ちよつとアンタたち！他のクラスでお昼を食べるなんてどういうことよ！」

「はあ？べつに他のクラスで食べてはいけないなんて決まりはないだろ」

俺は軽くあしらおうとしたが逆効果でさらにツインテールの機嫌を損ねてしまった。

「うるさいわね！そういうことをするから規律が乱れるの！だいたいアンタは立ち入り禁止の屋上に入ったり前例があるのよ！」

あー、うるさいうるさい。他のクラスで飯食っただけで乱れる規律ってどんなんだよ。

ぎゃーぎゃーとうるさい雫に我らが爽やかボーイの龍が爽やかに対応してくれた。

「いやーすみません。べつにここで騒ぐわけではありません。それにご飯を食べ終わったらすぐに出て行きますので」

龍がそう言うとき雫は「ふんっ」と鼻を鳴らしてそっぽを向いた。やっぱりこいつも少女漫画の王子様みたいな龍には弱いんだな。まさか気があったりして。いやまさかな……………。

全員が椅子に座ると燕が言った。

「燕この人きらい」

いや聞こえるって！お前らが戻ったあとでガミガミ言われるのは俺！俺だから！口は慎んで！

燕の発言が聞こえた雫は当然のように睨んでいた 俺を。

Why？

*

それから五人で談笑しながら昼食を取り、そろそろ三人がクラスに戻ろうかと言う時に、以後悪夢の招待状となるう話を御石が持ち出した。

「おっと忘れるところだったよ。みんな明後日は時間ある？」

かぐやお手製の弁当を急いで鞆にしまふ俺、御石と燕に夢中の土御門、何も話さず爽やかに微笑む龍、だるそうな顔で緩く巻かれた髪を手で整える燕 の四人は一斉に御石に注目した。

弁当箱を入れた可愛らしい袋の紐を肩にかけ仁王立ちで胸を張る御石はベージュでチエック柄の学生服のスカートのポケットから何かのチケットらしき物を取り出した。

おお、いい胸… ってうわ、やめろっ！友達をそんな目で見るんじゃないありませんっ！

「じゃじゃーん！ピアノの演奏会のチケットです！」

ピアノの演奏会？と誰もが思っただろう。また唐突になんの話だ。「これね、お母さんが近所の人から貰った物なんだけど、気付けば開催日が明後日だったんだ。あたしはピアノに興味なんてないし、誰か貰ってくれないかな？」

チケットは二枚。さあどうする。

とはいえ俺もピアノに興味はまったくない。土御門はピアノの演奏を聴いている姿を想像するだけで吐き気がする。お嬢様育ちのかぐやはピアノなんか好きそうなので俺が二枚とも貰って二人で見に行ってもいいが、まあここは龍と燕に譲るか。こいつらデキてそうだしな。

「龍と燕で行ってきたらどうだ？」

と、俺が良心で言っちゃったにも関わらず燕の返しはこうだった。

「はあ？燕こんな女々しいやつと出かけるなんて無理なんですけど
」

龍：、ドンマイ。

いやしかし二人は仲がいいとばかり思っていたが違うんだな。それにこれだけイケメンの龍をここまで拒否するのは燕の理想はかなり高いようだ。まあギャル系の燕なので王子様系の龍はタイプではないのかもしれない。

「これは手厳しい一言ですね…」

龍も苦笑い状態だ。しかしそれも爽やか。顔がいいやつは得だねえ。

「それに僕も明後日は用事があるのでどっち道残念ですが遠慮させてもらいます」

そう龍が言い、チラッと燕に視線を送った。

「やっぱりお前らデキてんだろ？そうなんだろ？土曜日は二人でデートなんだろ？」

「うーん、誰も貰ってくれないなら仕方ないね。でもこれもつたいないなあ、S席なのに」

御石は残念そうに言った。

俺は少し悩んだ挙句口を開く。

「じゃあ俺が貰うよ。誰か誘ってみるさ」

「ほんと！？助かるよ！でもこれが映画のチケットだったらキミと行きたかったかな、えへへ」

ん？何か気になることを言われた気がするが…。あまり深く考えないことにしよう。

なんにしても俺はピアノの演奏会のチケットを二枚ゲットした。誘うのは当然かぐやなわけで…。毎日家事をこなしてくれる感謝ってことにするか。

*

そして、家に帰りこのことを話してみた。

「かぐやー？」

今は晩飯前がかぐやはキッチンで包丁をトントン鳴らしている。俺はというトリビングのソファアーにだらしなく腰掛けどこが面白いのかよくわからないバラエティー番組を見ているところだった。

「なにかしら」

と、一旦手を休めたかぐやは冷たく言い放つ。せつかく顔は綺麗なのに性格がちよつとな…。

「お前ピアノとか興味あるー？」

「べつにこれといって興味はないけれど」

そう言つとまたトントンと包丁の音がし出した。

興味なしか……。はあ、これどうするよ…。

俺が肩を落として握った二枚のチケットを眺めていると。

「隣お邪魔するわね」

いきなり隣に腰掛けてきやがった。

「あらずいぶんと珍しい物を持つているのね」

二人掛けのソファーに座る俺とかぐや。身長150センチに満たない彼女には母さんのエプロンは少し大きい。

だがそれは大人っぽいこいつを唯一幼く見せる時で。いつもの落ち着いた雰囲気とは少し違った可愛らしい姿でもある。

かぐやは、学校ではいつも一人でいるらしい。特に誰とも話すことはなくいつも机に座っているだけ。御石から聞いたことだ。でもそんなこいつも俺には普通に接してくれる。いや普通かどうかは疑問だな、偉そうな態度は初めて会った頃から変わっちゃいな

いし。
友情？同情？全く違うその他の何かか
俺がこいつに抱いている感情の正体はまだわからない。

「これ明後日じゃないの。なに？私にデートのお誘いかしら、ふふっ」

そうやって意地悪な表情で顔を覗き込んでくるのは本当に反則だと思っただよね。

俺たちは親によって勝手に決められた婚約者。でもこんなことをされては惚れてしまいそうだ…。

だが俺は自分の思考を必死で否定する。

まったく充実感のなかった中学時代。それは富商に編入しろという親の命令の言いなりになった自分自身のせいだ。もう親が決めたレールの上をただ意味なく走るのはごめんだぜ。
婚約者？はっ、そんなもの認めてたまるかよ。

「デートの誘いなんかじゃねーよっ！」

そう言い捨てて二階の自室に逃げ込んだ。まったく何やってんだよ、俺……。

君の狂詩曲03

結局ピアノの演奏会に誘うことはできずに翌朝を迎えてしまった。朝食の支度を済ませて俺を起こしにきたかぐやは普段通りで、これといってチケットのことを気にしている様子もなかった。俺の気持ち的には救われたような気がした。

目を覚ますとまずはベッドの隣に敷いた布団を片付ける。

なぜベッドがあるにもかかわらず床に布団を敷いて寝ているのかというと、俺のベッドはかぐやに占領されているからだ。

さすがに同じベッドで寝るわけにはいかないだろ？もしそんなことをしたら俺ってば猿になっちゃうよ。

とまあ冗談はさておき、朝食を食べ終えた俺は弁当を受け取り七時半頃に家を出る。

かぐやには少し時間をおいてから学校へ向かうように言っている。同じ家から一緒に出てくるところを誰かに見られては困るからな。

そして事件が起きたのは昼食時のことだ。

天気良かったので俺はいつも通り屋上で昼飯を食べていた。

真夏ほど日差しは強くなく、暖かい陽気な午後を吹奏楽部の練習の音と共に過ごしていたが　その時俺の前に妖怪ツインテールが現れた。

こいつがここに来るのは五月にこの場所を知られて以来これが初めてだったが俺は特に動揺はしなかった。この小娘が俺に突っかかってくることにはもう慣れっこだよ。

七月に入ってから紺のカーディガンを着なくなったので、現れた雫の白い学生服のシャツが暖かい日差しを浴びてキラキラ輝いて見えた。

「よお、久しぶりだな」

「なにが久しぶりよ。毎日会ってるじゃない」

「ここで会うことが、だよ」

教室では相変わらず文句ばかり言っていた雫だが、なぜかこの時は機嫌が良かった。本来立ち入り禁止であるはずの屋上に俺がいることに触れなかったくらいに。

二つに結った長い髪を揺らし、軽やかな足取りで壁にもたれかかる俺に近づいてきた彼女はこう言った。

「まだ持ってるんでしょー？」

「なんの話だと思ったね。」

「昨日御石さんに貰ってたじゃない、ピアノのコンサートのチケット」

笑顔で言うこいつはなにか怖かった。

「聞こえていたのか」

「んもう、どうでもいいじゃないそんなこと、さっさとあたしに渡しなさいよお。どうせアンタは興味ないんでしょ？」

「こわっ！お前誰だよ！」

「明日なんでしょお？」

「そうだけど…、べつに俺が行かないとは言っていないじゃん」

そうさ、これはかくやのために貰ったチケットだ。昨日は言いそびれたが今日こそはきちんと誘おう。

なんてプランを考えていた俺だが…、口が滑った
という時に使うのだろうな。 とはこ

「そういえばお前音楽に興味があるんだったな」

俺がそう言つと雫は五月にここで話した時と同じ反応を見せた。

「な、なに言ってるの…！べつに興味なんてないわよ！」

「はいはい、わかったわかった」

興味津々じゃねーか。

「いいから黙って渡しなさいよ！」

「馬鹿かお前。俺も行きたいんだよ」

もちろん一緒に行く相手はかくやだ。

しかし俺の言葉を勘違いして受け取ったのか、雫はほんのり頬を染めてまるで独り言のようにこんなことを言い出しやがった。

「えっ？アンタが…、あたしと…？でもそんな急なこと…。お洋服だつて選んでないし……」

なにか勘違いしてますよね。絶対勘違いしてますよねこの子？

「いや俺が言ったのはそういう意味じゃなくてだな…」

「うそ、どつしよう…。あつ、でも待ち合わせとかどうするの？…」

……待ち合わせっ！？なにこれまるでデートじゃない…。でもあたしそついうの不慣れだし……」

聞いてますか？聞いてませんよね？断じてデートではありませんよ？

だがそれからも雫の独り言は止まらない。

数分間ぶつぶつと呪文を唱えた雫はなにかを決心したように何度か首を縦に振った。

「その決闘受けて立つわっ！」

け、け、け、決闘！？な、な、な、なんの話をしているんですか
アンタは！？

「会場はどこ！？」

「決闘の会場…？」

「はあ？なに言ってるの。演奏会の会場よ」
怒っていいよね？

しかしまあ、こいつに口で勝てる見込みがなかったので渋々だが
演奏会の会場を説明することにした。

場所はこの街から二駅ほど離れたところで、こういうのはどうか
と思うが何も無い田舎町だ。

俺が場所と時間を説明すると雫はビシッと人差し指を俺に向けて
言った。

「明日の朝10時に駅前まで待ってるからっ！」

そう吐き捨て、勢いよく屋上のドアを開けて足音高らかに階段を
降りて行った。

どうやら明日は決闘の日らしい。誰と決闘するんだろうね……………
…。はあ……………、流れるに絶対俺だよな…。

でもこんなに表情が変わる雫を見たのは初めてのことだった。
少しだけ、ほんの少しだけだが俺の中の月夜見雫の印象が変わっ
た気がした。

君の狂詩曲04

学校の屋上でそんなことがあった日の夜。ピアノのコンサートの件をかぐやに言おうか言うまいか悩んでいた。

屋上から教室に戻ると雫は明日のことには一切触れないし、だからと言って俺から話を切り出すのも恥ずかしいといふかなんといふか、まあ躊躇われることだったんだ。

明日の10時に駅前で待っている。そう言われたままの状態なのだが、もし俺がその時間に現れなかった場合、雫はずっと待っているつもりなのだろうか。

メール一つで簡単に連絡が取り合えるこのご時世、しかし困ったことに俺はツインテールの連絡先を知らない。本当に困った。

今かぐやは風呂に入っていて、俺はリビングのソファに毎度ながらだらしなく座っている。

うーん、どうしよう。こうなってしまった以上かぐやとコンサートに行くことはもう諦めるしかない。チケットは二枚だけだし雫行く気満々だったし…。

頭を悩ませている間、時間はこれでもかかっていくくらい早く過ぎて行きやがる。どうしてだろうね。どうせなら授業中にもその能力を發揮してくれないか？

なんてつまらないことを思っているうちに我が家のお姫さまが風呂から上がってきたよ。洗濯機をピッピと設定している音が聞こえてくる。

かぐやは必ず俺のあとに風呂に入り、上がった時に翌日の朝洗濯が終わるように毎日予約している。ちなみに家事の中で風呂掃除だけは俺の仕事だったりする。そんなこと今はどうでもいいか。問題は今俺の手に握られているチケットの件だ。

「あら、まだ起きていたの？」

濡れた髪をタオルで拭きながら、脱衣所から出てきて開口一番だった。

もともと綺麗な黒髪をしているし濡れてさらに黒く光るその髪は、彼女をより大人っぽく、そして色っぽく見せていた。

「明日は出かけるのでしょ？だったら早く寝なさい」

濡れているのは髪だけではなく唇もだった。その唇が小さくゆっくりと動くので一瞬クラっとしそうになる。これが悩殺ってやつ？

そんなことより…、明日の出かけるなんて言ったか？いや言ってるぞ。

「明日のことお前に言ったっけ？」

「言われていないけど、でもだいたい想像はつくわよ。どうぞせめてその女とデートなんですよ」

ふふっと笑って彼女はそう言った。言葉に棘があるようには聞こえなかったし、俺が雫とピアノのコンサートに行くことについては気にしていないのかもしれない。

かぐやの機嫌がよさそうなので口が軽くなっていたんだろうな。俺はこんなことを言ってしまった。

「実はそうなんだ！。雫がピアノのコンサートに行きたいらしくて

さ。あつ、栗ってわかる？一組の委員長のやつな
「なっ……………」

絶句。圧倒的に絶句。

俺は笑い話程度に言ったつもりだったけど…。かぐやは綺麗な切れ長の目を見開いて、ついでに口も開きっぱなしで驚異的な負の才一ラを俺に浴びせていた。

「昨日あなたがチケットを二枚持っていたから冗談で言ったのだけれど…。まさか知らない女と休日に出かけるなんて…」

ふるふると肩を小刻みに揺らして怒っていらっしやる。

「あれは私と行く為の物じゃなかったの…?」

「そのつもりだったんだけど…」

「けど?」

ひい…!どうか怒りをお治めください…。

「ふーん、そこで黙ってしまうのね」

「いやだから…」

「質問」

「はい…。なんでしょう?」

「私はあなたの何?」

何って聞かれてもなあ…。それに怖すぎる。なんかもう目が怖すぎる。

「……………い、従兄妹?」

と答える俺だが首を横に振られてしまう。どうやらこれは誤答らしい。

「なに?」

もう許してくれよ…。

「な・に？」

このままでは永遠に「なに？」を繰り返されそうだったのでこう言うしかなかった。

「……婚約者？」

すると納得がいく返事だったのか目を閉じてゆっくりと首を縦に振ってくれた。

「いい子ね、ヒカル」

もうやだっ…！こんなやつと一緒に住むのはやだよ…！誰か代わってくれよ…！

いい子ね、だと？何様だよお前、なんて言ったら殺されるだろうか。あり得る…。

*

それから少し言い合ったが、「明日はずっと家にいなさい」とそう言われ、俺は泣く泣くその言葉を了承するしかなかった。

そして問題の土曜日の朝。

起きて以来ずっと時計を気にしているがすでに10時半過ぎ。出てくるのは溜息ばかりで精神崩壊まであと僅か感じてきた。

今日のこととはなかったことにして雲には月曜日に謝ろうと考え始めていた時だった。

予告なしに鳴りだす俺の携帯電話。普通予告なんてねーよってツッコミはこれの際どうでもいい。

着信は未登録の番号で、もしか…と思いつつ電話に出た。

「アンタっ！今どこにいるの！！！！さっさと来な
ブチッ。」

びっくりして切っちゃったー！

鼓膜破れてないかな、と耳をさすつてしているとまた同じ番号からか
かってくる。

「一度殺されたいようじゃない」

電話の相手は地獄の底から聞こえてくるような声だった。という
か相手は月夜見雫だった。

そしてなんとも間が悪い時に洗濯物を干し終えたかぐやが俺のも
とにやってくる。

「誰と電話しているの？」

もう最悪だ…。このまま家から出なければ雫に殺され、雫とピア
ノのコンサートに行けばかぐやに殺され…。

あれ？これももしかして俺死ぬんじゃない？

しかし、しかしだ。一方的にとはいえ雫とは約束しているわけだ。
どちらの死を選ぶかなんて初めから決まっていたんだ。

「悪いかぐやっ！晩飯までには絶対帰るからっ！」

「ちよつとあなた…！」

もうどうにでもなれ。そんな気持ちで財布とケータイだけをズボ
ンのポケットに放り込み逃げるように家を飛び出した。

しかしどうして雫は俺の番号を知っていたのだろう。まあそれは
会ってから聞けばわかることか。

君の狂詩曲05

全力疾走 とまではいかないが、それなりに駆け足で俺は駅へ向かった。五月に御石と来た喫茶店が目の前にあるとこな。

その駅は家から徒歩10分くらいなので、走った結果その半分の時間で着くことができた。

家から富商と逆方向にある駅は、寮生であるあのツインテールからしてみれば結構な時間歩かなければならなかっただろう。

到着した俺はここで待っているはずの鬼ゴーストを探そうと周りを見渡すと、

「死ぬ覚悟はできてるわよねえ」

收容スペース20台ほどの駐車場で、車の陰から閻魔様が地獄への手招きをしておられた…。

目を吊り上げ二つに結った長い髪をゆらゆら揺らして怒り狂っている身長150センチの小さな閻魔様は、細すぎる太ももを大胆に晒した膝上20センチくらいの赤と黒のチェックのミニスカートと黒いソックスに黒いロングブーツをお召しになっていらっしやる。

黒が好きなのか？閻魔様だからか？赤と黒は血の色をイメージしているのか？そうなのか？

上は制服みたいな感じの服。全体的に見れば何かの漫画のコスプレ制服っぽいな。たぶんタイトルは「閻魔様は女子高生!？」みたいな感じだろう。

「冗談を言っている場合ではない。土下座すれば命は助

かるだろうか。

「遅れてすみませんっしたっ!!」

さすがに人が多いこの場で土下座は恥ずかしいので俺は深々と頭を下げた。

「誘った相手を待たせるなんていい度胸じゃない」

学校で見る時と違って軽くメイクなんかしている妖怪ツインテールは、可愛らしくほんのりピンクのチークを入れているが、俺には怒りで顔を赤くした閻魔様にしか見えなかった。

「今何時？」

「…10時……」

「何分？」

「…55分……」

「待ち合わせの時間は？」

「…10時……」

「何分？」

「ちょうどです……」

俺がそう言つと、ピキピキと血管を額に浮かべる閻魔様は今にも地獄行きの判決を下そうという勢いで俺の顔面に右ハイキックをかましてきやがった。

「とおりやあああああ!!!!」

「ぐふおっ!!」

「そういうわけでアンタを殴り殺す!!!!」

「蹴った後に言うセリフじゃねえ!!!!」

「うるさい黙れっ!あたしがどんな思いで“二時間”も待ってたと
思ってたのっ!」

叫びながらも悪魔あくまの蹴りは俺の顔面にクリーンヒットし続けた。

決闘とはこのことだったのか……ガクッ。

あ、ちなみに蹴られながらも純白シルク生地のスーツを目で追っていたことはいい思い出だ。

街を歩く人にガン見されながらもツインテールの息が切れるまで攻撃に耐え続けた俺は現在駅のホームで電車を待っている。とりあえずまだピアノの演奏会には十分間に合う時間だったから。

どうやら雫は演奏会の前に二人でご飯を食べに行きたかったらしいのだが、演奏会開始の時間は午後12時45分。ゆっくりする時間はないみたいだ。

そうそう、俺の携帯電話の番号は土御門から聞いたらしい。一組の委員長同士なので土御門の連絡先は知っていたとのこと。

「……まだ怒ってます？」

「ふんっ、もういいわよ。とりあえず来てくれたから安心した。来なかったら抹殺しようと考えていたもん」

「……………」

来て正解でしたね……。

ここも街とはいえ数分置きに電車が来るような“都会”ではない。ホームのベンチに二人腰掛けて次の電車を10分ほど待った。当然会話は弾むはずがなかった。

感覚的には数時間の待ち時間の末にようやく電車に乗り、二つ先の駅まで約15分の電車の旅が始まった。

外の景色は次第に田舎の長閑な風景のしかに変わっていく。

俺とツインテールは乗客が少ない鈍行列車で二人肩を並べ窓の外に目を向ける。

収穫時期はまだ先だろう米の稲穂が綺麗な緑色を風になびかせてい

る様を眺めたり、車窓から見えるまた別格の富士山を眺めたり。

なんだこれ、まるでデートみたいじゃないか…。

言っておくが俺と月夜見つきよみは“同じクラスの隣の席のやつ”というだけ関係。これといって仲が悪いわけではなく、だからといって仲が良いとも言い難いのだが　　まあアレだ、腐れ縁みたいな感じ。それだけだ。それだけのはずだ。

およそ15分電車で揺られると目的の駅に着き「さてと」と、機嫌がなおつたらしい雫が、むしろ上機嫌で歩き出した。

「あと一時間かぁ。ご飯どうする?」

「一時間ありや十分なんじゃないの?」

「30分前には会場に入っているのが常識なの」

「…それ本当に常識なのか?」

「でもここから歩いてたら20分はかかりそうだし、終わってからどこか食べに行かない?」

「うーん、そうだな」

「うんっ」

ということとで昼飯は抜きになり会場に向かうことになった。

「お前本当に音楽が好きなんだな」

「むう」

怒ったような、恥ずかしいような顔で睨んでくる。

べつに隠すようなことじゃないと思うんだけど、どうしてこの話をするとかんな態度を取るんだろう。

「隠してももつばれてるぞ?」

俺がそう言つと「はぁ…」と一息ついてツインテールは話し始めた。

「ま、隠してるってわけじゃないんだけどね。あたし初等部の時ピアノ習ってたんだ。でも中等部が上がってからは親が続けさせてくれなくて…」

こいつには珍しく真面目な声色だった。

「うちのお父さん、県警のお偉いで頭固くってさー。あたしにお母さんの仕事継がせるために富商の受験受けさせられて。あ、お母さんは経営コンサルタントの社長さん」

こいつ金持ちの娘だったんだ。そうは見えねーけど。

「だから中等部上がった時に止めさせられちゃったってわけ。好きだったんだけどなー、ピアノ」

「へえー。上手なんだ、ピアノ」

「誰が上手だったなんて言った？」

「あ、そうなんだ…」

つまり下手だったってわけか。

会場への道は雫が完璧に知っていたので迷うことなく無事に着くことができた。

時刻は12時15分で演奏会が始まる時間のきっちり30分前だった。

君の狂詩曲06

コンサート会場の前に経つとツインテールはやや興奮気味に俺の手を取って早く中に入ろうと急がす。

俺は手を握られてちよつとドキツとしたが、今から聴くピアノの演奏のことだけしか頭にならないツインテールは俺たちが手を繋いでいるなんてことはまったく気にしていない様子だった。

「ほらっ！早く入ろうよっ！」

嬉しそうにニコニコ笑っている。

「うわっ、そんな急に引ッ張るなよー」

「なによー。いいじゃない」

「本当にピアノが好きなんだな」

するとこいつは一度ゆっくり目を閉じて、これまでに見たこともない、すごく可愛い笑顔でこう言った。

「好きだよっ」

これは反則だ、と思った。

もちろん“ピアノが”好きという意味だけど、俺の頭の中では“ピアノが”とは違う言葉が繰り返されているわけで。

心臓張裂けそうだ。

「ん？どうしたのよ。さっさと行くわよっ」

「お、おう。そうだな。えーっと、チケットはっ……」

ポケットの中には……なし。財布の中にも……なし。

「ああああああああああああああああああ！チケット忘れた

「あああああ！！！！」

「やべーよ！ここまで来て会場に入れませんかじゃ話にならねーって！」

「どうしてケータイと財布しか持ってこなかったんだよ俺…。とうかチケットくらい財布に入れとけて…。」

「はあ！？忘れちゃったの!?!」

「栗の怒りのボルテージがみるみる上昇していくのがわかる。」

「アンタねえ！会場目の前にしてチケット忘れたとはどういうことよっ！せつかくいい感じだったのに雰囲気ぶち壊しじゃない！」

「へ?」

「こつちの話よっ!!！」

「そう言う顔を真つ赤にした妖怪ツインテールのグーパンチが俺の顔面を見事に捉えた。」

「うっ…うっ…うえうえっ…」

「なに？泣いてんの？キモッ」

「腕を組んだツインテールが頬を押さえる俺を見下している。この子絶対ドSだよっ！」

「俺はコンクリートの地面に膝をついて本当に泣きそうになった。」

「はあーあ、気分萎えちゃったじゃない。どう責任取ってくれんのよ」

「会場の前で呆然と立ち尽くす二人。時刻は12時40分。もう諦めて帰るしかないね…。」

「なんて考え始めていた時。

「はい、忘れ物よ」

「黒塗りの、いかにも高級車ですって感じの車に乗って月野かぐや

が現れた。かなり不機嫌そうだった。

俺は、どうしてお前が現れるんだよ！？って顔をしていたと思う。

高級車の運転手はどうやら月野のお手伝いさんらしく、かぐやのことを「お嬢様」と呼んでいた。

忘れていたけどこいつも金持ちの家のお嬢様だったんだよな。それも超が付くほどの金持ちだ。

突然登場したかぐやが持ってきた物は、言うまでもなくピアノの演奏会のチケットだった。

俺は恐る恐るチケットを受け取る。

「さ、サンキューな…」

かぐやの手に握られたチケットを受け取ると、氷点下の視線と声が俺を襲う。

「帰ったらお仕置き」

獲物を狙う肉食獣のような鋭い目で睨んでやがる。

お仕置き！？なにされるの俺！？

ツインテールも怖いけどこいつは倍くらい怖いからな…。

晩飯抜き？食器洗い？

いやそんな生ぬるい罰なわけがない。生ぬるいどころかこれでは冷たいくらいだ。

じゃあなんだ？

手足を縛られて鞭で打たれまわるとか？

想像してみる

。 。
すぐさま想像をやめる。

鼻血が出そうだ。べっべつに悦んでるんじゃないからなっ！

「ちょ、ちょっと待ってよ！どうして月野さんがチケット持ってこ

「こ来るわけ!？」

危険な妄想の世界から俺の助けしてくれたのはツインテールの叫び声だった。

現実世界におかえりなさい俺。

剣幕な表情のツインテールと冷めた表情のかぐや。

「あら、はじめまして」

「あ、はじめまして…。じゃなくてっ!」

「私は彼の」

「従兄妹っ!!俺とかぐやは従兄妹同士なの!!」

あぶねーよっ!なに言い出すんだコノヤロー。まさか婚約者、なんて言おうとしたんじゃねーだろうな?

もし言葉を遮らなかつたら終わってたな…。

「彼とは一緒に住んでいるの」

終わったあああああああああああ!

終わったよっ!何がとは言わないけどなんかもう終わったよっ!ほら見る!雫の顔が青ざめてやがんど。

「ふ、ふーん…。そうなんだ」

冷静を取り繕っているのがばればれた。

「あなたが彼を誘惑した女なのね」

「誘惑っ!?!」

「でも無駄よ。彼は私の」

「従兄妹っ!!従兄妹だからっ!!」

アンタこえーよ!帰ったらお仕置きでもなんでも受けますから!どうか今は黙って帰ってください!

それにもう演奏会が始まる時間なんですど…。

*

お分かりいただけただろうか。

これが二日前の木曜日の昼から始まっていた、現在ツインテールと二人でピアノのコンサート開始を待っているまでに至る過程です。

ちなみに演奏会が始まる時間だったのでかぐやには丁重にお引き取り願いました。

俺たちは開始ギリギリの時間に駆け込み乗車さながらの勢いで席に着いた。

「ケータイの電源切った？」

「切りました…」

「終わるまで音立てちゃいけないから」

「はい…」

会場まで走っている途中「月野さんのことは後でみっちり絞ってあげるから」と、取り調べ宣言を受けた俺は静かな暗い会場の空気に押し潰されそうだった。

君の狂詩曲07

12時45分ぴつたり演奏会の幕は開けられた。

司会者みたいな人が演奏者の名前やら課題曲やら話していたけど、俺の耳には右から入ってそのまま左へと出て行ったらしい。ようするに俺はまったく興味がなかったわけだ。

照明は演奏者のみを照らし場内は薄暗い。隣に座っている雫の甘い香水の匂いが俺の鼻孔をくすぐり変な気分になる。

しかし、演奏が始まると話は別。場内に響くピアノの音色は俺のやましい心情を浄化するには十分な威力だった。

音楽なんて興味のきの字もなかったのだが、隣で雫がそうしているように、静かに目を閉じ耳ではなく心で聴くと、不思議と心地よいものだった。

ピアノのことなんてまったく知らない。知っていてもベートーベンやシューベルトといった有名なやつだけだ。それもその名前だけで曲なんかは知らん。

ベートーベンの…、ジャジャジャジャーンってやつ　　な
んだっけアレ。やっぱ知らねーや。

まあ俺のピアノの知識なんてこんなもんさ。

どうやら演奏している人は小学生から高校生くらいまでの、いわゆるアマチュアの人たちで、一人15分の制限時間があるようだ。

人数は10人くらい。それでも二時間は軽く超えるので終盤ではさすがに腹が減ってきた。

最初の方こそ安らかな気分で聴いていたが、今では腹の虫が鳴るのを必死に我慢するので精一杯ってところだ。

それでも演奏会が終わるまで一度も席を外さず、ピアノの音色に
耳を傾けつつ雫の香水の匂いをくんかくんか
いや、
なんでもない…。

*

「腹減ったあー」

長かったような短かったような演奏会が終わり、外に出たのは午
後の三時過ぎだった。

「来てよかったでしょ？アンタも少しはピアノに興味持ったんじゃ
ない？」

「そうだなー。少しは、な」

ずっと座りっぱなしだったので一度伸びをするとかなり気持ちよ
かった。

七月の午後のぽかぽか陽気が心を洗ってくれているように感じる。
が、残念なことにこれから尋問タイムがスタートするのだ。

「さてとっ。じゃあご飯食べに行こっか」

「おう」

ということをやってきたのはファミリールレストラン。

三時を過ぎた田舎町のファミレスなんて空席だらけだ。いるのは
見た目だけのヤンキー共くらい。

案の定、店内には俺たち含めても10人いるかない程度で、注
文すると待つ時間も少なく料理が出てきた。

「ねえヒカル？」

「ん？」

「とりあえず今日はありがと。ピアノの生演奏聴くのって何年ぶりかなー」

「楽しかったか？」

「当たり前じゃない」

雫はニコツと笑いながらドリンクを飲んだ。

こいつの笑顔を見る回数はこの数日で著しく増えたな。

「で、ここから本題」

「ついにきたか…」。

「月野さんってあの月野ブランドのでしょ？本当にアンタ月野さんの従兄妹なわけ？」

「まあ…そうだな。父さんが月野の副社長なんだ」

かぐやに聞いた話だけだ。

「へえー。あの月野ブランドのねえ」

「あの月野ブランドのな」

「でもさ、どうして一緒に住んでるの？兄妹じゃなくて従兄妹なんでしょ？」

「それは…」

「なに？隠さなくてもいいじゃない」

「俺とかぐやの両親が世界旅行中なんだ」

「ということはつまり……」

つまり？

言いかけた雫は一呼吸置いて叫んだ。

「アンタら二人で住んでんの!？」

そうだけど、そんなに驚くことか？

いや普通は驚くか。俺はただ慣れただけ。

「そういうことになるな…」

「ま、まさかアンタら変なことしてんじゃないでしょうね!？」

「変なことってなんだよ」

「えっ！？いやその……。変なことは変なことに決まってるじゃない！」

そう言っつて顔を赤くして俯く。いったい何を想像したんだか。

「なんもしてねーよ。従兄妹だぞ？それにアイツとはもう兄妹みたいな感覚だしな」

「兄妹！？えっ！？なにその特殊な性癖」

「……お前馬鹿だろ？」

馬鹿だよ。馬鹿確定だよ。近年稀に見る馬鹿だよ。

こいつの誤解を解くには一苦労した。

学校の屋上で演奏会に行く話をした時もそうだが、こいつは一度思い込むとそこから抜け出せない節があるようだ。

そのせいで今日俺がこいつと二人でここにいるんだしな。

まあ、嫌じゃないけど…。

「それじゃあさー、アンタは月野さんとは何も無いわけね」

「婚約者らしいっすよ？なんて言えない。言いたくもない。」

「だから何もないっつて」

「ふーん、そうなんだ」

「なんだよその顔」

「べっつにー」

そう言っつては勝ち誇った顔で俺を見ていた。ちよつとムカついた。

「ならアンタに頼みたいことがあるんだけど」

「言っつてみる」

内容次第では即却下だ。

「文化祭まであと一ヶ月ちよいっつてとこじゃない？あたしも希先輩のそみといういろいろ企画考えてるんだけど」

「

希先輩というのは俺が通う富士見商業高校の高等部生徒会長で現在二年生。本名は姫路希さん（巨乳）。
聞いた話では大きな財閥の娘さんらしい。
それにしても富商ってスゲー学校だな。今後の日本の経済を支える輩の集会みたいなもんか？

「でさー、このままだとステージ企画の尺が余っちゃうんだよねー」
雫は楽しそうに話し続けた。

「だからアンタも手伝いなさいよ」

「はあ!？」

俺は耳を疑ったね。

急に何を言い出すんだ。そもそも俺は生徒会の人間じゃない。

「夏休み前にクラス展示とかは決めちゃうし、展示の準備は夏休み明けじゃない？だからアンタ暇でしょ？夏休み」

「何が言いたいんだよ」

「ふふーん。あたしいいこと考えたんだよねー」

「だからそれが何かと聞いてんだよ」

そして、ずいぶんと勿体ぶった後にツインテールはこう言った。

「あたしが文化祭でピアノのステージ演奏するからアンタは練習に付き合いなさい！」

君の狂詩曲08

「はあ!？」

俺は迷わず言ったね。

何が悲しくて夏休みにツインテールのピアノの練習に付き合わにやならんのだ。

「そんなもん一人で練習しろって。…というか下手なんだろ？」

「だから練習するんじゃない！」

そんな笑顔で言わんでも…。

よく考えてみる。

そもそも下手だったピアノを三年間もやっていないんだぞ？ たった一ヶ月ちよつとの練習で人様に見せられる代物になるのか？

いや、ならないだろう。

ステージ演奏なんてやめちまえて。全校生徒の前で赤っ恥かくだけだ。

「あのさあ…。夏休みも生徒会で忙しいんだろ？俺はよくわからないけど」

「そりゃ忙しいわよ。生徒会役員だもん、あたし」

だもんって…。

「どうせアンタなんか夏休みは暇なんですよ」

「どういう意味だコラ」

「部活動はしていない、これといった趣味もない、彼女もいない、友達もいない」

「いるよっ！友達くらいっ！」

「冗談だつて。そんな変な顔しないでよ」

いらいらいらいらいらいらいらいらいらいら。

あーもうっ！なんだよこいつ。古傷えぐりやがって。実際に友達いないやつだったら間違いないく泣いてんぞ。
まあ、俺に友達がいなかったのは中学までの話だからよかったよ
うなもの…。

「いいじゃない。付き合ってたよあ」

唇を尖らせて、駄々をこねる小さな子供のように雲は言った。

かぐやほどではないが、身長の高いツインテールにはお似合いの顔だった。

甘えるように言う雲に俺はもう……。

「あーもう、わーっただよ！」

と、心にもないセリフを吐いた。

*

それから、「文化祭のクラス展示は何がしたい？」だの「期末
考査の勉強してる？」だの、それなりに楽しい会話が続いた。

高校のテストなんてものは、その考査期間中を除けば笑い話のネ
タにしかない。

試験の結果が悪くて落ち込むのもせいぜい結果が帰ってきた日く
らいのものだ。翌日にはケロッツとしてテストの結果のことなんて忘
れるのが定石。

試験前なんか「勉強してないー」とか「昨日すぐ寝てしまった
ー」とか友達と言い合っのが青春だと思っ。

完全に俺の偏見だけだな。

でも実際そうだろ？

そんな思い出が数年後に笑い話になるんだよ。

なんて、高校一年生が言っても説得力ないか。

時計の針が6時をまわった頃、そろそろ帰ろうかと雲が切り出した。

俺的には　　まだ帰りたくなかった。

ツインテールとの別れを惜しんでいるわけじゃねーぞ？

家に帰りたくないだけ。

つまり、家に帰るとかぐやのお仕置きが待っているからだああああああああああ！

嫌だあああああああ！恐ろしくて帰れねーよっ！

しかし、時間の流れとは残酷なものだ。

時よ止まれっ！なんて言っ止まるもんなら誰だってそうしてるさ。

壊れてんじゃねーの？っていうくらい揺れる鈍行列車に乗って地元に戻ってきたのが午後7時過ぎ。何度時計を見直しても我が家の晩飯の時間を過ぎていた。

「お前寮生だろ。送ってくぞ」

夕陽も傾き暗くなる頃だったので、さすがの妖怪ツインテールとはいえ女の子を一人で歩かせるのはどうかと思った。

「ん、いい。大丈夫」

俺の優しさはいとも簡単に薙ぎ払われた。

駅の前で携帯電話を取り出した雲は、「はい」とそれを俺に突き出した。

「なんだよ」

「連絡先、交換してよ」

ふんっ、とそっぽを向きながら、携帯電話を押しつけてくる。

そつけない態度だったけど、雫の頬はほんのり赤くなっている。

そんな雫がなんかもう可愛くて仕方なかった。

「素直じゃねーな」

「なにがよ」

「いや、なんでもない」

連絡先を教え合った俺たちは富商がある方向に歩き出す。俺の家と富商の寮はここから同じ方向だからな。

それからは、不思議と会話は交わさなかった。

俺の家へ曲がる道で別れを告げる。

「じゃあ、俺んちこつちだから」

「そう。じゃ、また月曜日にね」

「おう」

「あつ、待って」

悪魔かくやが待つ我が家へと一歩踏み出す俺をツインテールが呼び止める。

「なんだよ」

「今日は…ありがと……。楽しかった」

「そりゃよかったな」

俺も、わりと楽しかったよ。

「ああつ、待って!」

「まだなにがあんのか?」

「うう……」

「なんだよー。なにがあんなら言えよ」

「えつとね、だからその」

「ああ?」

「ピアノの練習っ!頑張ろっねっ!」

照れているのか、それとも夕陽の色だろうか。
雫の顔は真っ赤だった。

「ばーか。頑張るのはお前だ」

「なによー、その言い方」

「べっつにー」

雫は赤い頬を膨らませて「んー」と唸った。

「それにまだ一ヶ月以上先の話だけどな」

「ふんっ。わかってるわよ、そんなこと」

そう言つと、「はあ……」と大きく溜息を吐いて雫は続けた。

「あーあ、せつかくいい雰囲気だったのになー」

「そう言っなって」

「雰囲気ぶち壊すのが得意技？」

「なんだそれ」

「ふふっ」

「ははっ」

オレンジ色に輝く空と雲。

そして俺たちの頬も。

富商に編入して三ヶ月とちよつと。

これまでよりもずっと、学校に行くのが楽しみになった気がした、
かな。

君の狂詩曲09

雫と別れた後、俺はかなり舞いあがっていた。

ムフフフフ。やべーよ、なんだよアイツ。絶対俺に気があんだろ。ホの字か？俺にホの字なのか？ぐへへへへ。

まあ、ホの字なんて言い方は古いか。いまどきの言葉でいうと…
…胸キュン？

そんなことはどうでもいい。

しかし自然と頬が緩んでしまう。

一人歩きながらニヤニヤと笑っている俺は、もう土御門のことを気持ち悪いなんて言う資格はないと思った。

でもさ、でもさ！アレは絶対だって。間違いないって。

よく考えてみれば今日はデートみたいなもんだっだし、それに興味がないやつに連絡先なんか聞くか普通？

ピアノの練習の件だってもしかしたら夏休みに俺と会う口実かもしれないな…。

やべーよ。興奮してきたよ。

そついや照れたように笑う顔なんか超可愛かったなあ。

あいつの身長って150センチくらいだっけ。かぐやも小さいけどあいつはまったく可愛げないしな。

それに比べて雫はやばい。何がやばいって、そりゃもうマジやばい。

ちょっとツンツンなのがアレだけど、もともと童顔だし背は小さいし、マジ可愛いを具現化したようなもんだろ。

ん？

これって俺があいつにホの字？

立ち止まって少し考えてみる

「ないない！」

一人で声を上げる俺は近所の人から見たら完全に狂った人間だろう。

でもそんなこと気にしない。

それくらい今の俺は舞いあがっていた。というか天にも昇る気分だった。

「やべーな。どういふ顔で来週から会えばいいんだろ。土御門に相談してみっか！」

こんな具合にルンルン気分で家の玄関を開く。

「ただい……ま……？」

最高の気分の俺を待ち構えていたのは、玄関口で腕を組み、仁王立ちで氷点下のオーラを纏う我が家の姫様かぐやだった。

「おかえりなさい」

「ごめんなさい」

即答だった。

なぜだろう。真っ白になった俺の頭は謝罪の言葉を発するように自らの口に命令したようだ。

「あら、どうして謝るのかしら」

なんてことを言いながらも、かぐやからは怒りやらなんやらの負のオーラが出っぱなしだ。

「覚悟はできているようね」

「か……覚悟？」

それはお仕置き覚悟ですか？それともこの世とさよならする覚

悟ですか？

「とりあえず部屋に来なさい」

そう言われ、俺は生贄が行われる祭壇上に向かう気分です。短い階段を上る。

階段が異様に長く感じるのは気のせいではないはずだ。

なぜなら、この先は言わずとも知れた死刑場なのだから

*

辿り着いた先、寝室、今やかぐやに占領された“元”俺のベッド。待っていたお仕置きは、羞恥心から「ん」の字をとった羞恥死だった。

「お仕置きって……このことですか……？」

今俺はベッドに押し倒された状態。

その俺の上に覆い被さるようにかぐやが乗っている。

恥ずかしいどころの騒ぎではなかった。

心臓は爆音を鳴らし、毛穴という毛穴から汗が噴き出している気がした。

「あの……かぐやさん？」

「動かないで」

暗くなる外。電気もつけずに密着する若い男女

どうしてこうなった！？意味がわかりません！！

「ねえ、私の話、聞いてくれる？」

俺に覆い被さるかぐやは、冷たい手で俺の首筋をそつと撫でながら小さな声で言った。

「あの子のが好きなの？」

かぐやの熱い息が頬に当たる。すごく、変な気分だった。

「……」
「じゃあ、私のことは好き？」

「……」
「私は好きよ、あなたのこと」

「……！？」
「婚約者だからではないわ。毎日優しく接してくれるあなたが好き。私のご飯を美味しいって言ってくれるあなたが好き」

「……」
「忘れたの？ 私たちはあの子を迎えに行かなければならないの

月に行かなければならないの」

俺の頬や首を撫でていたかぐやの手は徐々にエスカレートしていき、最後には俺を抱きしめる形になりその動きは止まった。

ゴロン、と寝がえりを打つように、抱き合った俺たち横になる。気付けば、俺もかぐやを抱きしめていた。

向き合った形で横になるとさらに心臓が高鳴った。

「キス、して」

「はあ！？」

「いいから、して」

「ちよつと待ってよ……。えっ！？キス！？」

内心かなり焦った。暗くてよく見えないけど目の前には超絶美少女のかぐやがいて。

「はあ！？キス！？」

お仕置きというかこれじゃあ……。ご褒美じゃねーか馬鹿っ！

って、なに考えてんだよ俺！キスなんてできるわけないじゃん！

「いやな、そういうのって普通付き合ってからするもん……んむう！

「？」

俺の口は塞がれた。かぐやの唇によって。

ファーストキスだった。

こういう時、どうするのが作法なのだろう。目は閉じるのか？それとも相手を見るのか？

しかし、そんなことを考えている余裕はなかった。残念ながら恋愛経験ゼロの俺にはな。

俺は目を閉じていたのか、それとも開いていたのかさえわからないくらい動揺していた。

「あむ…んふ………」

かぐやからのキス攻撃は止まらない。

なんかもう色々とやばかった。

初めて女の子に触れた。

初めて女の子とキスをした。

初めて女の子を抱きしめた。

悪い気分じゃなかった。

むしろ夢見心地でいい気分だった。

でも

この胸の高鳴りと裏腹に感じる罪の意識はなんだ…。

どれだけ時間が経っただろう。数秒かもしれないし、数時間かもしれない。それくらい俺の思考能力は完全に麻痺していた。

「もっと私に触ってもいいのよ？」

「さわっ！？」

甘い、熱い口づけで溶かされた俺の脳みそは、理性なんてものは持ち合わせていなかった。

ベッドの上で間抜けに腰を抜かしている俺の頬を、冷たい掌が両側から包み込み

熱い唇が再び、俺のそれに重ねられた。

「あのさ……」

「なに？ 続きはしないわよ。これはあなたが変な女と出かけたお仕置きなのだから」

「続きがしたいわけじゃねーよっ！」

「わかっているわ。あなたの心の中に私がないことくらい」

「……………」

ならどうして。 。
どうしてこんなことをしたんだよ。

「今はあの子に譲ってあげる」

「はい？」

「忘れないでちょうだい。あなたは私の婚約者だということ」

「それって……」

「そのうち気付くわ。あなたが誰を選ばなければならないか」

「

窓から差し込む月明かりに目を向けて、寂しげな表情を浮かべて言った。

「あの子のことを覚えているのなら

「

「ずいぶんと口が悪いのね。朝からお仕置きが必要かしら？」
「ひいっ…！」

あんな恥ずかしいお仕置きはもう二度と嫌です…。

同棲中の同級生、しかも従兄妹関係にあたる女子と破廉恥極まりない行為をやっちまった俺。

よくよく考えると顔から火が出るくらい恥ずかしいことだった。しかし、そんなことがあった後もかぐやは顔色一つ変えないで、その上そのことをネタに食器洗いと洗濯を強要しやがった。

どうでもいいけどユスリは犯罪だよ？

「相変わらず可愛い寝顔ね」

「もうやめてっ！ いじめカッ」悪い！

「ふふっ」

「……………泣くぞ」

「あら、あなたの泣き顔なら見てみたいわ」

もう…泣いていいよね？

「さて、朝ごはんにしましょうか。もうできているから早く着替え
てらっしやい」

「……………」

「返事」

「はい……………」

「それと、今日もお皿洗いはあなたの仕事だから」

「Why…？」

思わず言い返してしまった。

「理由が聞きたいの？」

「いやべつに…」

「誰かが私に欲情して女の子の大切なファーストキスを奪ってしまったの。さて誰だったかしら…」

君の狂詩曲10（後書き）

君の狂詩曲^{ラソソポイ} 完

夏の協奏曲01（前書き）

夏休み編です。

夏休みはいろんな出来事がありますが、月夜の序曲編ではそのほんの一部だけです。

ここでの協奏曲は二重奏曲コンチェルトって感じで解釈していただければ…。

この物語は竹取物語の固有名詞等をお借りしています。

当然フィクションです。登場する個人、団体…以下省略。

夏の協奏曲01

夏休み
それは学生にとってどれだけの意味を持つ
だろう。

部活に励む者。趣味に没頭する者。これでもか！っていうくらい
遊びまくる者。

学生にとって夏休みほど待ち遠しくてたまらないものはないだろ
う。

なんてことを言ってはみるものの、夏休みはもう少し先の話なん
だなあこれが。

「やかましいわっ！誰が何と言おうが一組はコスプレ喫茶をやるん
や！委員長である俺が決めたんや！」

「サイテー！」

「引っ込みなさいよ土御門！」

「栗ちゃんからも言っちゃってよ！」

「うわっ！痛っ！めっちゃ文房具飛んできたでっ！」

クラスの前に立っているのは一組のクラス委員の土御門バカと月夜見ツインテ
雫ル。

期末考査が終わったのが先週のこと、夏休みを来週に控えた今
週はテストの採点週間ってことらしい。ちなみに授業はほとんど自
習だった。

今は夏休み明けの文化祭でクラス展示を何にするかという話し合
いなのだが…。

土御門がコスプレ喫茶をやると言い張るので主に女子生徒からひ
どい罵声を浴びせられている。まあ、そりゃそうだろう。

もう一人のクラス委員であるツインテールはというと、テストの出来が悪かったらしくかなり落ち込んでいたので話し合いどころでは様子。あいつ頭悪いからなあ……………。

編入生の俺と土御門は、自慢するわけではないが富商に編入できるだけの学力があるわけだ。当然テストは難なくこなすことができた。それに大学進学のための特別授業を放課後に受けている土御門は今回も学年トップの成績だと思う。

「ねえ竹本くん、雫ちゃんどうしたの？元気ないようだけど」
近くの席の女子生徒が訪ねてきた。

「テストの出来が悪かったんじゃないの。でもどうしてそれを俺に聞くんだ？」

「え？だって雫ちゃんとは付き合ってるんでしょ？」

「……………ねーよ」

「そうなの？だってこの前デートしてたじゃない」

「はい！？」

デート！？

ピアノの演奏会を見に行ったことか！？でもそのことは誰も知らないはず……………。

「かなり噂になってるけど……………」

「なんてこったい」

どうして噂になっているんだ。

え！？誰も知らないはずだよね！？

かぐやのヤローかつ！

絶対そうだ。そうに決まっている。俺が雫と出かけたことを知っているのはあいつしかいねえ。

うつわ、マジかよ。帰ったら覚えとけ。たぶん俺が言い負かされると思うけど。

かぐやに対する闘争心を燃やしていると、土御門が教卓を叩いて叫んだ。

「立ち上がるんや男子！多数決なら女子には負けんへん！みんなも見たいやろ？女子のコスプレ！！ナスにメイドにスチユワーデスに婦警にチャイナドレス！！！想像してみ……って痛い痛い痛いっ、ちよっ……！三角定規は危険すぎやてっ……！」

土御門……己の欲望を威勢よく言ったことだけは認めてやるよ。しかし相手が悪かったな。一組の女子はお前の意見なんて聞く耳を持たないらしいぞ。

女子からの文房具投げ攻撃で土御門は床に崩れ落ちた。

「ぐはっ………。俺はどうやらここまでみたいや……。爺さん………。あとは頼んだ……。ガクッ」

気持ち悪い笑みを浮かべた土御門はグツと立てた親指を俺に向けてそれつきり動かなくなった。南無南無。なにこの茶番。

えっ、俺！？

土御門^{アホ}が俺の名前を出したのでクラス中の視線が一気に俺に集まるのがわかる。

「ほらヒカル、早くこっち来なさいよ。アンタは邪魔っ！」

「あ痛っ！」

教卓の横に立っていたツインテールまで俺を呼ぶ始末。

ちなみに土御門は雫に腹を蹴られてピクピクしている。それがまた恐ろしく気持ち悪いこと。

うづくまる土御門以外のクラス全員が俺を見ている。どうやら前

に出ないといけない空気だなこれ。

「わーっただよ！行けばいいんだろ！」

とは言ったものの、いざみんなの前に立ってみると何を話しているかわからなかった。

「おい雲、お前司会やれよ」

「えっ、ああ、うん……」

並んで立つと、ツインテールはなぜかポツと頬を赤く染めて俯いた。

……。　　というか、その反応は駄目でしょ……。誤解を招きかねないって……。

ツインテールがこんな反応をするもんだから、俺が思った通り、女子たちがキヤーキヤー騒ぎ出した。はあ……。

「えーっと、コスプレ喫茶の他に何かやりたいことある？」

現在クラス展示の案は土御門クンが言い出したコスプレ喫茶だけだった。

結局、お化け屋敷やらかき氷屋さんやらの無難な線の提案が多く出て、この中から多数決で決めることになった。

30人分の紙を作ってそれに何がしたいかを書いてもらい、それを集計する形式だ。

そして集計結果。

「……………」

「……………」

俺とツインテールは固まった。

ふと、さっきまで床に転がっていた土御門カスが勢いよく起き上がり俺の手にある集計結果を見る。

そしてやつがニンマリ笑うとクラスの男子たちも同じくニンマリ

夏の協奏曲02

「むふふ。むふふふふふ」

「ご飯できたわよ。それとその気持ちの悪い笑いをやめなさい」

「むふふふふふ」

「やめなさい」

「むふふふへへへへ」

「……………踏まれたいの？」

「むふふ　　ぐはっ！」

俺がリビングのソファーに座り携帯電話を眺めて自覚しているが気持ち悪い笑い方をしていたところ、晩飯の用意を済ませたかぐやに腹部を踏みつけられた。

こいつのおかげで危ない世界に目覚めつつある今日この頃

しかし腹を踏みつけられながらも笑みを浮かべ続けている俺はもう終わっていると思う。

でもこれには理由があるからなんだって！

その理由は、俺（脚フェチ）を踏みつけてくださる女王様かぐやが短いスカートをお召しになっていらっしやるからではない。それは二割くらいだ。

残りの八割は何かというと、さっきからメールのやり取りをしている月夜見マイエナジェルが可愛すぎるからだ。

ピアノの演奏会デートの日に連絡先を交換した俺たちは、今までも、まあちよくちよくメールを送ったりしていたのだが、今は違う。今やり取りしている内容は、夏休みにあいつのピアノの練習に付

き合つ話だ。

しかも、最近になって文章にハートマークなんかが付けられていたりする。これはもう完全に脈アリってやつだな。むふふふ。

現在は七月十九日の夜。そう、今日は七月十九日なのだ。明日から夏休みなのだ！

ひゃっほーい！テンションがヤバいぜ！

中学の頃の夏休みは毎日毎日、塾塾塾塾塾塾塾……。

今日どこ行く？と聞かれたら塾。今日何する？と聞かれたら勉強。なんてつまらない中学生だったんだよ俺。

だが今の俺は、もう以前の俺ではない。

今日どこ行く？と聞かれたら雫のとき。今日何する？と聞かれたら雫と遊ぶ。

これが……リア充……。なんていい響きだ。土御門に一生縁のない言葉ランキング堂々の第一位である。

とまあ、お察しの通り、今の俺は狂気じみたテンションというわけだ。

今もかぐやに踏まれながら気持ち悪い笑みをこぼしている。

ブルブルブル、ブルブルブル……。

携帯電話のバイブ機能が俺のテンションをさらに上げる。雫からメールが来たのだ。

「メール来たみたいだから足どけてくんね？」

無表情でグリグリと俺の腹を踏みにじる女王様かぐやにその美しい御御おみ脚あしをどけてもらおうよう懇願するが。。。

「渡しなさい」

「へ？」

「メールなのでしょう？読んで聞かせてあげるから渡しなさい」

「俺のプライバシーはいずこ？」

「渡しなさい」

「……………」

というわけで携帯電話は没収されました。

俺から携帯電話を取り上げたかぐやは、依然として俺を踏みつけながら送られてきた文章を朗読する。

「十時くらいに学校でいいよね？につこりマーク。うちに誰もいない日はあたしの家で練習しよ、キラキラ。」

「……………」

と、とりあえずハートマークがなくてよかったな…。

「何の練習をするのかしら」

俺を踏みつける足に力が入る。

「痛い痛い痛いっ！痛いですがくやさん！」

「あの子の家に誰もいなかったら何をするのかしら、ねえ、ヒカル」
「痛いって！マジで痛いから！足どけてっ！どけてくださいー！」

それでもかぐやは俺を踏み続ける。

短いスカートを手で押さえながら、さらに足に力を入れる彼女の姿を見ていると本格的に危ない世界に目覚めそうだった。

「何の練習？ねえ、聞かせて？」

「ピアノの練習だよ！」

俺がそう叫ぶと、「あつそ」とそっけない返事をして足をどけてくれた。

ああ、もっと踏んでくれてもよかったのに…。

さて、女王様とただのDMの生活は今後もさらにその格差が広がりつつあるのだが、それは静かに放っておこう。
しかしこいつは何を勘違いしていたんだ。やましいことでも考えていたんじゃないだろうな。

「はあ、本当にあの子のことが好きなのね」

溜息一つ、つまらなそうにかぐやは言った。

「悪いかよ

あっ
」

つい口が滑ってしまった。

言って恥ずかしかつたが、しかしそれがどうしたって話だ。

しょうがないから白状しよう。そうだよ俺は月夜見雫に惚れてるよ。悪い？

しかし、誰がなんと言おうがこれは隠しようのない事実だった。

雫が好き

それは俺の中では当然のことだったんだ。

恋愛経験がないにしても、自分が誰に好意を寄せているかくらいわかる。当たり前だ。

文化祭で一組がコスプレ喫茶をすることに決まった時、まっさきに想像したのはメイド服を着た雫が顔を真っ赤にして恥ずかしがりながら俺を踏みつける光景。

どう考えてもただの変態です。本当にありがとうございます。

いやだからだな、俺が雫を好きなことくらい自覚しているってことを言いたかっただけなんだ。

「だったら」

と、ちよっと気まづくなった空気をかぐやが切った。

「いい物をあげる」

「なんだよ」

「遊園地のチケット。ずいぶん前にスーパーの福引で当たったのだけれど、期限がもうないから明日行ってらっしゃい」

「なん…だと…」

まさかそれはかの有名な遊園地デート!? 恋人にのみ許されたステキ空間のことか!?

「くれっ!」

俺がそう言つと、かぐやは二階に上がりチケットを取つてくると意外にもすんなり渡してくれた。

何か裏がありそうで怖いけど……………。

これで雫と遊園地デートだぜ!!! ヒヤッハー!!!!

「おつと、それなら早く連絡しないと」

「心配ないわ。さっきあなたの携帯電話でメールしておいたからおおそうか。今日は怖いくらいに気が利くじゃないか。」

「ちなみになんて送つたんだ?」

すると、一度馬鹿にするように鼻で笑った後、喉の調子を整えるためか咳払いをしてかぐやはこう言った。

「明日は雫さんと遊園地デートしたいなー。チケットは持っているから返事してよー。ぐへへへ、はあはあ」

「お前殺すぞ」

「なんですって?」

「なんでもありませんっす!」

どうして俺はこいつに勝てないんだろう…。悔しいっ!

はあ…、俺の恋は終わったよ。始まってもないけど。

雫の中の俺のイメージは今頃崩壊してんだろうな。

会った時に「マジキモイから近づかないで」とか言われたらどうしよう。泣くかなあ、泣くだろうなあ…。

なんて俺がへこみまくっていると、かぐやの手にある俺の携帯電話が鳴りだした。どうやら今度は着信らしい。

「あの、電話なんで返してもらってもよろしいですかね…」

鳴り続けるケータイを凝視するかぐやは

「もしもし」

出やがったー！何考えてんだよお前っ！！

相手は誰だ！？雫なんだろう！？代われよ！！

「私よ、月野かぐや ええ、さっきのメールは私が打った

のだから気にしないでいいわ。ええ、そうよ」

なに普通に話してんだよ。

「彼はあなたのことが好きみたいだから明日は行ってあげて。そう、チケットは私からのプレゼント」

「ちょっと待ったあああああああああ！！！なに言ってるの！？ねえ！？かぐやさん！？」

「そういうことだから明日はよろしく」

「なに電話切ってたの！？」

「耳元で大きな声出さないでくれる？」

「うぐぐぐ…」

口では絶対に勝てません、はい。

*

という騒動があった翌日。まったくいい気分がしない夏休み初日。最悪のテンションで待ち合わせの駅に向かう。

雫には一応メールで謝っておいたのだが、たぶん誤解していると
思う。

せめてもの償いとして遅刻だけはしないよう待ち合わせの20分前には着くように出かけたのだが。

「アンタにしては早いじゃない」

「なんでもういんの！？早くね！？」

雫はもう駅にいた。

「この時間なら一つ前の電車に間に合いそうね。ちょっと、なにボ
ーっとしてんの？早く行くわよ」

「お、おう…」

ピアノの練習をする予定だったものを半ば強引に遊園地に行くことに予定変更してしまったのだが、しかしツインテールは怒っている様子はなく…。むしろ上機嫌のようだった。

夏の協奏曲03

県内で、ちよつと有名な大きな遊園地。

夏休みに入ったばかりの高校生や子連れの家族、暇な大学生なんかも押し寄せて、どこを見ても人、人、人。

その巨大な観覧車の中で、サングラスをかけた不審者丸出し人相の怪しい人物が双眼鏡を覗いていた。

「こちら土御門。異常なしや、どうぞ」

そこらのおもちゃ屋さんで買えそうな安っぽいトランシーバーで何者かと会話している。

お次はメリーゴーランド。

白馬に跨るのは身長180センチを超えるイケメン。彼もサングラスをかけて双眼鏡とトランシーバーを手に持っている。

一見いかつそうなこの男、だがしかし小さい子供が群がるメリーゴーランドに乗っている様はなんともシユールだ。

「こちら龍。今のところはいたって怪しい点はありませんね。どうぞ」

さてさてお次はフードコート。

洒落たオープンカフェ的な広場でジュースを飲んでいる女。彼女もまたサングラスをかけている。

明るい髪をくるくる巻いて大きなサングラスをかけている彼女はもはやただのヤンキーのようだ。

「こちら燕ー。こつちも異常ないっぱいー。どうぞー」
うん、ただのヤンキーだなこりゃ。

さて紹介はこれで最後だ。

「きゃあああああああ！早い早い早いっ！！あははははははは！！楽しい！！！！！！」

ジェットコースターを満喫しているポニーテールの彼女は、サングラスも双眼鏡もトランシーバーも所持していない。

あれ？

どうやら単純に遊園地を楽しんでいるだけのよう。

「あー、おもしろかった！」

ジェットコースターから降りるとショルダーバッグからおもちやのトランシーバーを取り出し、

「こちら御石。異常はないかなー、どうぞ。さて、次の絶叫マシンはどこかなあ」

彼女は任務を放棄したらしい。

「こちら燕。衣ちゃん声入ってるんですけど。てゆうかなに普通に遊んでるわけ？どうぞ」

「こちら御石。えへへ、ばれちゃった？」

さて 怪しいこの四人は何のためにここにいるのか

というところ。それは昨日の夜に始まった。

回想開始！

竹本光と月夜見雫が遊園地に行くことになったのは他ならぬ月野かぐやの提案なのだが、提案した当の本人は快く思っていなかった。

というわけで

「もしもし、かぐやよ」

「おおおおおおおおお！月野さんから電話やつ！！」

「うるさいわね。少し黙りなさい」

「……………」

かぐやは土御門の自宅に電話をかけた。

なぜ、彼女が土御門宅の電話番号を知っていたのかは謎だ。

「あなたとはあまり話したくないから用件だけ言っわ。明日ヒカルの監視をしなさい、以上」

「それはどういう意味で…?」

「はあ…。ヒカルは月夜見さんとお出かけするようだから、変なことがないように見張っていてちょうだい。報酬は出すわ。それではさよなら」

ガチャ…。ツーツーツー……………。

電話終了。

しかしこの電話の内容だけではピンとこない土御門は、

「もしもしー?御石さんか?」

御石衣に電話をかけた。

「おつす!どうしたんだい土御門くん!」

「それが斯く斯く然々で…」

「えー!?ヒカルくんが月夜見さんとデート!?そりゃ大変だよ!監視しないと!」

「朝七時くらいから爺さんの家を監視や」

「合点承知っ!」

そして御石衣は子安燕に連絡

「もしもし燕ちゃん?衣だよ」

「あ、衣ちゃん。こんな時間にどうしたの?」

「それが斯く斯く然々でね…」

「はあ!?ヒカルくんが!?あの小さいのとデート!?なにそれムカつく。マジ監視しよ」

「おっけー!朝の七時くらいだけど大丈夫かい?」

「もち」

はいはい、それからそれから…。

今度は子安燕が玉枝龍に連絡

「ちよつと龍！」

「おやおや、子安さんから電話とは珍しいですね。どうかしましたか？」

「どうかした程度じゃないっての。実は斯く斯く然々で……」

「なるほど……。それは一大事ですね」

「わかつたら朝七時だから！」

「いいでしょう。明日は治験もありませんし」

はい回想終了！

というわけで夏休み初日の朝っぱらから竹本家を監視していた四人。

案の定どこかに出かけた竹本光の跡を付けてみると……遊園地に着いたというわけだ。

ちなみにおもちゃのトランシーバーは土御門の私物だったりする。犯罪の匂いがぶんぶんするぜ。

が、しかあし！

まさか誰かに監視されているなんてこれっぽっちも思わない、思うはずもない俺はというところ。

「次はあっちに行こうぜー！」

「ちよつと！アンタはしゃぎすぎー！」

今にもこの場で小躍りし始めるくらい浮かれていた。

だって仕方ないじゃん。雫が可愛すぎるんだもん。

なんと言っても脚！もうやべーよお。

細く引き締まっていて、かといって細すぎない。アンタ最高だよ。

「アンタさつきからあたしのスカートばかり見てるよね」

「なっ！俺はべつに……」

俺が張り切りすぎたので少し疲れてしまった雫のためにベンチで缶ジュースを飲みながら休憩していると、ふいに言いがかりをつけられた。

「これちよつと短すぎかなあ。やめとけばよかった」

スカートの裾を引つ張るしぐさを見せて、どうしてだか肩を落とすしてしょんぼりした。

「どうした？」

「だってヒカル、脚ばっかり見るんだもん」

「え、嫌だった？」

俺は何を言っているんだろうね。完全に変態だな、こりゃ。

しかし雫は、恥ずかしそうに、気まずそうに、こう言った。

「うーん……。ていうかね、ちゃんと“あたしを”見て欲しいじゃない？」

か……。可愛いすぎるよおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおお！！！！

うひょひょおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおお！！！！

……。さすがマイエンジェル……。セリフ一つにしても並みの破壊力じゃないぜ……。少しばかり精神が乱れてしまったよ。

気付けば手に持っていたスチール缶を握り潰していた。恐ろしい力だ……。

「ちよつとお、ジュースこぼれてるじゃない。ほらっ、ハンカチ」

「おお、悪い……」

肩にかけていた小さな鞆から可愛らしいハンカチを取り出して渡してくれた。いい匂いがした。

変態？うん、知ってる。

*

こちらはチビツ子たちが集まるゴーカート。その中で一際目立つ背の高いイケメンがいた。

男は片手で優雅にゴーカートを操り、サングラス越しに双眼鏡でどこかを覗いている。

かなりシユールな光景だった。というか、玉枝龍だった。

「おや？彼の様子がおかしいですね」

龍は横に置いていたバッグから安っぽいトランシーバーを取り出す。

「こちら龍。どうやら二人に動きがあったようです、どうぞ」

「こちら燕。小さいのがヒカルくんに何か渡したっぽい。プレゼントかも、どうぞ」

「こ、こちら土御門。お願い助けてええええええ！」

「……」

「……」

御石は応答なし。おそらくはどこかで遊んでいるのだろう。

謎の奇声を残した土御門のことは放っておいて、龍と燕は一度合流することにした。

夏の協奏曲04

一方その頃、土御門はというと

「お兄ちゃん、お兄ちゃんっ！」

「それカツコイイね！僕にも貸してよ！」

「私にも貸してー！」

おもちゃのトランシーバーに興味津々のチビツ子の群れ。

「うわああああああ！チビツ子にモテモテでもまったく嬉しくないわああああ！」

チビツ子たちに捕まっていた。

「ね、ねえボクたち、お母さんはどこなんや？」

シャツやらズボンやらを引っ張る子供。

確かに近くには親御さんが見当たらなかった。

「お母さんは向こうの椅子に座ってるよ！」

男の子が指さした先。そこには見慣れた顔があった。

この子供たちのママさんと思われる女性三人と、土御門が監視していた二人。

「あんのラッキーじいがああああああ！！！！子持ちにまで手を出すとはなんちゅうことやああああ！！！！！」

土御門は叫ぶ。

なぜなら、綺麗なママさんたちと竹本光が仲良く談笑していたからだ。

当然ながら月夜見雫はムスツとしている。

「こちら土御門。見境ないラッキー爺さんは殲滅せよ！」

*

「おっと、もうこんな時間か」

経営コンサルタントの社長さんである雫の母さんの、その社員さんだという三人の女性と話に花を咲かせていること数十分。

腕時計を見ると午後の三時を過ぎていた。

電車での移動時間は一時間ほど、駅に着くまでバスで三十分つとこなので、そろそろ帰りの時刻を調べてもいい頃だ。六時には帰りたいんでね。

それはどうしてかというところ……、単純にかぐやが怖いからだ。晩飯の時間までに帰らないとお仕置きされそう。考えただけでも鳥肌が…。

俺としては少しでも長く雫と一緒にいたいんだけど。家に門限があるやつならわかるよな、この気持ち。

まだ遊んでいたいけど門限を破ると怒られる…っていうあの感じ。まあ、それと似たようなもんだよ。

「じゃあ俺たちもう行きますね。お子さんも心配ですし」

しかしなあ、雫とこの三人ってどういう感じなんだろうな。雫はこの三人の雇い主の娘だろ？立場的にどっちが上なんだ？

と、俺がどうでもいいことを考えていると、

「そう？じゃあまたね、雫ちゃん。お母さんによるしく」

そう言っって三人はにっこり笑い、雫に手を振りながら待たせている子供のところに戻って行った。

雫も恥ずかしそうに手を振り返している。それがまた可愛くて可愛くて……。

「ちとと」

仕切り直すために勢いよく立ち上がる。

「疲れは取れたか？」

すると雫は怒ったように頬を膨らませた。

「ふんっ。疲れなんてとっくに取れたわよ。それよりアンタ

」

「なんだよ」

「……なんでもない」

「はあ？」

立ち上がった雫は長いツインテールと短いスカートを翻す。

「はい次！観覧車に乗るわよっ！」

*

「どうやら移動するみたいです」

「燕たちも行くよ」

ベンチに座っていた光と雫を、隠れて見張っていた龍と燕は歩き出す二人を追う。

コソコソと尾行するサングラスの二人。

背が高いサングラスをかけた二人の男女は、周りの人から見れば完全に不審者だったと思う。

まあまあそれは置いといて。

無事通報されずに済んだ二人が辿り着いた先は……。

「どうやら二人は観覧車に乗るようです。それもこれは……三十分待ちみたいですね」

行列を作る観覧車だった。

「げっ、これ待つの？かなりだるくない？」

「これは危険な展開ですよ」

「どういう意味？」

手には双眼鏡とトランシーバー、さらにサングラス装備の不審者

二人もこの列の最後尾に並び目標を監視する。

そして龍は神妙な顔つきで言った。

「観覧車は長蛇の列。まだかまだかとじれたい気持ちで待ったのち、二人を待っているのは誰にも邪魔されない密室空間に最高の景色です。やっと乗れたと気を緩めるともう大変。この上ないムードの二人は口が」

「口が!？」

「……………口が滑ってしまうかもしれません」

「つ、つまり告白してわけね？」

「ええ。というか今、子安さん何か勘違いしてましたよね」

「し、してねーし……………」

「そうですね」

にっこりと爽やかに笑う龍を、なんだその顔は、と言いたげな目で燕が睨む。

「どうです、僕たちも乗ってみませんか」

「ふんっ、誰がアンタなんかと乗るかっつての。遠慮！」

「はあ、そうですね」

ぷりぷり怒る燕が列を外れたので、龍もその後を追って列から外れた。

二人は植木の陰に隠れると、そこから双眼鏡で光と雫の二人を監視し続けた。

夏の協奏曲05

観覧車に乗るために待つこと十五分。

長い、長すぎる、俺たちの順番はまだなのか!?

意味がわからないほど巨大なこの観覧車、一周するのにかかる時間は約十五分。半径五十メートルほどの巨大な鉄の塊だ。

だが少しずつ列は前に進んでいく。本当に少しずつだけ。

おっと、そんなことよりマイエンジェル雫たんが話しかけてきたぞ。ほんと可愛いなオイ。

「ねえヒカル?」

「はいはい何でしょう!」

「……………」

キモすぎる俺のテンションに一步後退する雫。

「えっとね、明日なんだけど……………。うち誰もいないから……………来る?」

上目使いで顔を真っ赤にして言う雫。

夏休みに入ったので雫は富商の寮から実家に帰っているのだ。

というか

雫ENDフラグ来たんじゃない?

「べべべべべべべつに行ってもいいけど!」

落ち着けっ!落ち着くんた俺っ!!!ここで取り乱してはカッコ悪いぞ!!!

「実はね、今日も誰もいなかったんだけど…。あたしのお父さん刑事部の部長じゃない?でね、その……………言いつらいけど……………昨日ちょっと事件があって、缶詰状態ってわけ。だから今週はうちにいないかも……………」

「そ、そうなんだ……………」

刑事さんの仕事なわけだから、おそらく人が死んでいるのだろう。雫も言いづらそうな顔をしていた。

だがしかし、まさか雫の父親が刑事部長だったとはな。つまり県警の親玉ってことか……。怖そうだ……。

「あたし夏休みも生徒会で忙しいじゃない？だからね……。その……。アンタがよければだけど、生徒会がない日は一緒に……。遊ばない？」

そこはピアノの練習って言わないんだな。おっけー、理解した。お前は可愛い。

そして、俺の返事は決まっていた。

「もちろんさ。俺もお前と一緒にいたいからな」

我ながらキモイと思った。

でも、それでも……雫は嬉しそうに笑ってくれた。

そうか、そうなんだ。

再確認。わかつちやいたが再確認。

俺は、チビでツインテールで傍若無人のこいつに惚れているんだ。

「あのさっ、俺……！」

そして言いかけた言葉を飲み込んだ。

今はまだその時じゃない。

大切なのはタイミング。どんな事でもそうだろう？

勉強にしてもそう。力を入れるタイミング、力を抜くタイミング。スポーツ、勝負事でも同じだ。“ここが大事”っていう場面があるはず。

今の俺もそう。

知らないやつがわんさかいやがるこんな場所なんかじゃ駄目なんだ。もつといい機会、もつといいシチュエーションがあるはずだ。そう

例えば二人きりの観覧車の中かな。

でもたぶん緊張してしまうと思う。

超密室。

二人きり。

可愛いツインテール。

短いスカートとソックスの間から覗かせる白い太もも。

赤く染まつた頬。

細い脚。

可愛い笑顔。

脚。

雫可愛い。

脚。

雫かわいいよ雫。

脚……。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！……」
妄想していたら発狂してしまった。

「ちよつと、どうしたの！？周りの人びっくりしてるじゃない……」
「うほうほ……」

「どの言葉……？」

狂喜乱舞する俺を、雫は蔑むような目で見ていた。

観覧車に乗る順番を待つ人たちも引きまくっている。

それから「この馬鹿がお騒がせしてすみません」と、周りの人に雫が頭を下げてくれたので、なんとも奇怪なこの事件は收拾がついた。

妄想って怖いのだ……。自分が自分じゃなくなりそうだったよ。

さらに待つこと十分。

ついに順番がやってきた。

恋人たちのステキ空間、もとい小さな鉄の箱に入る俺たち。いざ入ってみると、思っていたよりも狭くてかなり緊張した。なんとなく成り行きで向かい合って座る形になる。

「……………」

「……………」

こづなることくらいわかってはいたが、この狭い空間に二人きりとなると思うように口が動かない。

一周するのに十五分。

あと十五分で決着をつけるんだ…。

お互いに、一言目が出ないまま、二人を乗せる小さな鉄の箱は半周を終える。

窓の外を覗くと、地上にいる人が、人と認識できないほど小さく見える。それくらい高い位置に俺たちはいた。

長かった沈黙に、先に耐えかねなくなったのは雫の方だった。

「見て！人があんなに小さく見える！」

どう見ても空回りな元気だった。若干声が裏返っていたし。

おそらくこいつも俺と同じように緊張しているんだな。

「今日は楽しかったか？」

当たり障りない会話しか出てこない自分に腹が立った。

「なにそれー。演奏会に行った時も同じようなこと言ってたよね。

アンタの決め台詞？」

「そうじゃねーよ。帰りの時間を考えると観覧車が最後かなって思
って」

雫は「ふーん」と鼻を鳴らすと続けて言った。

「でもまあ、楽しかったよ」

「そりゃよかった。それで
生睡を飲み、意を決しつて、さあ言つぞ！」

「終了です。気をつけて降りてくださいねー」

「What!?!」

むなしく響く係員の声。

時間が経つのでこんな早かったっけ!?

「ぐぬぬぬ……」

「ほら、唸ってないでさっさと降りるわよ」

「はぁ……」

文字通り本当に肩が落ちるくらい、それくらいの勢いで肩を落とした。そのまま地面に倒れこみたい気分だった。

雫は何食わぬ顔で歩き始めるし……。

なんだよもつっ!! お前だって俺と同じ気持ちでいたんじゃないのか!?

*

結局

なんの進展もないまま地元に戻っ

てきちまった。馬鹿か俺は……。帰りもずっと当たり前障りのない会話ばかりしていたし。

そうそう、気になったことが一つあった。

帰りのバスと電車の中で見たサングラスをかけた怪しい四人組だ。

そいつら俺と雫をチラチラ見ていたし……。まあ、そのうちの一人、ポニーテールの女の人は土産物の袋を枕にして寝ていたけど。

あいつらは一体何者だったんだろう。あんな格好で遊園地に行ったのかな。

でもまあ、雫との笑い話のネタにさせてもらったから良しとする

か。

今日はヘタれてしまったけど、夏休みはまだ始まったばかりだ。それに明日は雫の家に遊びに行くことになっているんだ。チャンスはいくらだってあるはず！

駅から歩き、俺の家への分かれ道までやってきた。

「じゃあ、明日」

別れを惜しむように雫が言った。俺だってそうさ。

「俺、お前んち知らないんだけど」

「あ、そっか。じゃあ学校に来て。近くだから」

学校の近くのなかに寮生なのか、面白いやつだな。

「帰ったらメールするから」

そう言って雫は俺に背を向けた。

ただ普通のことなのに、それがちよっぴり寂しかったり…。

でも、これが恋ってやつなんだな。

なんて

俺らしくないことを思いながら家に帰った。

夏の協奏曲06

その後、家ではやっぱりというか、かぐやに苛められた。いや、イジメというか辱められた。

雫との進展がなかったことに肩を落としている俺に向かって「告白もできなかったの？本当に情けない男ね」とか、「あの子のどこが好きなの？ねえ、言ってみなさいよ」とか……………。泣きそうだった。

ムカついて俺が口答えすると、床に押し倒して腹這いになった俺の尻を踏んできた。

俺を踏んでいる間も、「なに？私に踏まれて喜んでいるの？」とか、「最低だわ、気持ち悪い。いったい何を考えているのかしら」とか……………。俺はこっそり泣いていた。嬉し泣きじゃないぞ？どうせ踏まれるなら雫がよかつたって意味だ。いやむしろ雫に踏んでほしい、雫になら踏まれたい。踏みながら罵倒されたい。

おっほん…………。とまあ、深刻な問題になりつつある俺のDM体質に、さらに拍車が掛かったりなんかしちゃった次の日。

メールにて、昼からピアノの練習をしようという話になり、現在待ち合わせ場所である富士見商業高校の校門で突っ立っていた俺なのだが…。

部活動をしている生徒以外はいないだろうと思っていたら、そこで同じクラスの女子共にはったり遭遇してしまった。

お忘れかもしれないが、我が一組は文化祭でコスプレ喫茶をすることになっている。企画、土御門。プロデューサー、土御門。その他もろもろ、土御門。ああ、もうめんどくさい。つまり土御門が勝

手にやりたいただけってわけ。

クラス展示がコスプレ喫茶に決まった当時は罵詈雑言を垂れ流しにしていたクラスの女子だが、いざ決まってしまうと案外ノリノリで、今日は裁縫が好きな者同士が集まって衣装作りに来たんだそう
だ。

まあ、ここまではいいのだが、なぜ俺がここにいるのかという話になり「喫と待ち合わせ」と、つい口を滑らせてしまったことが、この後起こる大惨事を招いてしまったといっても過言ではない。

口を滑らせるの得意だな、俺。

何とかは災いのもとして言うし、これからは少し気をつけないと
いけないな。

十代後半、他人の恋愛事情に首を突っ込みたがるお年頃。

俺の失言の上げ足を取るかのように、目をキラキラ輝かせて質問
攻めをしてくる女子。

「やっぱり竹本くんは喫ちゃんのこと好きなんだよね!？」

「付き合ってるの? ねえ、付き合ってるの!？」

「今日は何!? デート?」

一度に言われても答えらんねーよ!

ガミガミうるさい女子の群れ。その中の一人の一言に、不覚にも
過敏に反応してしまう。

「竹本くんは喫ちゃんにどんなコスプレしてほしい?」

「ミニスカにロングブーツでっ! あっ、でもブーツで踏まれたら痛
いか。うーん、でもメイド服も捨てがたいし…。悩みどころだな」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

なぜだか固まる女子たち。

あれ？おかしいなと言ったか俺？

「竹本くんって…………、ちよっと怖いよね…………」

「うん…。噂じゃ毎日月野さんに苛められてるって話だし…………」

……………今何と？

俺が、かぐやに、苛められている、噂？

「はあ！？っていうか、なんで俺があいつと住んでること知ってるの！？」

「あ、やっぱり一緒に住んでるって噂本当だったんだ」

Oh。

またしても口を滑らせてしまいました。

クスクス笑う女子たち…………。

「噂、噂って…………、いったい俺にはどれだけ噂があるんだよ」

すると、「たくさんあるよー」と一人の女子が言う。

「今言った、月野さんと一緒に住んでるっていうのと、月野さんに苛められているっていう二つでしょー。あとねー、雫ちゃんと付き合ってるっていう噂は濃厚かな。他にも土御門くとデキてるとか、三組の玉枝くとデキてるとか…………」

「ちよっとストロップ！！！」

「え？どうしたの？私的には玉枝くんが攻めで竹本くんが受けなんだけどー」

「ねえ、なに言ってるの！？」

「え？じゃあ竹本くんが攻めなの？」

「……………あなた馬鹿なの？」

なんだよこいつら…………。

腐ってるよ。頭の中腐ってるよ！もう変な虫が湧くくらい腐ってるよっ！！

同じクラスの人間をどんな目でみているんですかねキミたち。キミたちのせいで何か大事な物を失った気がしたよ。べつに何も失ってないんだけどね！

意味不明な会話でキヤーキヤー盛り上がる女子たち。そんな時、やっと待ち人が現れた。

「遅れてごめーん！」

そう叫びながら若干駆け足気味に雫がこっちに向かってきた。

「おーい、雫ちゃーん！」

と、女子たちが手を振りながら叫ぶ。

雫は俺のもとに到着すると、

「アンタなにしてんの？」

開口一番がそれっすか。

「ごめんね雫ちゃん。ちょっと竹本くん借りてたよ」

俺をものみたいに言うな。

「それとね、雫ちゃんのコスプレはミニスカメイド服に決定しました！」

「えっ、どうして!?!」

「竹本くんのご希望です！」

「なんかねー、雫ちゃんにメイド服着てロングブーツで踏んでほしいらしいよ？」

うわっ、ちよっ、変な言い方しないでっ！

「ほほう、ずいぶんとマニアックなご趣味じゃない。アンタあたしをそんな目で見てたわけ？」

「いや、その…」

実際そうだから弁解できねー！

なんか雫も眉間にしわ寄せて俺を睨んでるし…。

「じゃあ、あたしはこいつと話があるから」

「いててて、痛いですっ！」
耳を引っ張られて雲にこの場から連れ去られた。

その途中で「お似合いだねー」とか聞こえてきたけど、この状況で言われてもちっとも嬉しくないやい！

夏の協奏曲07（前書き）

11/07、文章評価、ストーリー評価してくださった方ありがとうございます！

ストーリー評価5ptは本当に嬉しかったです!!!

夏の協奏曲07

痛い痛いと呼んでも耳を引っ張るのをやめない雫に連れられて、
やって来たのが月夜見邸。

その間道端で井戸端会議中の老婦人たちにクスクス笑われたのだが、それに耐えた俺を褒めて欲しいね。

道中雫はまったく喋らないし…。

そして、目の前にある西洋のお城のような馬鹿でかいこの家が……雫の家！？

周りがあるいたって普通の民家との違いに言葉を失った。ここだけ日本じゃないというかなんというか…。

改めてこいつが大金持ちのお嬢様であることを認識させられる。

身長170センチの俺よりも高い鉄格子が月夜見邸の門を守っており、そのインターホンに向かって「あたし」と雫が言うと、ギギ…という音と共に鉄格子が自動で開いた。

まるで別世界。

月夜見邸の敷地内に入ると、緑の芝生やら噴水やらベンチやらが目に入った。

家の庭というよりも金のかかったただの公園だ　　なん

て感想を口にする暇もなく、再び雫に耳を掴まれて連行された。

この間も雫はまったく話さない。

家の門から玄関までの距離が意味不明だった。たぶん200メートルはあったんじゃないかな。

そして玄関もまた意味不明で、ライオンみたいなやつが二つ付いている。まさか金でできている、なんてことないよな、これ…

…。

ボタン！と勢いよく雫が玄関の扉を開き、自室だろう二階の部屋に連れて行かれた。そしてその部屋がまた広いこと広いこと……。俺の部屋の三倍はある、と思う。

とりあえず靴は玄関で脱いだ。よかった、ここは日本だった。

ここにきてようやく雫が俺の耳を離す。マジ痛かったんだからね！？

そして雫は「はぁ」と大きく息を吐くと、女の子らしいピンク色が目立つ大きなベッドにダイブした。

「もう…、みんなの前で恥ずかしいこと言わないでよね…。アンタと…：そういう関係だっと思って思われたらどうすんのよ…。ほんと恥ずかしかつたんだから…：…」

これまた大きな枕を抱きしめながら、ベッドにうつ伏せになった雫はそのままの体勢で、頬を赤く染めて可愛らしく俺を睨んだ。

というか、お咎めなし？てっきり怒られるとばかり思っていたんだけど…。

雫はどうやらクラスの女子に俺と仲良くしていることを知られなくなっただけらしい。

「ていうかさ　　アンタ、あたしに踏まれたいわけ？そういう性癖の人だったの？」

恥ずかしそうに、もじもじしながら言う雫。

「誤解ですっ！！」

「ほんとに？」

「いやだから…：…」

「ふーん」

ポチッ。

どうやら雫さんのSっ気にスイッチが入ったようです。

「アンタ、あたしに踏まれる妄想してたんだ。それもメイド服に口
ングブーッで」

「……………」

「妄想、楽しかった？」

「えーっと、それは……………」

必死に目を泳がせる俺を見て雫は「くすっ」と笑い。

「なんて冗談よ、ヒカルって意外にからかい甲斐があるね」

「………… 馬鹿にしゃがって」

ベッドでうつ伏せ状態のこいつの頭を両拳でグリグリしてやった。

「あはははは、痛い、痛いってー」

「許さんコノヤロー」

「もう、痛いってばー」

キャッキャウフフ状態の俺たちも、しばらくするとお互いに少し
恥ずかしくなったのか距離を取ってしまう。

突発的とはいえ、かつてないスキンシップの後なので俺が何を話
しているのかわからずにいると。

「そうそう、とりあえずこれ聞いてほしかったんだ」

雫がデスクトップ型のパソコンに電源を入れる。

「なに突っ立ってんの。そこ座ってよ」

そう言って、さっきまで自分がうつ伏せになっていたベッドを指
さす。

俺は雫の指示通りベッドに腰掛けるのだが…。

「うわぁ、雫の匂いでいっぱいだぁ」

「ん？なんか言った？」

パソコンを操作しながら聞いてくる。幸いこっちに目は向けてい

ないようだ。

「何も言っていないぞ」

見られていないことをいいことに、少しずつ雲の枕に手を伸ばす。目の前に宝物があれば誰だって手を伸ばすだろ？それと一緒にさ。

ついさっきまで雲が抱きしめていた代物だ。俺の中では徳川の埋蔵金並みの価値がある。男はみんな宝を求めるトレジャーハンターなのだ。

気付かれないよう慎重に、慎重に、慎重に……今だっ……！

「何してんの？」

「何もしてないです」

どうしてこうタイミング良く振り返るんだよ。もうちょっとでお宝ゲットだったのに！

俺は、何も取っていませんよ、という感じに両手を上に上げる。銃を突きつけられて、抵抗する気はありません、って感じかな。どっちでもいいや。

「あつたあつた。これ聞いて」

マウスを何度かクリックした雲は、「よいしょつと」と言っって俺の隣に腰掛けてきた。

その瞬間ふわっと広がる雲の匂い。

鼻の奥がむず痒くなるのを堪えていると、どこかで聞いたことのある音楽が流れ出した。

「シヨパンのノクターン。難しいけどこれをピアノで弾こうと思うの。あともう一つ、ちょっと簡単なハイドンのリトルセレナーデ」

「日本語で話してくれ」

「……怒るよ？」

「ごめんなさい」

今流れているこの曲は、たぶんテレビのコマーシャルが何かで聞いたのかな。音楽にまったく興味のない俺でも知っている曲だった。曲は結構長く、数分の間何も話さずに黙って聞いていた。当たり前だけど今隣には雫が座っているわけで、俺は集中して曲を聞いていることができなかった。

緊張なのか興奮なのか、俺がそわそわしていると。

「えいつ」

いたずらっ子のような声でそう言いながら、思いつきり俺をベッドから押し倒しやがった。

「え！？急になに！？」

ふふーん、と超笑顔の雫はカーペットの上で呆然としている俺の、体を支えるためについた手を、あろうことが踏んできた。

踏むことに抵抗があるのか、力いっぱいとはいかず優しく手の甲を踏んでくる。

「どっつ？」

「　と言われましても」

「えー。じゃあ……」

可愛くそう言うつと、今度はゆっくりとその足を俺の腹の上に……。「生足で！？」

ありがとっございますっ！……まあ、これはさすがに心の声だけど。

ゾクゾク……

俺は身震いした。

なんだよこの状況……最高じゃん。

ソックスを履いていない雫の、足の指の感触が……指の感触があ
！！

「ヒカルってやっぱりこうなのが好きなの？」

「好き…じゃないよ？」

当然嘘である。

踏まれるの好きですよ？ええ、大好きですともっ！

「えいえいつ」

可愛い声でそう言いながら優しく力を入れてくる。

「うふう…」

堪らず変な声を漏らしてしまった。

俺はここまで変態だったのか。

想い人に踏まれながら身悶える俺。その俺を見下ろす雫は、恍惚の表情を浮かべてこう言った。

「やだ、なにこれ…。ちよつと快感……………」

駄目です！こっちの世界に来てはいけません！！

あなたまで女王様の素質に目覚めてはなりません！！！！

このままでは本当にヤバイ。

なんかもう、危ない橋を渡るどころか軽快なステップで飛び越してしまう勢いだ。

「そろそろ足どけてくんね？」

本心ではないが、そう言うしかなかった。

この体勢が続くと自分の好きなやつに最低の姿を晒すことになりそうだったから。

「ヒカルがドMだって噂は違ってたんだね。でもちよつと安心した」

お前はDSに目覚めかけていたくせに何言いやがる、と思いつつ、そんな噂まであったんだ、と頬を引き攣らせた。

そして雫が俺の腹の上から足をどけようとした、まさにその時。

「お姉……………ちゃん？」

ガチャリとこの部屋のドアノブが下がり、現れたのは雫そっくりのロリ…じゃなかった、小さくて可愛い女の子。

この家に入る際、雫がインターホンで中にいる人に連絡したんだ。俺たちの他に人がいても不思議じゃない。

今現れた女の子の目に映るのは、自分の姉が知らない男の腹を踏みつけているという光景。

俺みたいな変態がキミのような可愛い女の子を怖がらせてごめんね？

ガタガタと肩を震わせる女の子はスカートのポケットから携帯電話を取り出し。

「お母さん？お姉ちゃんがショパンのノクターン第二番を聴きながら笑顔で知らない男の人を踏みつけてる」

この場の状況を事細かに説明してくれました。

女の子が電話を切るとほぼ同時に、キキーンと暴走車がブレーキを踏む音が、公園のような月夜見邸の庭から聞こえる。たぶん、いや絶対雫のお母様だろう。

雫と初めて会った日もそうだったけど、ここの家の人は瞬間移動が使えるのか！？

なんて馬鹿なことを考えているうちに、

「雫っ！！！！」

お母様のご登場。

妹の乱入で固まってしまった俺と雫は相も変わらずそのままの体

勢。つまり依然として雫が俺を踏んでいる、かのように見える体勢だ。

雫の身長を少し高くして髪を短めにしただけのお母様。

そもそも雫は年齢から考えると童顔だし妹さんはマジでロリだし、ここの家系はみんな童顔なのだろう。

見るからに高そうな服を着たお母様は俺と雫を眺めながら、妹さんを自らの背中に隠した。

「雫ちよつとおいで。霞ちゃんはお部屋に戻っていなさい」

ほほう、妹さんは霞ちゃんかすみというのか。なんて悠長なことを考えている場合ではない。

啞然とする俺はこの広い部屋に一人残され、月夜見家のご家族はトントンと階段を下りていた。

夏の協奏曲 08

「くんかくんか」

うん、これは香水の匂いだ。

「くんかくんか」

おや、これはシャンプーの匂いかな？香水とはまた別のいい匂いがする。

雫の部屋に置き去りにされた俺は、とりあえず布団やら枕の匂いを楽しんでいた。

変態の俺がこれ見よがしに鼻を押し付けている、なんて勘違いしているだろ。だがそれは違うね。

ソムリエがワインの香りを上品に楽しむように、英国紳士が仕事の合間に煙草を一服するように、はたまたお茶の深みに和の心を感じるように
雫の匂いに埋もれ、数分前に感じた踏まれた時の快感を思い出しながら歓天喜地の至境に達し今にも狂喜乱舞…って後半ただの変態じゃねーか。

しかし 暇だ。

一通り任務を終えた俺は、特にすることがなくなったのでベッドに腰掛けて、ボーっと部屋を見渡すしかなかった。

一人部屋にしては広すぎるこの部屋には、大きな本棚と大きなベッド、他にも大きな机やパソコンに物置に…。さらに大きな窓の外にはベランダがあり可愛い花が植えてある。

感想は ああ、こいつとは住む世界が違っんだな、と
いうこと。

「じー」

扉の方から何かを見る時の擬音が聞こえる。

よく見ると若干扉は開いていて、そこから小さな女の子が覗いていた。

「じー」

……聞こえる。

「じー」

……。

「霞ちゃん、ばれてるよ」
かすみ

辛抱できずにそう言つと、「よく気付いたね」と扉が開かれた。

いや気付くもなにも……。じー、なんて言いながら覗いていたら、
ねえ…。

音が鳴らないよう慎重に扉を閉める霞ちゃん。一階に降りて行つた雫とお母様に気付かれなためだろうか。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんのコレ？」

部屋に入った霞ちゃんは、ピンと小指を立ててみせた。おっさんかよ。

「ずいぶん小さいみたいだけど霞ちゃん何年生？」

とりあえず問いには答えないでおこう。

「初等部一年生」

「へえー、六歳なんだ」

「七歳」

「そ、そう…」

七歳だと言う霞ちゃん。彼女も雫と同じ血が流れているようで、言葉に棘があるというかなんというか。

DMの俺には堪らない、キツイ言い方だった。言っておくが俺はロリコンではない。

「よいしょっ」

雫がそうだったように、霞ちゃんも同じようにそう言いながら俺

の隣に腰掛けてきた。

背が小さいのでちょっとジャンプする形でベッドに乗る。

「ねえ、お兄ちゃんはお姉ちゃんと結婚するの？」

「ぶっ！！！！」

「きつたなーい」

吹き出してしまったじゃないか！急になんだよこのマセガキ！

「し、雫は？」

「お姉ちゃんはお母さんと車でどこか行っちゃったよ？」

「あ、そう……」

今頃お城に不審者を侵入させた罰を受けているのかな……。

「なんかねー、お買い物に行つたみたい。そんなことよりっ！霞、お兄ちゃんが欲しかったの！だからお姉ちゃんと結婚して霞のお兄ちゃんになつてよっ！」

お兄ちゃんになつてよー、と駄々をこねながら俺の服を引っ張ってくる。

急な展開すぎてもう何が何だか……。

*

それから数分。

「次はねー。お馬さんごっつこー！」

「よーし、お兄ちゃんがお馬さんになつてやるうー！」

「わーい！」

雫の部屋で、四つん這いになった俺は霞ちゃんを背中に乗せてよたよたと高級そうなカーペットの上を這いつくばっていた。

「もっと早くー」

「お、こうか」

「きゃー」

俺の背中の上でキヤツキヤと騒ぐ霞ちゃん。

こんなことで喜ぶなんてやっぱ子供だな。

でも可愛いから許してやるか。さすが雫の妹だ。

「ふう。ちよつと休憩」

疲れたので一旦動くのを止めると。

「誰が休んでいいなんて言ったよこの豚」

「……………はい？」

「ほらお兄ちゃんっ！休憩おしまいっ！」

今のは幻聴だよな…。

再び俺が動き出すと、

「わーい！お兄ちゃん大好きっ！」

そう言っつて背中に抱きついてきた。

「次はおセロ！霞お部屋から取ってくるね！」

ぴょんつと背中から飛び降りると元気に走って出て行った。

なんかもう可愛すぎだった。

オセロのボードを持ってきた霞ちゃんはベッドに飛び乗り、「早く早くっ！」と急かすので俺もベッドに移動する。

雫のベッドはかなり大きいので、そこに二人で寝ころぶ形になつてオセロがスタートする。

気付いたらロリコンだった（妄言）。

単純なルールのボードゲームとはいえ、七歳の女の子と富商に編入できるレベルの俺では勝敗は明らかだった。

大人げないと思うが、終わってみると俺の圧勝。

「お兄ちゃんのいじわる……………」

大敗した霞ちゃんは泣きそうな目で俺を睨んでいた。

だがロリコンに目覚めた俺、神聖な幼女を泣かせるなんて真似は

絶対にしない。

「今のはお兄ちゃんの運がよかったんだよ。今度は霞ちゃんが勝つかもしれないよ?」

「ほんと!?」

「うん、ほんとさ」

凜にも見せたことのないスマイルを送ると霞ちゃんはにっこり笑ってくれた。

マジ天使。

で、第二戦目は。

「わーい!霞の勝ちだー!」

「ね?今度は霞ちゃんの勝ちだっただろ?」

「うん。でも、お兄ちゃんが手加減したんじゃないの?」

ふふふ、その返しも想定内さ。

「今のは悔しかったなー。じゃあ次勝った方が本当に強いってことにしようか」

「うん!」

笑顔の霞ちゃん。

そして第三戦目でギリギリのラインを保ちつつ霞ちゃんに勝ちを譲ることで幼女の最高の笑顔を得ることができるのだ。

どうだ参ったか。

ふふふふふ、ははははははははは!

そして。

「やったー!お兄ちゃんに勝ったー!」

「くそー、参ったなー。霞ちゃんには勝てないよ」

「ほんとに!?!」

「うん」

「わーい!お兄ちゃん大好きっ!」

「じゃあお兄ちゃんと結婚するかい?」

夏の協奏曲09

雫が携帯電話でこの場の状況を伝えると、やはりというか、また庭の方で車が止まる音がした。

瞬間移動はお母様が本家なのか。

「けっ、あの雌豚が。霞とお兄ちゃんの邪魔しやがって」

ベッドで密着する霞ちゃんが雫に聞こえないようにぼそつと言ったが幻聴のはずだ。そう信じたい。幼女に汚い言葉は似合わないよ。

その後、やって来たお母様は俺を無視して霞ちゃんの手を引いてすぐに出て行った。

部屋から出て行く途中、

「バイバイお兄ちゃん。お姉ちゃんと仲良くしてね」
と、につこり笑ってくれた。マジで可愛かった。

さて

部屋に残るのは俺と雫。

当然のように睨まれて堪らず俺は床に正座した。

「アンタ、霞と何してたの」

「遊んでただけっす！」

俺を見下す雫は溜息をついて、パチンと指を鳴らした。

するとどうだ。この家の執事さんと思われるスーツを着た若い男性が無から出現したではないか。

マジシャン？ねえ、マジシャンなの！？

「これ、片付けておいて」

雫はそう言い、執事さんは「はい、お嬢様」と、床に落ちたケーキと紅茶を片付けてまた消えた。

金持ちってなんか色々すげー。

執事さんが文字通り消失すると、雫は怒った足取りで俺に近づいた。

「このロリコン男」

「ぐっ……」

反論できなかった。

正座する俺をほぼ真上から見下ろす雫は、力いっぱい

ゴンッ……！！

「かかと落としー！？」

を、俺の脳天に浴びせ、崩れる俺を何度も何度も踏みつけてきた。

「ばかっ！変態っ！ロリコンっ！」

「がはっ！ぎひっ！ぐぶっ！」

「なんで霞なんかとあんな羨ま……じゃまかった、破廉恥なことっ！死ねっ！」

「げへっ！ごほっ！」

ついに雫は俺の腹を思いつき蹴り始めた。何度も何度も……。

「痛いっ！でもっ！最高っ！」

「キモッ！死ねっ！」

「あはっ！痛いっ！」

口からは最低の言葉しか出てこなかった。

若干涙目になりながらも延々と蹴り続ける雫。

若干快楽に目覚めながらも痛みに耐える俺。

「ちょっと雫ー。お菓子持ってきたわ………よ？」

そしてまたもタイミング悪く乱入するお母様。

「あらあらあら、お母さんお邪魔しちゃったみたいね、あはははは。

「ぐっぐゅっくりー」

「お母様！何か勘違いなさっています！！お待ちください！！！！」

俺の叫びも空しくボタンと閉められるドア。

そして俺以上に赤面している雫はお母様が去った後、「ふんっ！」と腹いせにもう一発俺の腹に蹴りを入れてくれた。

その後　　。

俺は血涙が出そうな勢いで雫に土下座。勘違いさせてしまったお母様にも誤解ですと説明し、初めての月夜見家訪問は無事に終了いたしました。

初登場の時、俺に何も言わずに雫を連れ出したお母様は、雫が初めて男を家に連れて来たので何をしていいかわからず、とりあえず雫とケーキを買いに行ってくれたそうだった。その後も、俺に気を使わせまいと頑張ってくれていたらしい。

話してみるとお母様はとても気さくでいい人だった。

お父さんがいる時は来てはいけないと言っていたのが怖かった。

刑事部長のお父様。想像しただけで泣けてくる。「お前に娘はやらん！！！」とか言われそう…。

そして俺は帰宅する。結局今日はピアノの練習どころじゃなかったな。

ピアノの部屋なるものがこの家にはあるらしいのだが、そこに入りもしなかったし。

*

数週間が経ち、夏休みもあと僅かって頃。

今日は学校のピアノで雫が練習をすることになっている。

雫の家に行ったのは夏休み二日目のあれっきりで、雫に生徒会の

仕事がない日は今日まで何度も学校でのピアノの練習に付き合ったりした。

その間俺は、土御門とか龍とか御石とか燕とかとプールに遊びに行ったり、文化祭のコスプレ喫茶の内容を考えたりと、それなりに楽しい夏休みを送っていたが、その話は特筆するようなことじゃないな。

さて。

夏の太陽が依然として働き続ける八月下旬。
猛暑の中を笑顔で俺は、早く雲に会いたいなー、なんて浮かれたことを考えながら学校までの道を歩いていった。

その途中で「おう爺さん！」と、今日も気持ち悪さ絶好調の土御門にはったり会ってしまい、悲しくもこいつと二人で歩く羽目になった。

学校に着くと、土御門はクラス展示のコスプレ喫茶の打ち合わせを女子たちとしに一年一組の教室に入った。
なんだかんだ女子と仲良くやってんじゃん。

まあ、そんな土御門は放っておいて、俺は階段を上がり三階にある生徒会室に向かう。

生徒会室の扉を開けると、スーッと涼しい空気が体を包み込む。

「おう」

「よっ」

ガンガンに冷房が利いた生徒会室に待っているのは月夜見雫。

「今更だけど勝手にクーラー使っているのいいのか？ ばれたら希先輩（希）に怒られるぞ」

「いいの、あたし生徒会役員だから」

「あつそ」

希先輩　本名は姫路希ひめじのせきさん　はここ富商の高等部生徒会長で姉御肌の巨乳さんだ。そんなことはどうでもいいか。

快適なこの場所で少し話をして、それから同じ三階にある音楽室に移動する。

毎度のことだが、冷房が利いた部屋から出ると感じるあの気だるさにはどうしても慣れないな。というか、アレって体に悪いんだろ？

夏休みの間も吹奏楽部の生徒が音楽室を使っているのだが、彼女らの練習の邪魔にならないようにという条件でピアノを使わせてもらっている現状。

吹奏楽部ってのは、ピアノのような鍵盤楽器ではなくフルートやサククスといった管楽器主体なのでピアノは空いているのだ。

正直なところ、雫が弾くピアノの音は吹奏楽部の練習の音に負けていて聞き取りにくかったりする。

でも。

それでも耳を澄ませて聞いていると、素人の俺でもわかるくらいに確実に雫は上達していた。

雫が選んだ課題曲、シヨパンのノクターン第二番とハイドンのリトルセレナーデ。

シヨパンのノクターンの方は、やっぱり難しいのかちよくちよくミスが目立つ。しかしハイドンのリトルセレナーデの方はもう完璧と言っていいんじゃないかな。

これは竹本家の居候、月野かぐやに聞いた話だが、セレナーデというのは「恋人に向けた愛の曲」という意味らしい。

その話を聞いた時はマジで興奮した。雫はどんな気持ちでこの曲

を選んだのだろう、そんなことを考えるだけで自然と頬を緩んだ。

ちなみに……この話をかぐやに聞いた日の夜は二回目のお仕置きを受けた。

覚えているかな、雫とピアノの演奏会に行った日に受けたアレ。

ほら、ベッドに押し倒されてキスとか色々されるアレだよ。ほんと勘弁してほしいぜ……。

だって

俺には好きな人がいるのだから。

夏の協奏曲 10

一ヶ月ちよつとの夏休み、俺は雫と何度も顔を合わせたのだが。
。結果から言うと、二人の關係に進展はなし。

この夏休みで得たもの。それはどれも中学の時に得ることができなかつたものだった。

一言で説明するにはあまりにも難しく、かといってダラダラと話すのは恥ずかしくて躊躇われる。

例えば友情。

勉強することを忘れ友達と遊ぶ。

そんな誰もがやっていることを、俺はこの夏初めて経験した。

ここ富士見商業高校で出会った玉枝龍、御石衣、子安燕、それに同じ中学だった土御門。

面と向かつて言うことはないけれど、お前らと遊べて楽しかったよ。

例えば恋愛。

誰かが誰かを好きになる。

他の動物にはない人間だけに与えられた感情。

今、それを俺は確かに感じている。

月夜見雫、彼女のことを思うと居ても立っても居られない。

中学一年の秋に小さく感じたその感情を、今は確信を持てるほどに感じている。

俺は雫のことが好きだ。

容姿ではなく、彼女の中身を知れば知るほど、俺は彼女の虜になつていった。

例えば憐憫。

同じ家で暮らす月野かぐや。

彼女はいつも家において、自分のことだけでなく俺の世話をしてくれる。

俺以外に“友達”と呼べる知り合いのいない、そんな彼女に対する哀憐^{あいにん}。

夏休みというのに、誰とも遊ばない彼女に対する惻隱^{そくいん}。雫に対する感情とはまた違う別の感情を、俺はかぐやに対して抱き始めた。

もちろん口に出すことはないけれど、俺は“友達”として、“従兄妹”として、かぐやのことが好きだった。

そんな俺の夏休みもあと僅か。

でも今は、目の前のやるべきことに集中しよう。

とまあ、洒落た前置きなのだが…今、俺のやるべきことってやつは
女装。

DMでロリコンの俺にさらに変態になれと!?

さて説明しよう。

ことの始まりは、土御門やクラスの女子の様子を見に一年一組の教室へ向かったこと。

雫のピアノも十分人に見せられるレベルにまで上達したのでちょっと休憩しようって話になったんだ。

教室に入ると土御門が女子たちと口論していた。

口論は、なぜコスプレするのが女子だけなんだという女子の言い分に対し、土御門が断固拒否するという内容。いくら変態の土御門とはいえ男子のコスプレには興味がないらしい。もちろん俺もない。

土御門たちが口論しているところに都合良く現れた俺は衣装を着

せられ、それを見て男子もコスプレするかどうかを判断することになったのだった。

女子に渡された衣装に男子トイレで着替え、教室に戻る。

「ど、どうかな……………」

女子高生のコスプレをした俺を見ると、この場の全員が息をのんだ。

「アンタ似合いすぎ……………」

雫がそう言った。

そして女子の一人が、

「えっとお、竹本くん……………パッド入れてみる？」

と　　目を泳がせながら、しかし一定の間隔で俺を見ながら言った。

「その…スカートはなんか股下の感覚が気持ち悪いから着替えてくる……………」

「ああ、待つて。次これお願い」

どういうわけか、顔を紅潮させた雫が机の上に置いてあった衣装を俺に押し付けてきた。

「勘弁してくれよ……………」

「じゃあこれが最後でいいからっ！」

俺が嫌がらなかった場合は他の衣装も着ることになってたんですかね。

ということで、今度はファミレスのウェイトレスさん。

「……………」

「おい鼻血出てんぞ」

可愛らしいピンク色のウェイトレスさん（俺）を、口をポカンと開けて見上げる雫の鼻からは赤い液体が流れ出ていた。

そんな中、

「竹本くん…これ」

そう言いながら女子の一人が、薄ピンク色の謎の物体と、女性用のランジェリーを俺の手に握らせた。そして、「雫ちゃん後は任せ」とガッツポーズ。

雫はその声に真剣な表情で頷くと、俺の手を引き女子用の化粧室、つまり女子トイレに連行した。

とりあえず雫、お前は鼻血を拭おうか。

「　　って、ここ女子便所じゃねーかっ!」

生まれて初めて女子トイレに入っちゃった俺はマジで慌てていたと思う。

しかしそんな俺を無視し、

「もう、少しじっとしててよ」

と、雫はそう言いながら冷静に化粧ポーチを取り出した。

「俺の話を聞いてくれ!」

「顔、動かさないで」

「お願い聞いて。俺の話に耳を傾けて」

はい数分後。

「もう……………お嬢に行けない……………」

俺は女子トイレで雫に化粧をしてもらい、ブラジャーとパッドをセツトしてもらい……………ぐすん。

あれ、目頭が熱くなってきた…。

完全にウエイトレスさんになった俺を見て、「あたしより可愛い…」とかなんとか雫が言っていたが、まったく嬉しくないですよ、そんなこと言われても。

そして教室に戻ると。

「これほんとに爺さんなんか!?!そこらへんのお姉さんやないん!」

土御門が俺の体をペタペタ触ってきた。

「おいやめろ」

「おおっ！その声は爺さん！いやっ、これはもう婆さんやっ！！」
いつもより気持ち悪さ三倍増しの顔で土御門が俺の体……という
か、ウエイトレス衣装の胸の部分を触りまくる。

ははは、残念だったな土御門、それはパッドだ。

「竹本くん女の子みたいだよ………」

「爺さん俺と結婚してくれっ！！！」

「うわっ！抱きついてくんな土御門！！！」

女装した俺を見てうっとりする女子。

そして、感極まって　　って何に感極まったのか疑問だが、ま
あ何かに感極まったらしい土御門が俺を床に押し倒し、なんとも危
険な体勢で纏れ合ってしまう。

一見、ウエイトレスさんを押し倒す男の構図。いやまあ、これも
十分危ないのだけど……。

しかし実態は、ウエイトレスさんの衣装を着た^{おれ}変態を押し倒す^こ変
態の構図。

もう色々アウトだよ！セーフに限りなく遠いアウトだよ！！

「優等生クラス委員の土御門くんが攻めで………」

「女装の似合う美少年の竹本くんはやっぱり受けだよね………」

「普段と立場が逆転して土御門くんに辱められるってところがまた
いいよね………」

おいそのイカレ女たち！鼻血垂らしながらとんでもないこと言
ってんじゃねーよ！！

というか俺は早く着替えたいんですけど！

そんな話をしてないで俺がコスプレした本来の目的を思い出しま
せんかね、腐女子たち。

「竹本くん総受けて玉枝くんと土御門くんから虐められるんだよ…
…あつ、鼻血」

「ヒカルが…受け……………うん、それアリ」

「雫まで腐ってきたああああああああああああああああああああ
！！守りだからねっ！？攻めの反対は守りだからねっ！！！！どう転
んでも絶対受けなんかじゃないからっ！！！！！」

はあ…。

これでは溜息も出るってもんだ。

貴婦人もとい、貴腐人だらけの一組女子が妄想の世界から帰還し
たのがこれから数分後のこと。

本来議論すべきはずの、クラス展示のコスプレ喫茶で男子もコス
プレをするかどうかという話は、「とりあえず竹本くんはお願い」
という言葉に対し、俺が返事をする前に雫が勝手に「わかったわ
と言ったのでこの話は終了した。終了してしまった。

それから数日後の九月一日。

俺がロリコンという武器を装備し、雫が腐女子という新たな世界
の片鱗を垣間見た、世にも奇妙な夏休みが明ける。

そしてやっぱりというか、俺と雫の関係は“友達”から少しも進
展しないまま、高等部一年の二学期がスタートすることになった。

夏の協奏曲10（後書き）

夏の協奏曲 コンチェルト 完

哀の交響曲01（前書き）

九月、文化祭の話です。

月夜の序曲編はこの章を含めてあと二つです。

哀の交響曲^{シンフォニー}。ちょっと哀しい話になるのかな……。どうなのかな……。

この物語は竹取物語の固有名詞等をお借りしています。

当然フィクションです。登場する個人、団体…以下省略。

哀の交響曲01

九月の第二土曜日。

俺の通う富士見商業高校ふしみやうぎやうこうの唯一の学校行事、文化祭
富商祭がある日。 通称

二学期が九月一日に始まり、その日から文化祭までの期間は一時
間たりとも授業はなく、朝から夕方まで文化祭の展示準備を行うこ
とになっている。

体育祭なるものがない分、文化祭だけは盛大にしようっていう趣
旨らしい。

まあそんな学校側の趣旨なんてものは俺たち生徒にはわりと意味
を持たず、ただ単純に授業のない楽しい学校生活を送っているとい
うわけだ。

我らが一年一組のクラス展示はコスプレ喫茶。

俺たちは各々役割分担を行い、女子は衣装の完成だったり教室の
飾り付けだったり。男子は力仕事かな。パネル作りや机の移動とか。

そして文化祭を二日後に控えた今日、木曜日。一年一組の教室は
外見、内装ともに“学び舎”から土御門オーナー率いる“怪しいお
店”へと様変わりしていた。

文化祭準備期間からすでに学校全体がお祭り気分。

当然俺も、この楽しい時間に胸が高まっていた。

でもそれは百パーセントではない。現実は意外と厳しいもので、
誰よりも一緒にお祭りの準備をしたい人とは残念ながら別行動なの
だ。

そう、俺の想い人、月夜見雫は生徒会役員。

二学期が始まってからは生徒会の仕事に缶詰状態で、クラスに顔を出すのは朝と帰る前くらいのもの。

ここで少しだけ閑談を。

祭というものは、その準備段階が最も楽しい時間らしい。

いざ祭当日ってなると冗談のように駆け足で時間は過ぎて行く。

長い期間をかけて準備したっていうのに祭は一度きり、それも終わってしまうと一瞬の出来事だったように感じる。

そして残るのは、達成感ではなく虚無感。喜びではなく悲しみ。

だが中学の頃はそんな感情を持ったことはなかった。

体育祭や文化祭なんてもののために勉強する時間を割きたくなかった。

でも今は、その大嫌いだった祭が永遠に終わらないでほしい、永遠に始まらないでほしいと思う。

この楽しくて仕方のない時間が永遠に続けばいいと思う。

富商に編入して、俺はそういう人間じみた感情を覚えることができた。

でも そんな俺が楽しんでいるからこそ“あいつ”にも同じ思いをしてほしいんだ。

誰もが笑顔で過ごすこの時間を、無表情でただ見ているだけのやつがいる。それは隣のクラスの月野かぐや。

かぐやは昔の俺と同じなんだ。

学校に行っても誰とも話さない。友達もいない。楽しくない。負の連鎖だ。

かぐやのクラス、一年二組のクラス展示は焼きそば屋さん。“焼

きそば屋”という看板が二組の前に立っているから間違いない。

俺が廊下で“コスプレ喫茶”という文字をパネルに書いている時、お隣の二組の生徒は教室の飾り付けやパネルの色塗りをしていた。そんな中、二組の教室の前の廊下に立って何も作業をせず、ただ突っ立っているだけのあいつを見て、俺は胸が苦しくなった。

だから昨日家に帰って聞いた。「お前は何の係なんだ？」と。そしたらかぐやはまるで興味がないように「知らないわ」と言った。

俺はそれ以上深く立ち入った話ができなかった。

そして今日、お節介だとわかっていながら彼女と同じ二組の御石衣に聞いたんだ。

お前はかぐやのことを嫌っているのか、二組の連中はかぐやのことを嫌っているのか、富商の生徒はかぐやのことを嫌っているのか……ということ。

俺は半年程前に編入した生徒なので生徒の交友関係なんて知らなかったから。

御石の返答はこうだった。

かぐやは以前から綺麗で大人びていて、さらに話す口調からも近づき難い存在だった。それに女子なら誰でも使っている月野ブランドの実質跡取り。そういう理由から、かぐやは自分たちとは別格の存在だとみんな思っているらしい。

しかし、だからといって嫌っているわけではない。“可愛い”ではなく“綺麗”という言葉が似合う彼女を、“憧れ”に近い感覚でみんな見ているらしい。

そういった点でも近づき難い存在なのだそうだ。

御石の話を聞いて俺は安心した。

嫌われていないのなら話は早い。あとは自分で一步踏み出すだけだぞ、かぐや。

楽しい時間はみんなに平等なんだ。

誰か一人でもつまらない顔をしているのは、それは祭と呼べないさ。

なんてことを考えたりした木曜日の放課後。

朝に顔を合わせて以来、約八時間ぶりに雫たんに会えるよ。もう待ち遠しかったよ。

ふう…いつもながら長いツインテールと細い脚が輝いてるぜ

ってことで、生徒会の仕事を終えたその雫が何やら小さな紙と小さな箱を持って、怪しいお店と化した一年一組の教室に入ってきた。

「はい、みんなこっち見て。今からミスターコンテストとミスコンテストの投票をします。名前と…わかるなら何年何組かも書いてちょうだい」

三十個あった机が全て撤去され、五人掛け丸テーブル六個とパイプ椅子三十個になった教室。その中で元教卓があった辺りの場所にある丸テーブルに投票箱的なものを雫は置いた。

ふむ、ミスター&ミスコンってわけね。富商も洒落たことをするじゃないか。

そういうわけでクラスメートたちは思い思いに名前を書いて投票箱に入れていった。

しかしいきなり名前を書けと言われてもなあ。まったく思いつかん。

ミスターの方は………、龍でいいや。一年三組、玉枝龍…っと。というか龍は普通にイケメンだろ。今まで見てきた男の中ではダ

ントツに光るものを持っている気がする。

ミスの方は……悩むなあ。

外見だけで考えるなら文句なしでかぐやだ。あいつは次元が違う。かぐやを見て綺麗と思わないやつは、たぶんこの世にいないんじゃないかな。

うーん。だが「一年一組、月夜見雫」と書きたい。でもペンを握ると恥ずかしくて書けない。

よく考えてみる。誰が見ているかもわからないこの場で同じクラスのかぐやの名前を書けるか？書けるってやつは今すぐ俺にその勇気をくれ。

そして悩みに悩んだ結果、ミスターの方だけ箱に入れてミスの方はズボンのポケットに突っ込んだ。

全員が投票し終わると、

「文化祭で表彰するのは一位と二位だけだけど、一応五位くらいまでは張り出すようにするから」

そう言って雫はまた生徒会の仕事に戻って行った。

それにしても二学期に入ってすれ違いが多くなったよな。ピアノの件もまったく話さないし、ちゃんと練習してんのかな。もういつそ生徒会なんてやめちまえよ。そしたら一緒に作業できるのに。

哀の交響曲02

その日、家に帰った俺は何気なくかぐやに話しかけてみた。それはちょうど晩飯を食べ終わった頃で、かぐやはリビングのソファでファッション雑誌を読んでいた。

「よお、今日生徒会のやつらがミスターとミスコンの投票用紙配っただろ。お前誰に入れた？」

俺が声をかけると、「kaguya10月号」と書かれたファッション雑誌をパタンと閉じて「さあ」と言った。

“kaguya” ってのは、月野ブランドが毎月出版しているファッション雑誌。しかしそのタイトルはおかしい。そしてそれを毎月読んでいるお前はもっとおかしい。

「あなたは？」

立ち上がってかぐやが言う。

「あなたは誰に投票したの？」

「龍だよ」

「玉枝くと誰なのよ」

「うぐぐ……」

俺との距離を一気に詰めてくる。

20センチ以上身長差があるのだが、どうしてかこいつからは巨大な威圧感を感じる。

「月夜見さんのね」

「いや、そっちは投票しなかったよ。お前と雲で迷ってたから」

俺がそう言うと、小首を傾げて「あら嬉しい」と、嬉しくなさそうにかぐやは言った。

「俺は言ったんだからお前も言えよ」

かぐやは少し間を置いて、「私は玉枝くと子安さん」と言った。

「より良い容姿を競う催しなのでしょ？だから顔立ちが良くて背が高い二人に入れたわ。本当はあなたに入れてあげたかったのだけれど。あなたと玉枝くんだと“容姿”という点では玉枝くんかと思っ
て」

すごく綺麗で大人っぽいかぐやだが、如何せん身長が…。たぶん本人も気にしていると思う。だからこそ180センチを超える龍と、170センチの俺と寸違わない燕に投票したのだろう。

しかしこれだけ綺麗で、加えて燕みたいに背が高かったなら、たぶんミスユニバースとかになれるんじゃないかな。たぶんだけど。

あ、いや無理か。だってかぐやはツルペ 慎ましい御胸だもんね。でも俺は嫌いじゃないぜ、貧乳。

「あと10センチ背が高かったら文句なしでお前に入れてたけどな」
ちよつとからかってやるか、的な気持ちで言ったのだが…。

「あら、でもあなたは小さい子が好きなのでしょ？噂だとロリコンだとか」

「what!？」

「違うの？ロリコンさん」

かぐやさんに女王様スイツチ入りまーす！

「あらい方を間違えたかしら」

「間違いなのは言い方じゃねえ!!」

「ペドフィリア？幼女性愛者？」

「もうやめてっ!」

「ああ、だから月夜見さんなのね。あの子童顔だし」

「あんな？そうじゃなくてだな？」

するとかぐやは「うーん」と何かを考えるそぶりを見せ、そして何かを思いついたらしく「うんうん」と首を縦に何度か振った。

「ちよつと来なさい」

俺はがっしりと手首を掴まれ、いざ桃源郷へレッツゴー。

「あの……なぜにベッドに押し倒しやがりますかね？」

連れられて来たのは二人の寝室。間違いではないがこの表現はちよつと淫靡だな。

「えーつと……、おっほん」

俺をベッドに押し倒したかぐやは、恥ずかしそうに顔を赤くして咳払いをした。

「というか　これって三度目のアレ！？女王様のお仕置きのアレ！？」

「ヒカル…じゃないわね。おっほん」

「お前気持ち悪いぞ」

いつもの馬鹿にするような、軽蔑するような、俺好みの女王様の目ではなく、なんとというか　可愛い感じに照れている。

何に照れているのか　それはこういうわけだった。

「お兄ちゃんっ！」

何度も咳払いをして喉の調子を調整していたのはこのためか、裏声のような高い音の声だった。

そして俺は迷わず言った。

「キモッ！！！！」

あのかぐやが超笑顔で笑っています！

「この世の終わりなのか！？今夜あたりに隕石が地球をぶっ壊すのか！？」

「キモイなんてひどいよお兄ちゃん。かぐやねー、お兄ちゃんと一緒に寝んねしたいなっ」

「怖いよっ！熱でもあんのか！？」

「お黙りなさい」

「ひい…！」

幼女モードと女王様モードを器用に使い分けんな！

「えいつ！」

幼女モードになったらしいかぐやはぴょんと跳ねて俺の隣に寝転んだ。

「お兄ちゃんの体あつたかーい」

そう言いながら抱きついてくる。

これが雫の妹である初等部一年生の霞ちゃんかすみだったなら俺は間違
いなく昇天していただろう。

だがしかし！お前は誰だっ！

「ロリコンのお兄ちゃんはこのうのが好きなんだよね、ね？」

「かぐやさん、物凄い勢いでキャラ崩壊してますよ？」

「答えなさい」

だから急に女王様になるなっ！

「かぐや、お兄ちゃんとちゅーするのっ」

「はiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!？」

「んー」

「んー、じゃねーよ！いいから落ち着け！今のお前は悪い病気なんだ！」

俺に覆いかぶさり唇を近付けてくるので必死に抵抗する。

そしてこれは不可抗力。上に乗るかぐやを払いのけた後、かぐやがベッドから落ちないように体を支えるのだが。

「お、お兄ちゃんって意外に強引なんだね……」

お互いのポジションが入れ替わり、俺がかぐやを押し倒した風になっってしまう。

いつもの大人びた顔ではなく、ちよっぴり幼く見えるかぐやはひどく赤面していて、潤んだ瞳で俺を見ていた。

「わ、わりい……」

「いいよ……お兄ちゃんなら……」

ポタ……ポタ……。

文字通り目と鼻の先にある白く綺麗なかぐやの頬に、赤い液体が滴^{したた}る。

「やべつ、鼻血が……」

不覚にも、ロリロリ状態のかぐやの今しがたの一言で鼻血を垂らしてしまったのだ。

しみ、しわ　そんなものとは無縁の、透明感のある白いかぐやの肌が変態の汚い血で濡れていく。

そしてこれを機に幼女モードは封印される。

再びのポジションチェンジ。

かぐやは俺を蹴飛ばし仰向けにすると腰のあたりに乗っかってきた。

「この変態」

すごい蔑みの目が俺を襲う。でもちよつと……。

「やっぱりあなたはロリコンだったのね。吐き気がするほど気持ち悪いわ」

上体を起こしたので頬に付いた俺の鼻血が、ツーツとかぐやの頬の輪郭に沿って垂れた。

それ殺人者の顔っす！

「言ってることとやってることが滅茶苦茶だよアンタ……」

「アンタ？それは私のことかしら」

「女王様どうかお許しをおおおお……」

それと鼻血出している人を仰向けにするのは危険です。

鼻血出た時に上向くアレは危険だからね？アレやると気管に鼻血入ってマジ危ないから。

「ねえロリコンさん」

「……………なんすか」

するとかぐやは小さな声でこう言った。

「今日御石さんに言ってくれたこと……………ありがとう。少しだけ学校が楽しくなったわ」

「……………」

そして俺の頬に一瞬だけキスをしてくれた。

かぐやが幼女モードになった理由

それは俺への感謝の気

持ちだった。

ロリコンの俺を悦ばせるためではない。

今日俺が御石に話した、学校に友達がいなかぐやを気遣ってした行動。結果、御石は勇気を出して かぐやに話しかけてくれたらしい。おかげで今日は御石の手伝いとして“焼きそば屋さん”の準備に携われたそうだ。

そしてそのことに対して“嬉しかった、ありがとう”と、かぐやは俺に言いたかったらしい。

不器用だから、さらっと言えない。だからこんなことを……………。

この話をする時のかぐやの顔は、たぶん今までに見た中で一番綺麗で 可愛かったと思う。

え？いい話なのこれ？

俺めっちゃ罵倒されたんですけど。ロリコンとかめっちゃ言われたんですけどお！

そしてさらに雰囲気ぶち壊すみたいで悪いけどさ…、まだ俺の鼻血付いてますよ？結構シユールな光景ですね。

哀の交響曲03

金曜日。

文化祭もいよいよ明日。

今年編入した俺は当然初めて文化祭に臨むわけだ。相当胸が高まっている。

そんな俺以上に他の生徒たちのテンションはウナギ登りで、登った結果最高点に達している感じだった。

富商の新生徒の俺よりも、以前からここにいた生徒の方が、年に一度のお祭りがどれほど盛り上がるかを知っているからだ。

そして今年は“後夜祭”があるらしい。生徒会長の姫路希つゆのきさんの提案で、先生たちの了承を得るために尽力したのだとか。

俺たちのクラスは、まあ他のクラスもだが、さすがに前日となるとクラス展示の準備はほぼ完成していて、今日一日は準備というよりも当日の段取りの最終確認という感じだった。

朝、残念なことに雫は今日も生徒会の方へ行ってしまった、今はもう一人のクラス委員である土御門がクラスのみみんなの士気を高めている。

「予算は衣装で相当持ってたかたてもたけど、その代わりに女子が最高のコスプレを作ってくれたで！明日は売って売って売りまくろうやー！」

三学年全部で十二クラスある富商、そしてクラス毎に五万円の予算が学校から貰える。正確には貸してもらえる。

というのも、この五万円は後日売上から回収されるのだ。で、売上から五万円を引いた残りはクラスの打ち上げなんかに使われる。

さらに売り上げ額は全十二クラスで順位付けされて、一位から三

位のクラスは表彰までされる。

となれば意気込んで当然だ。

「おおおおおおおおおおお！！！！！」

クラス全体が一致団結し、土御門の言葉に声援を送る。

「竹本くん！」

女子の一人が声をかけてきた。

「竹本くんの衣装なんだけどね、女装もよかつたんだけど、栗ちゃんの意見で執事さんになつたよ」

「おお、そりゃ助かる」

文化祭当日は他校の生徒も大勢やってくるって話だし、もし同じ中学のやつらに女装した俺を目撃されでもしたら……………。

そんな事態は考えたくもないぜ。

「栗ちゃんの衣装はメイドさんだし、となればやっぱり竹本くんは執事さんだよね！」

「と、言いますと？」

「メイドさんの相方は執事さんって昔から決まってるんだよ。美形執事の竹本くんを狙う委員長は土御門くん。そして鬼畜委員長の魔の手から美少年執事を奪還しにイケメンの玉枝くんが登場するってシナリオ」

「前後の脈絡皆無だな」

妄想世界という名のヘブンに猪突猛進の女子はそっとしておいてあげよう。

後日このシナリオが富商の裏携帯サイトで腐女子たちの大反響を得るのはまた別の話だ。取り上げないけど。

昼食を取った後、一通り流れを確認するために女子たちと俺は衣

装に着替え、男子たちは各持ち場：会計だつたり裏方だつたり。一年一組のコスプレ喫茶は、ジャムやバターを塗ったトースト一枚とコーヒ―、または紅茶一杯を提供。これで値段は六百円。百人分も売りあげれば返却の五万円を差し引いてもプラスになる計算だ。

「なんか竹本だけ優遇されてね？」
と、男子生徒が言いがかりをつけてきた。
「なんなら代わるけど」

誰かの持ち物だろうジャケットを改造して作った執事服に着替え、俺は、会計席に座る男子に言っただけでやった。
するとオーナーの土御門やってきた。

「やめといた方がええ。爺さんのポジションは腐女子の餌にされるんや」

「腐女子だと！？この世で最も恐ろしい存在と噂されるあの腐女子か！？」

「そうや…その腐女子や……。それにウェイターやるより会計席に座ってコスプレした女子眺めていたほうが絶対ましやで」

「さすがオーナー！」
えっへんと偉そうに胸を張る土御門。だがお前はただの変態だ。

「まあ…、竹本も色々がんばれよ」
色々の内容をぜひとも知りたいね。

着替えに時間がかかった女子たちが戻ってくると男子たちのボールテージが急上昇した。

オーナーの指示でいろんなコスプレが揃ってやがる。そしてその中に……。

「栗たん！？」

「な、なによ……」

ミニスカメイドの栗が！

「目線こつちー！」

手を上げて目線を要求する謎の変態集団。

一体何事だ！？

それを説明するのは土御門オーナー。

「ふふふふふ………。これが我がコスプレ喫茶の真髓……。三分間
写真取り放題、五百円やあああああああああ……！」

「聞いてねーよ」

コスプレ衣装を着た女子たちが一斉に教室の窓をシャットアウト。

「土御門！！！！こんな聞いてないわよ！！！！！」

そしてオーナーに猛抗議。

「そんなん言うても看板には書いてしもってるし」

「さっさと消しなさいよ！！！」

「えー」

こんな金儲けの裏ルートを確立してはな……。恐れ入ったぜ。
だが女子たちの猛抗議の末、コスプレ喫茶の看板に小さく書かれていた“三分間写真取り放題500円”という文字の上からはガムテープが張られることになった。

まあ俺としても、超可愛い雫がどこの誰かもわからないやつに写真を撮られることがなくなつて一安心だ。

意味不明の騒動が終わり、各自持ち場の確認やらなんやらをして、
さて着替えるかつて時。

「ちよつとヒカル」

話しかけてきたのはメイド服姿の雫たんだよ。

「よお、生徒会役員様は大変そうだな」

あまり興奮してはまずいので極力見ないことにする。

だが意志の弱い俺は、始終美しい御御脚を凝視していた。変態で
ごめんね。

「生徒会の方はもうだいぶ片付いたわよ。それよりさ……明日、ピアノの発表がうまくいたら……」

「ん？」

言葉を飲み込んだ雫は俯いて、胸の前で手をもじもじさせていた。言いたいことは、なんとなくただけど想像できた。

俺がその先の言葉を待っていると、

「雫ちゃん、早く着替えようよー」

腐女子どもが邪魔をして…。

「じゃあ明日っ……………」

そう言っただけは逃げるように俺の前から離れていった。

ま、いつか。

雫が言おうとしていたその先のセリフは
ってやるよ。

明日俺が言

そろそろ俺たちの関係にも変化が欲しい頃だしな。

哀の交響曲04

そして文化祭当日

この日、珍しく家を出る俺をかぐやが呼び止めた。
なんだろう。今日は弁当はいらないはずだが…。

俺が従兄妹のかぐやと一緒に住んでいることは、残念ながら学校中に知れ渡っている。けれどもこれまでは朝の登校は時間をずらしていた。

しかし今日は「一緒に登校しましょう」と、家を出る俺の後を追った。

べつに一緒にいるところを誰かに見られて困るわけではなかった。それにお祭りの日は無礼講、みんなが楽しければそれでいいんだ。

文化祭前日の一日だけクラス展示の手伝いをしたかぐや。今日は何か役割があるのだろうか。

それとなく聞いてみると「お会計よ」と、少しだけ嬉しそうに言った。

かぐやには、俺以外に“友達”と呼べる人間がいなかった。

これまでに誰かと共同作業なんてしたことはなかったのだろう。

だが今日は二組の焼きそば屋さんのお手伝いができる。彼女はそれが嬉しかったのだと思う。

そして、なぜ俺はかぐやと別のクラスなんだ、と少しだけ恨んだ。俺が同じクラスなら、もっとこいつの為に何かできていたのに。

学校に着くとさっそく校内は活気に満ち溢れていた。

今日は土曜日なので他の高校の生徒だったり、ここの生徒の親御

さんだったり　それはもう大勢の人で溢れていた。

それに忘れてはいけませんが、ここ富士見商業高校はそこその金持ち学校だ。社長の子供や財閥の子供なんかもいる。その関係者の人がたくさん顔出しに来ている。ちよつとばかり緊張する半面、我らがコスプレ喫茶の客としてなんとか呼び寄せようと拳に力を入れた。

かぐやと別れた後、教室にて　。

「遅いで爺さん！もつと気合入れてこーやあ！！」

「朝からテンション高いな土御門」

一年一組コスプレ喫茶のオーナー土御門がサングラスをしていた。見るからに不審者である。

というか　この怪しいサングラスの男をどこかで見たことあるぞ。どこだったかな…、忘れた。

教室ではすでに女子たちが衣装に着替えており、男子たちもトーストや紅茶の準備に取り掛かっていて、ここは完全にコスプレ喫茶だった。

そして、ミニスカメイド服を着たツインテールの少女が一人。

「はい、アンタの衣装」

超可愛いその人は俺に執事服を手渡した。

おはよう雫たん。今日も輝いているよ。

俺は男子トイレで受け取った執事服に着替えて教室に戻る。すると　。

「遅い。もう開会式始まつちゃうじゃない」

なにやら時間を気にしている雫が俺のもとに駆け寄ってきた。

そして雫は腐女子、もといクラスメートの女子にメイド服に忍ばせていたデジタルカメラを渡し、

「一枚お願い」

そう言って俺の腕に抱きついてきた。

「おい……いきなりすぎんだろ……」

「いいじゃない。こんな格好することはもうないんだし」

俺の腕に……雫の胸が……胸があ……！！

「当たらない!？」

「な、なに？大きな声出して」

いやここはラブコメの王道っぽく腕に胸が当たるところだろ。

仮にも俺はラッキー爺さんの異名を持つ男だ。ちよっとラッキーなアクシデントくらい……。

Oh。なるほど、そういうことか。

貧乳………悪くないぜ？

「いやあ、憎いなお二人さん」

そう言いながら腐女子はデジカメを構える。

「ほらあ、こんな時くらい恥ずかしがらないでいいじゃない」

「お、おう」

執事とメイドは腕を組んで、一枚の写真に収まった。

「後で俺にもプリントしてくれ」

「あたしの写りが悪くなかったらね」

「あっそ」

俺はそっけなく返事をする。

が、内心は。

くれよおおおおおおお……！！雫さんの写真欲しいよおおお
おおおおおおお……！！……！！

って感じた。

そして場所を体育館に移す。

今日は仮装大会なんですかってくらいに光景だった。

生徒の大半はなにかしろの衣装に着替えており、開会式もずいぶ

んとフリーダムだった。

会長の姫路希さんが挨拶をして、オープニングセレモニー的な催しがあり、ステージ企画の時間なんかをお知らせしてくれた。

その後は各自の持ち場に直行。

ついでながら雫のピアノ発表は午後の三時からだった。

今日の俺の予定は、朝から昼まで教室でコスプレ喫茶のウェイター。午後の一時からはクラス全員でミスター&ミスコンテストの結果発表を体育館に見に行くことになっている。そして三時から雫のピアノ発表を見て、その後はまたウェイター。

まあ、こんな具合かな。時間があればかくやと御石がいる二組、龍がいる三組、燕がいる四組に顔を出しに行きたい。

コスプレ喫茶が開店して数時間。校内もお客さんたちが増えてきて、我がコスプレ喫茶も大いに繁盛してきた。

「お客さん！ちょっと寄ってきませんか！可愛い子いますよー！！」

オーナーは楽しそうに客引き中だ。もう少し言い方を考えて欲しい。

トースト一枚とコーヒーまたは紅茶を一杯。これで六百円のコスプレ喫茶は、予想していたよりも大繁盛。すでに学校への返却分五万円は売りあげたんじゃないだろうか。

そして客の入りはまだまだ止まらない。

と、そんな時。

「お姉ちゃん、遊びに来たよー！」

「霞にお母さん……！」

雫の妹さんである霞ちゃんと、お母様がご来店なされました。

メイド服を着た雫に霞ちゃんが抱きつく。百合っていいよね。

そして執事服を着た俺に気付いた霞ちゃんは、

「あつ！お兄ちゃんだ！！」

今度は俺にも抱きついてくれた。

「こらこら霞ちゃん」

「お兄ちゃん、久しぶりー」

ほんと可愛いな。よし、頭を撫でてあげよう。

俺が霞ちゃんと戯れていると、雫と話していたお母様が俺の方へ歩いてきた。

「この間は本当にごめんなさいね竹本さん。雫のピアノはその後上達しましたかしら」

にっこり微笑んで、上品さが体中から滲み出していた。さすが経営コンサルタントの社長さんだ。

「ピアノはもうばつちりですよ。午後からなんで聞いていってくださーい」

一度しかお会いしたことはないが雫のお母様は気さくでとても話しやすい。

俺が練習結果を報告すると、

「あらそう」

と、娘の頑張りを喜んでくれた。

「今日はお父様も？」

「最近事件続きで……。今日もあの人は捜査会議なんですって」
雫のお父様は県警の刑事部長。事件となれば…、そりゃ休めないってわけか。

「それにしても物騒ですね。富商の生徒さんが二人も失踪したのでしょうか？それも変死体で発見されたって……」

急に顔色を変えたお母様は小さな声でそう言った。

教室内は騒がしかったが、それでも俺の耳にははっきりと聞こえた。

「この生徒がですか？」

「ええ。聞いていませんか？」

「いや……………知りませんでした」

同じ学校の生徒が変死？

その話を聞いた俺は、好奇心

というよりも興味、知的欲

求が働いた。

「少し詳しく聞いても」

言いかけてその言葉を雲に遮られる。

「お母さんも食べていくでしょ？」

やってきたトーストと紅茶を持ったメイド服の雲が空いた席にお母様と霞ちゃんを誘導した。

事件のことは、後々教師から告げられるだろう。たぶん文化祭前で言う機会がなかったんだな。

食べ終わったお母様と霞ちゃんは他の場所を回ると言って出ていった。

哀の交響曲05

そして時間は流れ時刻は一時。コスプレ喫茶は一旦休業だ。

クラス全員でミスター&ミスコンテストの結果発表を見に体育館へ向かった。

俺たちが着くとすでに体育館は所狭しと人が座っていて、残念ながら後ろの方で立って見る以外ないようだ。

ここ一体がざわざわ、そわそわとミスター富商、ミス富商が誰なのかを予想している。

「爺さんは誰に投票したんや？」

ニヤニヤしながら土御門が聞いてくる。

それに対して「龍」と一言返す。

「なんや、やっぱりミスター富商は龍で決まりやな。ま、爺さんも五位くらいに入るんちゃう？」

「言ってる」

今年編入してきた俺が選ばれるわけがない。一年ならともかく、上級生が俺のことを知っているはずがないからな。

「そういうお前は誰に入れたんだよ」

「俺は龍と希先輩や。巨乳部門一位確定やて」

「あつたか？そんな部門」

「へっへっへ。おっと、噂をすればその希先輩のお出まじや」

土御門は気持ちの悪い笑みを見せるとステージの方に視線を移した。

そこには、かぐやとはまた別の意味で大人の色香 主に胸

部 を持つ生徒会長の姫路希さんがマイクを持って立っていた。

富商の生徒の大半が衣装を着ている今日、しかしステージに立つ

て自分が選ばれたことに恐縮しているのだろうか、それとも今体育館内にいないのだろうか。

館内はまたざわつき始める。

「えーっと……。玉枝くんは……。いないのかな？」

体育館の後ろの方にいた俺は一年三組の連中が集まっている辺りを背伸びして見渡してみる。身長180センチを超える龍だ、ここにいるのなら目に入らないわけがない。

だが龍の姿を見つけることはなかった。どうやら体育館に来ていないらしい。

まったく。お前は自分が選ばれることくらい予想できなかったのかよ。

一向にステージに登らない龍に痺れを切らしたのか、希先輩は次のミス富商の発表に移った。

「ちよつと困りましたね……。さあ！気を取り直して先にミス富商の発表をしちゃいましょう！！」

場の切り替えが上手かった。

これで再び館内に活気が戻る。

「さてお次！今年のミス富商は……。なんとまたしても一年生です！」

静まったミスター富商の発表前とは違い、ミス富商の発表を前に「ひよおおおおおおお！！！」と声援が送られた。

やっぱり男子より女子に興味があるのだろうか。俺だって興味がある。

そしてミス富商も一年生ときた。これはもしか……。

「今年のミス富商は」

。今回も希先輩は名前を呼ぶ前にずいぶんと溜め、そして

「一年二組！！月野かぐやさんですっ！！！」
かぐやの名前が呼ばれた瞬間、思わず「マジか！」と声を漏らしてしまった。

「月野さん。いましたらステージに上がってきてください」

ざわざわと館内が騒がしくなる中。

コッソ、コッソと、ステージへの階段を上る足音が小さく響く。

照明が当てられ、その綺麗な肌をさらに輝かせてステージに立つのは。

「月野かぐやさんです！！みなさん拍手　！！！！」

照れくさく顔をほんのり桜色に染めているかぐやに大きな拍手が送られた。

壇上に立つかぐやは、恥じらいながらもまっすぐ体育館の奥の方を見る。そして一瞬俺と目が合つと、家にいるときでは想像もできない笑顔でにっこりと笑った。

俺は思う

よかつたな、おめでとつ。

誰もお前のことを避けているわけじゃないんだ。

だって、こんなにお前は好かれてるじゃないか。

これからは友達もたくさん増えるさ。

かぐやに向けた拍手はしばらく鳴りやまず、それがさらに彼女の頬を赤く染めた。

「ミス富商に選ばれた月野さん！一言お願いします！」

希先輩からマイクを渡されたかぐやは照れながら、しかしはつきりと言った。

「今日は本当にありがとうございます。素敵な思い出になりました」
言い終わり頭を下げるかぐやにはこれまで以上の拍手が送られた。

ここでステージの袖から小さな人影がひよっこり現れる。長い髪を両サイドで二つに結っているその人はメイド服を着ていた。

メイド服の小さな少女は希先輩とこそ話して、何かを手渡すとまた袖の方に戻って行った。

というか完全に雫だった。

雫に何かを受け取った希先輩はなにやら気も漫ろな感じになる。

「えーっと……。どうやらミスター富商に選ばれた生徒が見つからないようなので、ミス富商へティアラ贈呈の役は第二位の方にやってもらいましょうー！」

聞けばミスター富商に選ばれた生徒はミス富商の生徒の頭にティアラを乗っけてやる権利があるらしい。

本来その役は龍だったのだが……。いったい龍はどこをほつつき歩いているのか。生徒会役員の雫が猛ダツシユで探しまわっていたらしいが結局見つからず仕舞いだったわけだ。

ミス富商の生徒にティアラを乗せるのは恒例行事みたいなものでそれを省くわけにはいかずミスターコンテストの投票で第二位だった生徒に代役を任せることになったらしい。

この時俺はステージ袖にいる雫に興味津々で何も耳に入っていないかったのだろう。ふと土御門が俺の脇腹当たりを突つついてきた。

「はっつ！」

不意に弱い部分を刺激されて反射的に声が漏れる。

「なんや変な声出して。それより呼ばれてるで、爺さん」

土御門はこの上なく気持ち悪い顔をしていた。

「呼ばれてるって、誰に？」

「とぼけんとはよ行ってきい。ミスターコンテスト第二位のラッキー爺さんっ」

「ミスターコンテストの第二位ねえ……。って、はあ！？俺がか！

？」

ステージの方へ目をやると雫が俺をガン見していた。

マジか。

同級生、上級生の黄色い声援を受けながら俺は人の群れを割ってステージへと向かった。

いや待て。俺が第二位だと？なにかの間違いじゃなくて？

しかしステージ下の階段の前まで来ると生徒会長の希先輩が俺にマイクを差し出してきた。

「はい、一言お願いね。竹本くん」

「はあ……………」

ステージに上がり正面を向くとそりゃもうすごい数の人。体はガチガチに硬直してしまった。

ミスコン一位のかぐやと並んで立ち、マイクに口を近付ける。

「どうも、龍の代わりに竹本光です」

そう言うのと館内は笑い声に包まれた。

仕方ねーよ。なに喋っていいかわかんないもん。

恥ずかしくて頭を掻いていると希先輩が俺の手からマイクを奪う。

「みなさん知っての通り竹本くんと月野さんは従兄妹同士で、しかもあの月野ブランドのお子さんたちです！さあ今一度お二人に拍手

ー！」

ぱちぱちぱちぱち。

生れて初めて人から拍手をもらったがそう悪い気分ではなかった。

「さーて、では竹本くんにはミス富商の月野さんへティアラ贈呈をお願いしましょう」

大勢の人の前で相当話し慣れている希先輩は着々と段階を進めていく。

その希先輩の手から可愛らしいキラキラしたピンク色のティアラを受け取りかぐやと向かい合う。

ティアラを両手で持ち、嬉しそうに顔を染めるかぐやの頭の上まで持っていく。

かぐやがそれを受けようと少し頭を下げた。その時。ステージの袖の方で、唇をひどく噛みしめながら俺とかぐやを見ている雫が目に入る。

雫がいる場所は体育館にいる人たちからは死角になり見えないだろう。

彼女は必死に何かに堪え、生徒会役員として立ち振る舞っていた。

俺の視線はティアラを贈るかぐやではなく、どうしても雫に向けられてしまう。

力を亡くした俺の手はゆっくりとティアラをかぐやの頭の上に置いた。

「ありがとう」

昨日に続いてまた感謝の言葉をかぐやから聞くことになった。

照れて苦笑いをするかぐやには可愛らしいティアラがよく似合っている。これはかぐやの頭の上でのみ存在するために作られたもののように思えた。

ティアラ贈呈が終わると今日一番の拍手が俺とかぐやに送られ、それに返事をするように正面を向いて頭を下げる。そして再び雫がいた位置に目をやるが、そこに彼女はいなかった。

哀の交響曲06（前書き）

評価のポイントが20を超えました！

みなさん本当にありがとうございます！！

この章からはラブ&コメディではなく若干シリアスですが頑張
て書いていきます！！！！

哀の交響曲06

ミスター & amp・ミスコンテストの結果発表が終わり舞台から降りると、俺とかぐやは多くの人から大歓声を浴びた。それは嬉しくもあり、恥ずかしくもあり。俺は軽く会釈して返したが、しかし心ここにあらず。

雫はどこにいったのだろう。それだけを考えていた。

遠目からも強く唇を噛みしめていたのはわかる。かぐやに俺がテイアラを乗せることへの嫉妬だろうか。

もう間もなくピアノの演奏なのでその前に少しくらい話をしたかった。約一ヶ月の間練習に付き合ったんだし、発表前に少し声をかけるくらいさせろよ。

俺がクラスの連中のもとに戻ると、やつらは早速コスプレ喫茶再開へ意気込んでいた。

「お帰り爺さん。いや、ここはコスプレ喫茶の客寄せパンダとでも呼んだ方がええやろか」

「よし、お前帰って寝ろ」

「まあそう言わんと。それよか爺さんのおかげで女子の客も増えそうやな、にっしっし。よっしや、午後も気合入れてこう!!」

「おー!と言いたいところだけど。土御門、雫を見なかったか?」

「雫ちゃん? そう言えば見当たらんな。…………… なんか爺さんこっすり逢引か?」

「そんなところだ」

「かぁー!!! これやからラッキーなやつはっ!!!!!!」

「冗談だよ、真に受けるなって」

しかし逢引か。いい響きだな。

土御門と話をしていると、ステージからここまで俺の後ろをつい

てきたらしいかぐやが執事服の裾を引つ張った。というかかぐやの存在にまったく気付いていなかった。

仮装大会さながらの一年一組の集団の中に制服姿のかぐやがポツンと立っている。

「あなた、これから時間あるの？」

「え、まあ……。ちよつとなら」

「天文学部のプラネタリウム、一緒に見に行きましょう」

ピンク色のティアラを頭にちょこんと乗せてかぐやは微笑んでいた。

その笑顔を見て断ることができず、コスプレ喫茶には後から行くよと土御門に告げた。

悪いな土御門。お前が言う客寄せパンダにはなれそうにねーや。

*

三階にある天文学部の教室。夏休みに雫とピアノの練習をした音楽室のすぐ近くだ。

かぐやと二人そこに入ると教室内には暗幕を張っており夜のようになり真っ暗だった。

「あ、お客さん？」

人気がないのだろうか、教室には真面目そうな部員の女子生徒が二人いるだけで他には誰もいなかった。

「よかった。このままお客さん来なかったらどうしようかと思っていたの」

眼鏡をかけた、いかにも文化系の女子生徒二人はたぶん上級生。

「ああ！そのティアラ！もしかして月野さん？」

「ええ、そうです……………」

「やっぱり。私たちもさつき発表見てたよ。でもこうして近くで見るとほんとに綺麗だね」

「ありがとうございます……………」

「羨ましいなあ。ほら、天文学部なんて地味じゃない？部員の私
たちも地味だしね」

自嘲気味に笑う女子生徒二人にかぐやは「そんなことないです…
とはにかんだ。

ミスコンで優勝したかぐやは一躍有名人ってわけか。一位に選ば
れるくらいだから元から有名だったと思うけど。まあ、綺麗だし。

「そっちの彼は…………、もしかして恋人さん？」

「え！？いや、俺はその…………」

「彼は従兄妹の竹本くんです…。さっきステージに一緒に上がって
いました……………」

「ああ！二位に選ばれてた竹本くんか」

「そうです…………」

「ごめんごめん。私たちが悪いから顔はよく見えなかつたんだ」

あつそ。俺のことは褒めてくれないんだね。まあ褒められても困
るけど。

現在二時を過ぎているのだが俺たちがこの来客第一
号らしい。初来客に天文学部の部員二人は喜んでプラネタリウム
の準備に取り掛かってくれた。

「でも本当によかつたよ。もしかして誰も来てくれないかと思ひ始
めていたからね」

「そうそう。二人で頑張つて準備したのに
備オツケー。じゃあごゆっくりお楽しみください」
つと、準

暗い中部員の一人がスイッチをカチツと押す。

すると天井に張られた暗幕に向かって教室中央に設置された透明
の球体から光が零れる。

見上げると、そこには満天の星空が広がっていた。

「綺麗ね」

かぐやが言う。

「ああ」

それに小さく答える。

それからしばらくの間、俺たちは疑似的に創られた星空に見入り何も話さなかった。

真剣に星を眺めるのは生まれて初めてのことで、この時はおよそ無心で綺麗な夜空を見上げていた。

雫のことを忘れるくらいに。

「プラネタリウムで月は見れないんですか？」

かぐやが部員の女子生徒に問う。

「星は月よりももっと遠くにあるのね、それに地上に届く明るさは月よりずっと暗いの。だから月が明るい夜は星の観測は難しくくてできないのよ」

「そうですか……」

女子生徒の返答はかぐやの問いの答えになっているのか疑問だ。だがそれで納得したらしいかぐやは再び黙って上を見上げた。

俺はふと思い出す。

かぐやと初めて会った日のことだ。

俺、龍、御石、燕の四人を前にして“私と一緒に月に行きましょう”と、かぐやはそう言った。

それがどういう意味なのかはわからないし考えようとも思わない。でも、その言葉が心のどこかに引っかかる。俺は、本当はその意味を知っているんじゃないか。そんな錯覚を覚えた。

十分くらいプラネタリウムを鑑賞すると「ありがとうございまして」と女子生徒に礼を言って教室を出た。

執事服の袖から見えるアナログ式の腕時計の針は午後二時半を指していた。

「そう言えば焼きそば屋の会計はいいのかよ」

「ええ、少し時間をもらってきたの。あなたはこれからどうするの？」

「雫のピアノの発表を見に行く……………、かな。一緒に見に行くか？」

「……………そうしようかしら」
少し溜めてかぐやは言った。

生徒や文化祭を見に来た人たちは向かい側の棟、つまり一年から三年までの教室がある棟に集中して見に行っている。音楽室や生徒会室それにさっきの天文学部なんかの教室がある、今俺たちがいる棟はほんと静かだった。

結局ピアノの発表前に雫と話す機会はなさそうだ。

そう思いながら体育館に向かうために階段を下りていると「ねえ、ヒカル」とかぐやが俺を呼び止めた。

「ん？どうしたよ」

「私の話を聞いて」

「歩きながらでいいだろ。ほら急ぐぞ」

「聞いて　　ほんの少しだけだから」

先を歩いていた俺は振り返る。見るとかぐやは真剣な顔をしている。

階段の段差で20センチある俺とかぐやの身長差は無いに等しい。

ほぼ同じ目線で立ち、数秒の間俺の目をじっと見つめた後

かぐやは言った。

「私とお付き合いしてください」

呼吸が、心臓が、止まるかと思った。もしかすると少しの間本当に止まっていたかもしれない。

言った後も俺の目をまっすぐ見るかぐやの顔は、家で俺を踏みつけ罵倒する女王様の顔でもミスコンで優勝した時の恥じらい照れた顔でもなく

普通の女の子の顔をしていたと思う。

普段は綺麗で大人びて見えるその顔も、今は十六歳、年相応の女の子。

以前ベッドに押し倒された時、「冗談のように言った」あなたのことが好き」とは質が違う。

たぶんこれが告白ってやつなんだと思った。

「急にどうしたんだよ……」

九月初め、まだ夏は去ってくれないのか。俺はひどく汗を掻いた。そしてかぐやは

照れもせず、恥じらいもせず、本気に、

真面目に、俺の目から視線を逸らさずにこう言った。

「私はあなたに恋をしています」

大きく見開いた俺の目は閉じることをしなかった。眼球が渴いて涙が出てきそうになる。

そんな時、コツン……コツン……コツン……、と近くで足音が響く。

この棟には俺たちとさっきの天文学部の部員のほか誰もいないと思っていたが、足音は確実に俺たちがいる階段に向かってきている。

「誰か来るみたいだからさ……この話はまた後で……」

「逃げないで」

「いやでも……。それに雫のピアノが始まっちゃうよ」

早く体育館に行きたかったし、それにこの場から逃げたいと思っ

た。

頼むからここは引いてくれ。後でゆっくりお前の話は聞いてやるから。

しかし、次に聞こえた声はかぐやの声ではなく。

「ヒカル……………」

声が出た方に目をやると、そこには階段の上から俺とかぐやを見下ろす、メイド服から制服に着替えた月夜見雫の姿があった。

そして俺の目が雫を捉えるのとほぼ同時、俺の唇にはかぐやの唇が重ねられていた。

哀の交響曲07

どういうことだ。今、何が起きている。

俺の視界はかぐやの顔で遮られていて

「嘘でしょ……………」

震える声が聞こえる。

かぐやが唇を離し、視界が広がっていく。そして見えたのは逃げように駆け出す雫の後ろ姿、零れた涙の雫。

「雫っ！」

頭より先に体が動く。気付けばかぐやを置いて走り出していた。

「待ってよ雫！」

男と女だ、走って追いつけないわけがなかった。すぐに追いつき雫の腕を掴んだ。

雫は俯いて立ち止まるとすぐに口を開く。

「そっかあ……………。アンタは月野さんと付き合ってたんだね……………」

泣いているような、ひどく震える声。

「違うんだ！あれはかぐやが勝手に……………」

「アンタたちは付き合ってもないのにキスするんだ……………」

「だから！そうじゃないって……………」

「離してっ！」

震える声で叫ぶので俺は慌てて掴んでいた腕を離す。

かなり力が入っていたのか雫を掴んでいた掌が強張って固まっていた。

「ピアノの練習、付き合ってくれてありがとう……………」

「それは……………いいって……………」

「じゃあ、時間ないから……………」

言っと雫は歩いて行った。

俺はそのあとを追うことができずただその場に立ち尽くしていた。

俺は…馬鹿だ。

自分が好いている人の前で他の女とキスをするなんて

固まっていた手に力を入れて拳を作り、己の愚かさに我慢できずそれを壁に押し付けた。

俺の恋は、雫に思いを伝えることなく終わるのだろうか。

そんなの嫌だ。我慢できねえ。納得いくかよ。

「ごめんなさい」

後ろからかぐやの声が聞こえた。俺のあとを追ってきたのだろう。

「私のせいで」

「お前が悪いんじゃないよ。俺が悪いんだよ…」

「ごめんなさい」

「もういいから…」

「ごめんなさい」

かぐやのせいじゃない。そんなことはわかっているのに…。どうしてもこいつが憎かった。

憎かったけど…、でもこれは真剣に俺に思いを伝えようとした結果なんだ。どうしようもねえよ…。誰を責めることもできねえよ。

もう午後三時だ。

今頃雫はピアノの発表をしているだろう。

見に行きたかったな…。

ピアノの発表が上手くいったら

その続きを聞きた

かった。

でも、もう何もかも終わっちまったんだ。

雫がこの棟にいたのは生徒会室で制服に着替えるためだったんだ

な。

なんともタイミングが悪すぎる。

思えば俺と雫はいつも最悪のタイミング。なにも上手くいっていなかったんだな。それなのに雫も俺と同じ気持ちでいるなんて勝手に勘違いしていたんだ。

そっだよ。雫が俺のことを好きなんて勝手に思い込んでいた俺が馬鹿だったんだ。

どうってことはない。当たり前のことなんだ。

これまでは友達すらいなかった俺だ。そんな俺が誰かを好きになるなんて端から間違っていたんだ。

こんな俺に誰かを好きになる権利なんてなかったんだ。

馬鹿だな、馬鹿だよ、俺…。

「月夜見さんのピアノ……見に行かないの？」

「行かねーよ。今更どんな顔してあいつを見ればいいんだよ」

俺はようやく歩き出す。

とりあえず、今は一人でいたい気分だ。

誰にも邪魔されない場所に行きたい。

「どこへ行くの？」

「屋上」

「そこは立ち入り禁止じゃないの？」

「うるさいな。一人になりたいんだよ」

「……………ごめんなさい」

「ごめんかぐや。今はお前とは話せない。これ以上話したら、俺はこのどうしようもない苛立ちをお前にぶつけてしまう。」

屋上。

本来立ち入り禁止のここは俺が一人になれる場所だった。

そこへ続く階段を重たい足で登って行くと、少しだけ扉が開いていることに気付いた。

屋上で何度か昼飯を食べたことはあるが、それは教室がある棟の屋上だ。こっちの屋上に来るのは初めてで、扉が開いていることに疑問はなかった。どうせ警備のおじさんが見落としているのだろう。それに、今は何も考えたくない。

扉を完全に開く。

すると立ち入り禁止であるはずの屋上にポツンと人が立っていた。「ちえっ、誰かいんのかよ」

一人になりたかった俺は扉も閉めずに引き返そうと階段を一段降りる。

「何に迷う、愚かな人の民よ」

女の声だった。

振り返り扉の外、屋上を見るがそこにいる人は俺に背を向けて遠くの方を眺めている。

その女は赤や橙、金に銀の刺繍がされた和服、というか着物を着ていて身の丈はおよそ140センチ。顔は見えないので年齢はわからない。

「この月、仏滅の夜、此度千年の記憶が失われる」

背を向けたまま女の人は話している。

俺に向かって言っているのか、それともただの独り言なのか。

女の身長よりはるかに大きな着物が地面を這いゆつくりと動く。その人は振り返り俺の方を見た。

腰まで伸びた長い黒髪を風に揺らす彼女の顔が目に、脳に入ってくる。

そして　　気が付けば俺は屋上に立っていて、外は暗く夜になっていた。

何が俺の身に起きたのか理解できなかった。
屋上から見えるグラウンドでは後夜祭のキャンプファイヤーが燃えているのが見える。

そうか、文化祭は終わったんだ。
でもそんなの関係ねーや。早く帰って寝よう。

クラスのやつには悪いけど後夜祭に出る元気も気力も残ってねーよ。

閉めた覚えのない扉はなぜか閉まっていた。
そして帰ろうと歩き出した時　　独りで屋上の扉が開いた。

哀の交響曲08

「ここは立ち入り禁止よ」

一番聞きたかった声、もう聞けないと思った声。

独りでに開いた扉の向こうには月夜見雫が立っていた。

「ほら、なにポーっと突っ立てるの？後夜祭始まってるじゃない」
なぜ、どうして、お前がここに来るんだよ……。

言葉がでない。何を話していいかわからない。

三時前に分かれた時とは違って雫は明るい笑顔でそこに立っていた。
た。

俺が話そうとも動こうともしないのを見ると屋上へ一歩踏みし、
そして扉を閉めた。

「みんな心配してたよ。コスプレ喫茶のウェイター放ってこんなと
ころにいるなんて」

220

屋上の真ん中、フリネタリウム 疑似的星空ではない本物の星空の下、俺たちは向
かい合って立っている。その距離はほんの数センチ。

「月野さんに聞いた。たぶんアンタはここに居るかもって」

「ごめん……」

「なんであたしに謝るわけ？」

「……………」
「ごめん」

「あたしのピアノ聞いてくれてた？」

「……………」
「ごめん」

「もう、ヒカル謝ってばっかり。さては聞いてなかったな？」
言って雫は悪戯っぽく笑う。

どうして笑っていられるのか俺にはわからなかった。

胸が痛い、苦しい。

こんなに栗のことが好きなのに……。告白もできないまま俺たちの関係は終わるんだ……。

こんな気持ちになるのなら、もう会いたくなかった。話したくなかった……。

俺はてつきり栗に愛想を尽かされたとばかり思っていた。

「昨日の帰り言ったこと覚えてる？もしピアノの発表が上手くいったら　ってやつ」

ああ、覚えているぞ。

「実はノクターンでミスしちゃってさー。だからその続きは言えなくなっちゃった」

「そう、なんだ……」

「だからさ、その続きはヒカルが言ってくれない？あたしが言いたかったことは、たぶんアンタが思っていることと同じだから」

そう言って栗は一步俺に歩み寄ってきた。

身長差20センチ。栗は俺を見上げ、まっすぐ目を見て微笑んでいる。

もしピアノの発表が上手くいったら　。

その続き、栗は何を言おうとしたのか。俺は何を思っているのか。もしピアノの発表が上手くいったら、もしピアノの発表が上手くいったら　。

「俺と付き合ってほしい」

これが俺の答え。

その答えを栗にはつきり言った。

「俺は、栗のことが好きなんだ」

すると雫はにっこり笑い、「やっぱり同じだったね」と言う。
「あたしもヒカルのが好き。もうずっと前から。たぶん、アンタがここに編入してきた時から」

俺は雫のことが好きで、ずっと言いたかった。この気持ちを伝えなかった。

雫は、それに応えてくれた。雫の答えが聞こえたのに、雫は俺のことを好きだと言ってくれたのに。それは耳で止まり脳まで伝わるまでですごく時間がかかってしまった。

驚きからか、嬉しさからか、体は硬直してしまう。

「あたしたち、付き合おうか」

時間は例外なく流れていく。当たり前だ。

でも、制服に着替え文化祭の終わりを示している雫と違い、未だに執事服を着ている俺の時間は止まっていたんだ。それもずっと昔から。

今日という日、今という時、ようやく俺の中の時間が動き出した気がした。

「ねえ、ヒカルってば。聞いてる？」

「お、おう」

「今からあたしたち恋人同士なんだよ？」

「こ、恋人!？」

「当たり前でしょ、アンタがあたしに告白してきたんじゃない」

「いやまあ、そうだけど……」

見慣れた顔、ツインテール、華奢な体、雫の全てがこんなにも愛おしい。

「雫、好きだ」

「うん、知ってる」

「はは、なんだそれ」

「はあ…、やっと笑ってくれたね」

「え…」

「アンタずっと暗い顔してたよ。これから殺される食用の牛みたいな顔だったもん」

「よくわからないうえに嫌な例えっすね」

「そんな顔で告白されてもちっとも嬉しくなかったー」

「マジ？」

「マジ」

「えーっと、ごめん！」

「はいっ！だからやり直し！もう一回告白しなさい！」

「脅迫！？」

「いいから早く！返事はもう決まってるんだから」

言って、照れたのか顔を赤くする雫。それでも彼女は笑っていて

もう可愛いなチクシヨー！

「おっほん」

もう一度きちんと正面を向き直して、さあ言おう。

「好きです。俺と付き合ってください」

こうやって向き合って言う結構恥ずかしいのな。

そして雫の答えは…。

「“好きです”の前に“雫のことが”って入れてもう一回お願い」

「マジか！アレ言うの想像以上に恥ずかしいんだぞ！？」

「いいから早くう」

うぐぐぐ…。

気を取り直してテイク2。

「雫のことが…好きです。俺と付き合ってください」

恥ずかちー。恥ずかちーよお。

しかし雫は…。

「えーっと、次は“大好きだよ雫”をお願い」

「大好きだよ　　って、なんか趣旨変わってね？絶対変わって
るよね!？」

「あ、ばれた？あははは」

「あははは、じゃねーよ！恥ずかしすぎて死ぬかと思ったんだから
な！」

「めんごめんご」

「謝る気ねーだろ」

「ふふっ、でもやつといつものヒカルに戻ったね。やっぱり笑って
るヒカルの方が好きだよ、ちゅっ」

「なっ…」

そりゃあ不意打ちすぎってもんでしょ。

頬に雫さんの柔らかい唇が…。発狂もんだなこれ。

「できれば頬つぺたじゃなくて唇の方が嬉しいのですが…」

「だーめ。今日は月野さんと間接キスになっちゃっもん」

「そっ…か……………」

「ああ、気にしないで！月野さんとはきちんと話したから！べつに
あたしはもう気にしてないし」

俺が知らない間に雫はかぐやと話したんだな。

かぐやも納得してくれたようだし、これで俺と雫は堂々と付き合
えるんだ。

って、アレ？俺まだ返事聞いてない。

「返事。俺はちゃんと告白したんだから返事してくれよ」

「えー。わかってるからもういいじゃない」

「なんかそれずるい」

雫はふふっと笑い、背を伸ばして俺を見上げた。

そして、今まで見てきた中で一番可愛い笑顔で言ってくれた。

「付き合っただげる」

「なんか上から目線っすね」

「えー、違った？」

「全然違った」

テイク2。

「あたしもヒカルのこと大好きだよ？」

「ぐはっ！」

「ちよつとお、なに吹き出してんのよ」

「あまりの可愛さについ……」

「それは………ありがとう」

なんとか成功した俺たちの告白。

ちよつとスムーズにいかなかったけど、まあ結果オーライ。これ
でようやく俺と雫は恋人同士になれたんだ。

まだ実感は沸かないし、べつにこれまでと変わったところもない
けれど、俺たちの関係が“友達”から“恋人”にランクアップした
ことはきちんと胸に刻んでおきたい。

あと今日は顔を洗わないでおこう。なぜなら雫たんが頼っぺたに
キスをしてくれたからだよ。

屋上からはグラウンドのキャンプファイヤーがよく見えて、俺た
ちは後夜祭が終わるまで二人で屋上にいた。

ここは立ち入り禁止だよってのは容赦してくれ。ばれなかったら
いいんだよ。

*

後夜祭が終わり、寮生の月夜見雫は校門で竹本光を見送る。

級友の土御門と二人歩いて帰る竹本光。

これからは明るくて楽しい日々が続くと思っていた。

九月第二週、土曜日の夜。

興奮冷め止まぬ気持ちで眠る月夜見雫。

翌朝、竹本家から離れた隣町で、竹本光の死体が発見されるとも知らずに。

哀の交響曲08（後書き）

哀の交響曲^{シンフォニー} 完

価、ストーリー評価してくださった方、本当にありがとうございます。
書き続ける活力になってます！

ではまた。 k a g u y a

夜の追想曲01（前書き）

夜の追想曲^{リコルダンツァ}、最終章になります。

九月二十三日のお話です。秋分の日、お彼岸の中日ですね。残酷な描写が含まれます。苦手な方はご注意ください。

この物語は竹取物語の固有名詞等をお借りしています。当然フィクションです。登場する個人、団体：以下省略。

夜の追想曲 01

文化祭の次の日、つまり日曜日。目を覚ました私、月夜見事はこれまで生きてきた十六年の中で最も目覚めの悪い朝でした。

理由はただ一つ。寝不足、それだけでした。眠っていたのは一時間くらいだと思います。

それでも普段通り朝七時には目を覚まし、顔を洗おうと洗面台へ。鏡に映る私の顔はひどくにやけていました。

だって 約半年間想い続けた人と恋人同士になれたんですもの。

冷たい水が重い瞼を少しばかり軽くしてくれたので意識的に携帯電話を手にしました。

何とも言い難いこの気持ちさを彼、竹本光へ電子文書として送りました。つまり、メールです。

しかし返信はなく、彼はまだ眠っているのだと思いました。

時間は過ぎ、お昼になっても返信は来ず。彼、休日とはとことん寝るタイプなんだな、と私は呆れました。

彼からの返信を待っている時間はこれといって苦ではなく、遠足の日を待つ小学生のような、そんな心が浮き立つ感じでした。

今日は会えるかな、月曜日まで会えないかな、顔が見たいな、声が聞きたいな。

そんなことを思いながら返事のメール待っていました。

でも、夕方になっても返信は来ません。

心躍りはどこへやら、私は少し苛立った気持ちで彼に電話をかけました。メールに気付いていなかった、なんて言ってきたら何を言っただらう。

数回のコールの後、聞こえてきたのは機械音。

「この電話は現在電波の届かない
呆れた。まさか充電切れ？付き合い出した翌日に連絡も取らない
つもりなの？」

もう知らない。月曜日になったら学校できつく叱ってやる。

そして月曜日、結局連絡をよこさなかった彼に呆れながらも心の中ではやっと会えることに喜んでいました。

たった一日会わなかっただけでこんなにも私の心を乱すなんて、絶対に許さないんだから。

でも、朝のホームルームが過ぎても一時間目の授業が始まって、帰りのホームルームが終わっても、彼は学校に姿を現しませんでした。おまけに土御門の馬鹿野郎も来ないし、月野かぐやも学校休んでいたし、これじゃあヒカルのこと聞けないじゃない。

頬を膨らませたい気持ちだったけど、生徒会役員の私は文化祭の後片付けで忙しい。それに生徒会長の希先輩の今日はお休みしているし。みんなそろって燃え尽き症候群ってやつかしら？

はあ、今日は疲れた……………。

それからヒカルは連絡をしてきません。ここでようやく何かがおかしいことに気付きました。

もしかして、付き合えたことに喜んでいたのは私だけ？

今頃ヒカルは月野かぐやと
。 。
一度ネガティブなことを考え出すともう止まらず、ありもしない最悪の事態ばかりが頭の中を埋め尽くします。

次の日も、その次の日も、ヒカルは学校に来ませんでした。ヒカルはおるか、彼と仲が良かった人たち
土御門、月野かぐや、

玉枝龍、子安燕も文化祭が終わってから一度も学校に来ていませんでした。

私はいてもたってもいられず一年二組の教室へ向かいました。そう、彼が仲良くしていた人の中でただ一人、御石衣だけは学校に来ているからです。

しかし、そこで会った御石衣は私の知っている元気で明るい少女ではなく、目には生気が宿っておらず、顔も手入れをしていないようにボロボロでした。

何を聞いても彼女は「知らない」の一点張りで、しかしそれは何かを知っているからこそその言葉だと思いました。

ヒカルの家に行こうとも考えました。でも住所を知らなかった私はバスに乗って隣町、つまり月野かぐやの家へ向かいました。

月野ブランドの所持者の家、住所を知るのに時間はかかりませんでした。

しかし、月野かぐやの家に足を運んでみると、そこには大勢の刑事と立ち入り禁止のテープ。

そこで刑事の口から耳にした、想像もつかない状況。

月野邸の敷地内で三体の遺体。

体液を失って干乾び、いたる個所に植物の物と思われる根が絡みついた変死体が二体。

首の頸動脈を刃物で切られた死体が一体。

何か嫌な予感がした私は、刑事部長である父に電話をしました。問い詰めると父は口を重くして話してくれました。

死亡したのは富士見商業高校の生徒三人。玉枝龍、子安燕、竹本光。

玉枝龍と子安燕の遺体が発見されたのは富商の文化祭の前日の朝。

竹本光の遺体が発見されたのは文化祭があつた翌日の朝。

加えて三人の遺体の発見場所である月野邸の敷地内では先月中にも数体の変死体が発見されていた。

この事件が世間に発表されたのは九月二十三日。

文化祭が終わって一週間が経とうとしているこの日は秋分の日。

昼と夜の時間が同じになる日
夜の長い時間が始まる日。

今日この日、私、月夜見雫は体調不良を理由に学校を休みました。

夜の追想曲02

ヒカルが死んだ。

私には、その言葉の意味が理解できませんでした。

悲しいはずなのに、寂しいはずなのに、苦しいはずなのに、切ないはずなのに、胸がえぐられるはずなのに、絶望するはずなのに

私は涙も出ませんでした。

文化祭の日の朝、ヒカルと撮った写真が学生寮の私の部屋の机の上に飾られていて、写真の中のヒカルは顔を引き攣らせていてひどく滑稽な写真です。

その写真を手にとって私が写っている部分を破りました。

メイド服姿の私は執事服姿のヒカルの腕に抱きついていて、私はもうヒカルには触れることもできないのに、写真の中の私が写真の中のヒカルに触れていることにひどく嫉妬しました。身を裂く痛みを、二人の写真へ当てつけます。

世間に発表されたこの事件の内容。

富士見商業高校の生徒三名の遺体を発見。

二名は死因不明の変死体。一名は出血多量による虚血性ショック死。

ふざけるな。

名前も明かさず、発見場所も出さず…。

虚血性のショック死？ヒカルは頸動脈を切られているじゃない。

これは殺人よ。

月野かくやの実家の敷地内で発見されたとなぜ報道しない。隠蔽？なぜ？

決まっている。月野ブランドがやったことなの。財力も権力もあ

る月野ブランドなら事実を隠すことくらい造作もないはず。

玉枝龍と子安燕も月野に殺されたに決まっている。

死んだ三人の共通点。それは三人の父親が月野ブランドの重役だということ。

ここまで情報が揃っているのなら導き出される答えは一つ。

犯人は月野。

私は思う。

月野に男子が生まれなかったから、次のトップは月野の実弟であるヒカルの父親、あるいはヒカル。だから月野はヒカルを殺した。ヒカルの両親は海外旅行でいないと言っていたけど、たぶんどこかで月野に殺されている。

玉枝龍と子安燕が殺された理由。それは二人が何らかの理由で月野がヒカルを殺そうとしていることを知ってしまったから。

体調不良を理由に学校を休み、しかしそれは嘘ではありません。

本当に体調は優れませんでした。何も食べていないのに吐き気がしたり、夜は眠れず目は見開いていました。

学校が終わる時間に一年二組の教室に行きました。

「御石さん、ちょっといい？」

力なく椅子に座っている御石衣はひどくやつれていて死んだ魚のような目をしていました。

この様子、御石衣は知っているんだ。なぜヒカルが死んだのかを。

私は月野かぐやに会いに行く。復讐する。

「来い」

返事はなく、立ち上がるうともしない御石衣を無理矢理引っ張り富士見商業高校の学生寮、私の部屋まで連れて行きました。

御石衣は抵抗する力もなくただ私に引かれるだけでした。

「ねえ、なんでアンタだけ生きてるわけ？ヒカルたちは月野に殺されたのに」

「…知らない」

「アンタの父親も月野ブランドの重役なんですよ？だったらアンタも死ねよ。割に合わないじゃない、ヒカルは死んだのに」

「…知らない」

「知らないしか言えないの？月野かぐやはどこ？」

「…知らない」

ちっ…。この女、頭がいかれている。

ヒカルは死んだのに、どうしてお前なんかが生きている。役に立たないなら死ねばいいのに。

御石衣は頬を叩いても何も言わない。クッションを投げつけても何も言わない。踏んでも、蹴っても、本や食器を投げつけても、フオークやナイフを投げつけても、何も言わない。

「少しはあたしの役に立てよ」

顔中を血で汚して倒れる御石衣は口を開くどころかまったく動かない。

喉を踏みつけると御石衣は血を吐いた。

私の部屋を汚しやがって。さっさと死ね。

結局御石衣からはヒカルが死んだ理由どころか月野かぐやの居場所すら聞き出せなかった。

もしかすると月野かぐやはヒカルの家にいるかもしれない。月野の家は警察が囲っているし、ヒカルの家にいる可能性はある。

そう思った私は教師にヒカルの家を聞き出した。

どうして初めから学校の教師に聞かなかったのだろう。馬鹿だな、私。

役に立たない御石衣は、しかしこのまま部屋にいてもらっても困るので部屋から引きずり出して二人でヒカルの家へ歩いた。

夜の追想曲03

光の家まで歩いて十分。

外見は普通の民家。ここがヒカルの暮らしていた家、月野かぐやと暮らしていた家か。

けっ、反吐が出る。どうして月野かぐやがヒカルに一番近い場所にいる。許せない。憎たらしい。妬ましい。

ヒカルの家を前にしてようやく御石衣が重い口を開いた。

「ヒカルくんの家に何の用…？」

こいつまだ生きているのか。うざい、早く死ね。

顔と制服を汚く血で汚して。そんな汚い格好で恥ずかしくないの？お前なんか死んでしまえ。

「月野かぐやと話があるの」

「やっ……やめてよ…！月野さんまで痛めつける必要…ないよ……」

「汚いなあ…服が汚れるから触らないで」

「やめて……月野さんは関係ない……悪いのは…あたし……あたしは龍くんと燕ちゃんを助けることができた…」

玉枝龍と子安燕、だけ？助けることができたのにどうして。ヒカルは？ヒカルは？

私の中で何か切れる音がした。

「痛いっ…！離して…」

「黙ってなクス女」

乱暴に御石衣の髪を掴み家の中に引きずり込む。

鍵は、開いている。中に誰かいる。

靴を脱ぐのも面倒。そのままじゃ。

御石衣を引きずり廊下を歩く。突き当り、リビングには用意され

足音は止まる。

気が付けば、私は月野かぐやを床に押し倒していた。
無表情の月野かぐやは、それでもやはり綺麗な面で…。

サクッ…。

手に持っていた包丁を脇腹に一突き。

吐血する月野かぐや。それでも、それさえも絵になるほど綺麗な顔。

「月夜見さんっ…！何してるんだよ…！！」

すぐさま御石衣が私を羽交い絞めにして取り押さえてきた。

「汚いっ！あたしに触るなっ！」

乱暴に両手を振り回す。

羽交い締めにする御石衣の腕を振り払おうと、両手を振り回しているうちに、御石衣は動かなくなっていた。

床には首から大量に血を流している御石衣の姿。

「あはっ…あははは…」

やっと死んだか。こいつ目障り過ぎて呆れた。

「さてと…」

脇腹を刺されて身悶えする月野かぐやの腹の上に跨る。

お前には聞きたいことがたくさんある。話すもん話してから死ね。

「彼の…ごほっ…ごほっ…ごほっ…晩御飯を…」

「あーあ、きつたねえお前の血があたしに付いてしまったじゃない。どうしてくれんのよ」

「ごほっ…」

「キモ、なんだよお前

はあ、まず一つ目。どうしてヒ

カルを殺した？」

夜の追想曲04

ピクリともしない月野かぐやの体からドクドクと黒い血が流れ出る。

「きつたねえ……死んでも血は流すんだね、化け物のくせに」

グチャグチャに潰れた顔、飛び出した眼球。

眼球を失って陥没した片眼から、原形を亡くした頬……であろう場所に血が流れる。

黒い血は黒い涙のように。

「はあ？アンタなに泣いてんだよ……ぶっ……綺麗な顔は涙も似合うって？ははは……はあ……あたしは涙も出なかったのに……ヒカルが死んでも涙も出たかったの……！どうしてお前が泣いている……！泣きたいのはあたしなんだよ……！」

気持ち悪い。泣けば許されると思ってんの？綺麗なアンタが泣けば同情も誘えるって？

はっ、馬鹿か。

気に食わないから手を突っ込んで残っていたもう一つの眼球もえぐり出してやった。

そしたらまた黒い血の涙を流して。

気に食わない、気に食わない、気に食わない。

どうして私の目からは涙が零れない。

泣きたいほど辛いのに。ヒカルがいないと寂しいのに。

私はここにいるよ。早く戻ってきてよ。わかるでしょ？あなたに会いたいよ。

動かなくなっただっていい。話せなくなっただっていい。心配しなくていいんだよ。それでも私はあなたを愛しているよ。

頑張つてご飯も作るよ。もっと可愛くなるよ。もっと綺麗になるよ。あなたに好きになって欲しいよ。

顔が見たいよ。声が聞きたいよ。触れ合いたいよ。あなたに会いたいよ。

トン……………トン……………トン……………。

澄んだ足音が静かなこの空間に響く。

誰かいる。

キッチンから廊下の方を見ると、

「うわああああああああああ！！誰だっ!?!」

長い黒髪、蒼白い肌、長いまつ毛、切れ長の目、赤と橙、金と銀の和服、小さな日本人形を人間サイズで再現したような、そんな女。

和製ホラー映画のお化けのような、妖怪のような、しかし、女はそんな怪奇とは違い、人間の女としてとても綺麗な顔をしていた。

月野かぐやよりもずっと綺麗で、その女は感情の宿らない目で私の方をずっと見つめていた。

「アンタ誰だよ…あたしに何か用？」

「愚かな人の民、しかし悔いることはない。今宵、千年の時間を帰する」

小さな桜色の唇が動く。女の声は静まるこの部屋に広く響き渡り木霊する。

その残響は、耳というよりも脳に直接入ってくるような、そんな感覚だった。

女の声が頭の中を彷徨う。

ブチッ…。バリバリバリ……………。

その時、身動きをしなくなって横たわっている月野かぐやと御石衣の体に異変が起きた。

夜の追想曲04（後書き）

夜の追想曲 リコルダンツァ 完

夜の追想曲EX

どうも、kaguyaです。

これをもちまして「月夜の序曲編」は完結です。と、言いますか…これ以上書けません（笑）

シリアス描写ってどう書くのかわかりません。漫画本ばかりで活字の本を読んでいないからです。最近家庭教師のヒットマンガリボンするやつにハマっています。

あ、あと今更になってエウ カセブンってやつを全部見ました。内容はよくわからなかったけど、もうすごく感動しました。ドミクがイケメン過ぎて生きるのがつらい。

なんて私の近況はどうでもいいのです。

はい、さて。

ここまで読んでくださった方「月夜の序曲編」はいかがでしたでしょうか。感想とかなんでもいいので一言二言いただかえれば嬉しいです。

タイトルの“月夜”っていうのは月夜見雫ちゃんの名前から取って付けました。私の中では綺麗な“月”である月野かぐやを見上げて涙の雫を零す…という感じです。だから月夜見雫。単純ですかね。

えーっと…これバッドエンドですね、はい。私は嫌いです、バッドエンド。

でもハッピーエンドになるのは第8部だけですかね…予定では基本ラブコメを書きたいのですが本当にどうしてバッドエンド？って感じです。最後の方は書いていてモヤモヤしていました（笑）

で、次は第2部の話になります。

第1部だけでは意味不明過ぎて謎だらけです。次の「仏前の開花

編」ではもう少しヒントが得られるかと思えます。

もうお気づきですね、仏前の開花…仏様。そうですね、次は御石衣ちゃんのお話です。

竹取物語は…みなさんたぶんご存知ですよ。御石衣は“御石の仏の鉢”と“火鼠の皮衣”から名前を付けました。

本当は“皮衣”は“裘”という字を当てるんですけど、その辺はまあいいやってことで。

*

ここからはおまけです。バッドエンドのお口直しと思ってください。

光「どうもっ！ドMでロリコンの竹本光です　　ってこの紹介文おかしくない？おかしいよね？ねえ作者さん！？」

変「いやいや爺さん、なんも間違っへんて。おっと俺の番や、頭脳明晰、容姿鍛錬、才色兼備の土御門とは俺のことや！」

光「いやいや、お前はただの変態だろ。名前表記も“変”になるし」

変「な、なにー！？」

女「うるさいわね。少しは静かにできないの？」

光「かぐやさんの名前表記が“女”になってるんですけど！モブキヤラ扱い受けてるんですけど！その辺の女子生徒Aになってるんですけどぉー！」

女「馬鹿ね、これは女王様の“女”よ」

光「あ、そっすか　　はいっ！ここまで見てくださった方、本当にありがとうございます！まだまだ話は続くのでよかったですら今後も見てくださいね！」

衣「ふっふっふ、話は続くんだよ。次はあたしっ、御石衣がメインヒロインだよ！次って言うか今回もあたしがヒロインだったけどね？」

雫「何言ってるのよ。どう考えてもあ・た・し・がヒロインだったじゃない。まあ、次もあたしがヒロインで決まりね。だってあたしはヒカルの運命の人？って言うかDestiny？やだ、恥ずかしいっ！」

光「恥ずかしいのはお前の頭の中だ」

雫「あっ、ヒカルじゃない。あたしたち今でも恋人だよねっ？ね？」

光「えっ…いや、まあな……」

雫「聞いた？ねえ、聞いた？あたしとヒカルは恋人同士なんだってー」

女「ふんっ」

光「あ痛っ！足の指踏まれた！ピンポイントで足の小指踏まれたー！」

女「なにかしら？あなたは私に踏まれると痛みを感じるどころか欲情するのではなくて？」

光「お前の中での俺の認識最悪っすね」

雫「えっ…やっぱりヒカルって…え、Mだったの？」

光「違うから！いや違わないけど！今はそんな話はどうでもいいよ！」

衣「月野さんも月夜見さんも馬鹿だなあ。ヒカルくんがそんな身の毛も弥立つような変態なわけがないじゃん」

光「ごめん御石…俺はそんな変態なんだよ……女の子に踏まれると喜んじまうような、幼女を見るとつい触れたいくなるような変態なんだよ……」

衣「へ？なにか言ったかい？」

光「いやべつに」

燕「ちよつとお、燕たち無視してなに話進めてるわけ？」

光「龍に燕、お前たちもいたのか。てゆうか何も話は進んでないけどな」

龍「いえいえ、僕たちのことはいいのでどうぞ三人と話してください」

変「三人！？月野さんと雫ちゃんと御石さんと……俺は！？なあ龍、

俺は!？」

龍「ああ土御門くんもいたんですか」

死「そりやないわ　　　　　っていうか俺の名前表記が“死”に変
わってるやん!変態の“変”から、死ねよこの変態、の“死”に変
わってますやん!」

光「取り乱しながらも冷静な事故分析だな。死ねよこの変態」

死「こんのラッキードスケベ爺があ!!!!」

光「ラッキー爺さんは許すけどそれは許さん」

死「ぐはあっ!足踏まれた!ピンポイントで足の指全部踏まれたで
!」

光「それピンポイントって言うのか?」

生「許すまじ!」

光「あつ、土御門の名前表記が“生”になった」

龍「それは、お前なんて一生童貞なんだよこの変態野郎、の“生”
です」

光「だめええええ!爽やかイケメンの龍の口から童貞なんて言つち
やだめえええええ!」

龍「そんな…僕は言われるほどの者ではありませんよ」

光「そうか？俺が見てきた中では一番イケメンの男だけだな」

龍「えーっと…それはどうも」

腐「キターーーーーー！！！！」

光「よお腐女子、お前ら帰って寝ろ」

腐「竹本くんと！」

腐「玉枝くんが！」

腐「キヤー！」

腐「玉枝くん攻めて！いや、突いて！」

光「あんたら何言ってるの！？そうならもう放送禁止ですよ！？」

腐「いいの！頭の中で放送するから！」

光「もうお前たちにはついていけねーよ…」

雫「ヒカルが……受け……あつ、鼻血……」

光「雫うー！戻って来おーい！妄想世界から戻って来おーい！あ、それと攻めの反対は受けじゃないよ？」

雫「戻って来い………来い………恋………ポッ………」

光「…なに赤くなってるんすかね」

燕「だからあ、燕も話に入れろっての」

衣「残念だなー燕ちゃん。燕ちゃんの出番は第3部なんだよね、えへへ。次はあたしがメインヒロインなんだあ」

女「あら御石さん、私とヒカルは婚約しているの。どうあがいても私がメインヒロインよ」

衣「それって親同士の口約束程度だったよねー？」

女「な、なんですって…」

衣「それに月野さんみたいに貧相なおっぱいでヒカルくんを満足させてあげられるのかな？」

女「おっ…おっぱい…？はっ、馬鹿ね。ヒカルはロリコンなのよ？小さな胸の方が好きに決まっているわ。そうでしょ、ヒカル？」

光「コメントしづれーよ！なんて言えばいいの俺！？」

衣「ほら見て！あたしのおっぱい大きいよ！」

光「うわっ！何やってんだよ御石！」

変「うひょひょひょ！」

光「おい変態、もとい土御門！奇声発してないで助けてくれよ！か

ぐやと雫が俺の目を潰そうと襲いかかってくるんだ！」

龍「おやおや、彼も大変ですな子安さん」

燕「ふーんだ。燕に話しかけてくれるのは龍だけね。マジ萎える」

龍「ずいぶんとご機嫌ななめですね……」

燕「ふんっ。第3部ではヒカルくんのことメロメロにしてやるし。てゆーかさあ、ヒカルくん以外にいい男いないの？富商って」

龍「……」

燕「なにしょぼくてんの龍？キモイんですけど」

龍「いえ、なんでもありません……」

雫「そんなことより！ねえ聞いて！」

光「おお、態度急変しやがった。危なく目を……ってかぐや！お前も落ち着けよ！それで御石！寄せて上げるのはもういいからっ！俺脚フェチだからっ！」

雫「おっほん。読者のみなさん、月夜の序曲編が完結する今日！なんとPV、ユニーク共に過去最高の数字をいただきました！本当にありがとうございます！それでは第2部、仏前の開花経編でまたお会いしましょう！」

光「なに綺麗に締めくくろうとしてんだよ。それは俺の役目
ってかぐやが襲ってきたー！！」

女「待ちなさいヒカル、あなたは私だけを見ていればいいの。目移りなんて許さないわ」

光「ちよつ、まっ、かぐや……アッー！」

変「爺さん南無南無。って最後まで俺の名前表記“変”のままなんやけど…。せめて“土”とかにしてほしいんやけど、なあ作者さん…」

*

はい、これで月の記憶*月夜の序曲編*は完全に終わりという形にしたいと思います。

ここまで読んでくださった方、できれば第2部も第3部も、もっと言えばこの物語が完結するまで見てください。

最後に。

この小説を見てくださった方、評価してくださった方、本当にありがとうございます。k a g u y a

夜の追想曲EX（後書き）

月の記憶* 月夜の序曲編* 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7152x/>

月の記憶*月夜の序曲編*

2011年11月20日00時17分発行